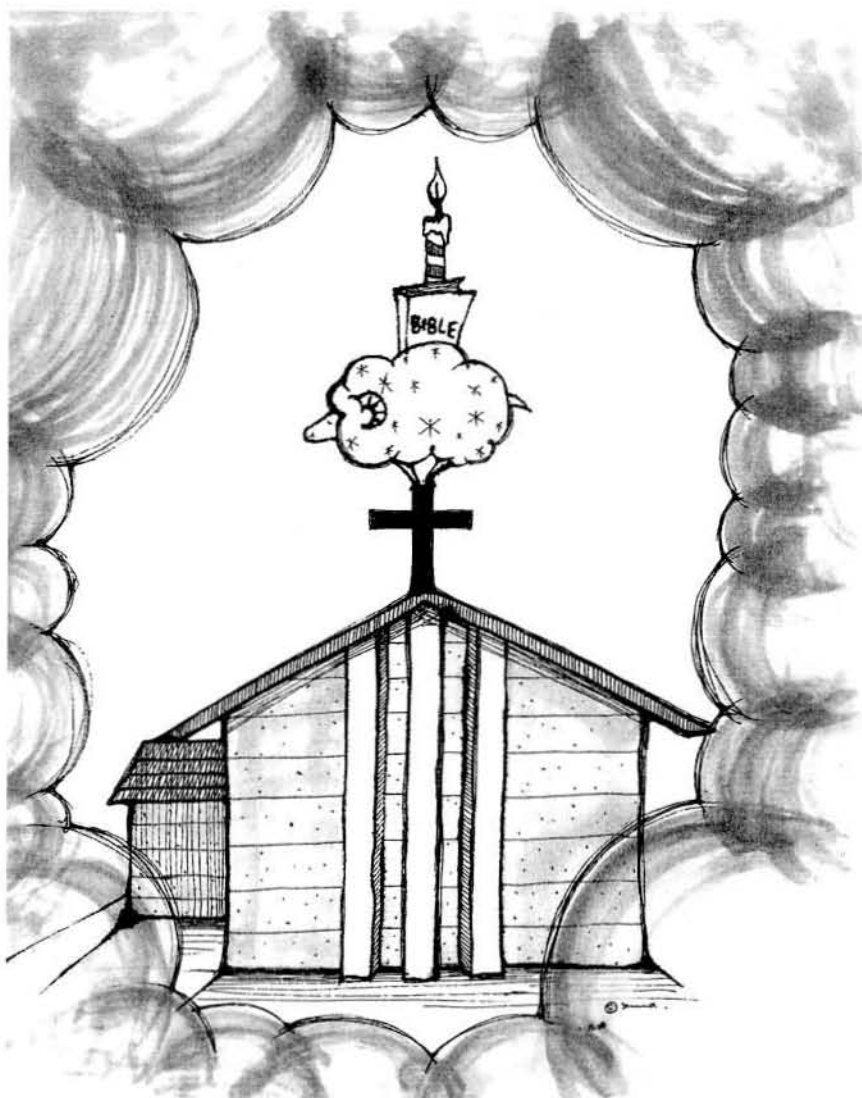


教会学校教案誌

2009.4.5.6月号



No.33

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2009年4～6月カリキュラム（第33号）

—『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
4月5日 受難週 進級式	キリストの受難	—	—
		ヨハネ19:28-37	ヨハネー4:9
十字架において神の小羊としてささげられた主イエスを仰ごう			
12日 復活祭	復活のキリスト	—	—
		ヨハネ20:24-29	ヨハネ20:27
復活の主イエスが疑い深いトマスにも現れた。復活の主イエスを信じて歩もう			
19日	第三部 生活の道	問37	ハイデ2、86、90、ウ大97
	感謝の生活	ヨハネ12:1-8	コリント二5:14前半
主が救いの道を与えてくださった。主の恵みに感謝して生きる道を歩もう			
26日	感謝としての服従	問38	ハイデ91、ウ大97、ウ小39
		ローマ6:12-23	コリント一15:55
罪から解き放たれたことを喜び、感謝して、神のしもべとして歩もう			
5月3日	十戒 —感謝の道標	問39	ウ大95、97、98、ウ小40、41
		申命記6:16-25	申命記6:17、18
十戒は神から神の民への愛の贈り物、神の愛の言葉。神の愛にこたえて歩もう			
10日 母の日	神と人への愛	問40	ウ小42、ハイデ93
		マルコ12:28-34	マルコ12:30、31より
神の愛にこたえて、わたしたちも愛することに生きる。神と人を愛する愛に			
17日	贖いのみわざ —過越	問41、42	ウ小43、44
		出エジプト12:21-27	出エジプト20:2
十戒の根拠である神のみわざ—過越—を学び、神のくすしきみわざを仰ごう			
24日	過越の成就 —キリスト	問41、42	ウ小43、44、ハイデ1
		ローマ6:1-11	ローマ6:11後半
十字架のキリストにおいて贖いのみわざが成就した。キリストに結ばれて歩もう			
31日 聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	—	—
		使徒言行録2:1-13	使徒言行録2:4
聖霊によって新約の教会が生み出された。聖霊に生かされる教会として歩もう			
6月7日	第一戒 神を神とする	問43、44	ウ小45、46、47
		マタイ4:1-11	出エジプト20:3
神を神とする戦いに勝利された主イエスに結ばれて、神を神とあがめて歩もう			
14日 花の日	第二戒 刻んだ像の禁止	問45、46	ウ小49、50、51
		イザヤ46:1-13	出エジプト20:4前半、5前半
主なる神は生きておられる。偽りの神々しりぞけ、まことの神をあがめよう			
21日 父の日	第三戒 神の御名	問47、48	ウ小53、54、55
		マタイ7:21-23	出エジプト20:7前半
神の御名を唱えることで過ちをおかさない。神を正しくたたえ、神に祈ろう			
28日	第四戒 主の日の安息	問49、50	ウ小57、58、59
		申命記5:12-15	出エジプト20:8
主イエス・キリストを礼拝する主の日の喜びとその安息を分かち合おう			

も く じ

2009年4・5・6月カリキュラム	
まえがき	大西良嗣 4
巻頭説教	鈴木牧雄 5
日曜学校・教会学校訪問	
鈴蘭台教会日曜学校の紹介	8
特別寄稿／諸教派の教会教育事情	
さらなる成長をめざして	本澤敬子 10
2008年度中部中会教会学校教師研修会講演	
DVD『日曜学校から始まるキリスト教教育の歩み』	
から見えてくる我々の課題	相馬伸郎 13
本誌の基本方針	
教会（日曜）学校像について	相馬伸郎 24
副読本のご案内	27
『いのちのパン』（「子どもカテキズム」による聖書日課）のご案内	28
聖書研究・説教展開例・分級展開例	29
4月 5日	30
4月12日	38
4月19日	45
4月26日	53
5月 3日	63
5月10日	72
5月17日	80
5月24日	89
5月31日	97
6月 7日	106
6月14日	115
6月21日	124
6月28日	132
2009年7・8・9月カリキュラム	140
2009年度年間カリキュラム	141
自由募金のお願い	143
執筆者よりひとこと・あとがき	144

まえがき

大西良嗣（大会教育委員会委員、高校生夏キャンプ実行委員）

【夏を征する者が受験を征する!?!】

私が高校生の頃、学校や塾・予備校でこのように言われました。「夏を征する者が受験を征する。」長い夏休みの間、休まずに受験勉強した者こそが、希望の学校に合格することができるという意味です。このような標語がまことしやかに語られた背後には、受験に勝利し、偏差値のより高い学校に合格することが、より良い人生を約束するという幻想があります。この「受験」にまつわる神話は、現在の高校生にも大きな影響力を持ち続けています。まだ人生経験の少ない高校生たちが、このような人生観・世界観の中にどっぷりと浸かっているとき、それとは違った世界観に生きるように導くことは容易ではありません。現代の日本社会には、目立った迫害がなく、キリスト教信仰を持って生きることには障害がないように見えます。しかし、高校生たちが真実にキリスト者として生きていこうとするときには、「受験神話」の世界観を捨てるという大きなハードルがあります。有神的世界観に生きることは、文字通り「人生を賭けること」だと言って良いでしょう。

【全国高校生夏のキャンプ】

聖書的な世界観からかけ離れた世界観の中にどっぷりと浸かった高校生たちのために、充実した信仰の教育が必要です。しかし、高校生たちの置かれている状況は決して一様ではなく、信仰に対する姿勢、聖書や教理の理解の程度も様々です。各教会・中会が、高校生への信仰教育に苦慮し、苦戦を強いられています。

このような中、昨年10月の定期大会で、2009年度に行われる全国高校生夏のキャンプの開催が可決されました。改革派教会が、高校生の信仰教育のために、施設、資金、人材を費やして、本気になって取り組む第一歩とな

ることでしょう。昨年8月に開催された中部・東北中会合同の高校生キャンプ（Summer Days 2008）には、他中会からの参加者も集い、全国から高校生が集まることの恵みがすでに確認されています。

このキャンプの特徴は、いくつもあります。その中でカギとなることを一つだけ記します。それは若いスタッフと高校生たちの信仰的な「交わり」です。キャンプのプログラムを見ると、ほとんどの時間が「交わり」のために使われています。聖書の言葉が語られるのは、夕ごとに行われる集いの中の説教と、高校生にも理解しやすい言葉で歌われる賛美の歌詞によります。「交わり」は、人格と人格の関係を形成するために有効な手段です。「交わり」の中で、高校生たちは、自分たちより少し先輩である若いスタッフがクリスチャンとしてどのように生きているのかを見ています。そして、夕ごとの聖書の言葉を聞いた後には、一対一の語り合いがあります。それは、ただ知識を伝えるための語り合いにはなりません。どのような世界観を生きているかが問題になります。

【夏を征する方が人生を征する幸い】

「受験神話」の中で生きている高校生たちが、勉強を離れて夏のキャンプに参加することは、勇気のいることです。しかし、「受験神話」の世界観を捨て、創造と摂理の主に、夏を征していただくことこそが、最も輝く人生へと通じています。夏を征してくださる方に私たちの人生を征して頂く幸いを、高校生と共に分かち合っ

て行きたいと願うものです。

（滋賀摂理伝道所宣教師）

※ 2009年7月28日(火)～31日(金)の日程で、全国高校生キャンプ（Summer Days 2009）が開催される予定です。

「御言葉を宣べ伝えなさい」

—テモテへの手紙 二 4章2節による説教—

鈴木牧雄（東京恩寵教会所属湘南恩寵伝道所協力牧師）

御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。

（テモテへの手紙 二 4章2節）

とても有名な聖句です。たとえ状況が悪くても、私たちの立場が悪くならうとも、苦難や迫害が襲って来ようとも、勇気を振り絞ってとにかく伝道に励みなさい。そのように伝道に駆り立て、信仰の弱い私たちを叱咤激励してくれている聖句として、多くの人が座右の銘にしているのではないのでしょうか。しかしこの聖句は、本当に伝道命令なののでしょうか。

テモテへの手紙二は、使徒パウロが若き伝道者テモテを教え励ますために書いた手紙であり、4章2節と並んで3章16節もとても有名です。

「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。」

神の御言葉である聖書に関する聖句ですが、この手紙には、この他にも聖書や福音や御言葉に関する教えが最初からたくさん出てきます。

「神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、永遠の昔にキリスト・イエスにおいてわたしたちのために与えられ、今や、わたしたちの救い主キリスト・イエスの出現によって明らかにされたものです。キリストは死を滅ばし、福音を通して不滅の命を現してくださいました。この福音のために、わたしは宣教者、使徒、教師に任命されました。そのために、わたしはこのように苦しみを受けてい

るのですが、それを恥じていません。」(1:9-11)

わたしたちが救われたのはキリストの恵みによるのである。わたしたちはそのキリストの福音を宣べ伝えるために任命されたのであり、福音を恥とするどころか喜び確信している。

「キリスト・イエスによって与えられる信仰と愛をもって、わたしから聞いた健全な言葉を手本としなさい。あなたにゆだねられている良いものを、わたしたちの内に住まわれる聖霊によって守りなさい。」(1:13-14)

わたしがあなたに教えゆだねたのは、キリストの福音の言葉である。あなたは伝道者として、この御言葉を手本とし、聖霊によって守っていきなさい。

「イエス・キリストのことを思い起こしなさい。わたしの宣べ伝える福音によれば、この方は、ダビデの子孫で、死者の中から復活されたのです。この福音のためにわたしは苦しみを受け、ついに犯罪人のように鎖につながれています。しかし、神の言葉はつながれていません。」(2:8-9)

わたしたちの宣べ伝える福音は、キリストの十字架と復活の福音であり、これこそ神の御言葉である。

「あなたは、適格者と認められて神の前に立つ者、恥じるところのない働き手、真理の言葉を正しく伝える者となるように努めなさい。」(2:15)

伝道者の使命は、真理の言葉であるキリストの福音を正しく伝えることである。御言葉を正

しく伝えることに、神の前に恥じるところが
あってはならない。

「だがあなたは、自分が学んで確信したこと
から離れてはなりません。あなたは、それをだ
れから学んだかを知っており、また、自分が幼
い日から聖書に親しんできたことをも知ってい
るからです。この書物は、キリスト・イエスへ
の信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与
えることができます。聖書はすべて神の霊の導
きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、
義に導く訓練をするうえに有益です。」(3:14
-16)

あなたは幼い日から祖母ロイスと母エウニケ
から聖書を学んできたが、この聖書こそキリス
トの救いへと教え導く神の御言葉である。

このようにして、1章から3章までで語られ
てきた聖書の御言葉についての教えが、結ばれ
ています。

そして、それを受けて、「御言葉を宣べ伝え
なさい。折が良くても悪くても励みなさい。と
がめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に
教えるのです。」と続いているのが、4章から
です。

ですから、この4章2節の聖句の中心点が、「宣
べ伝えなさい」ではなく「御言葉を」にあるこ
とは、明らかです。恥ずかしかりょうが迫害があ
ろうが、伝道に励みなさいと叱咤激励している
伝道命令ではありません。神の伝道者として果
たすべき務めは、他のどのような言葉でもなく、
ただひたすらキリストの福音である聖書の御言
葉を宣べ伝えることである。

「だれも健全な教えを聞こうとしない時が来
ます。そのとき、人々は自分に都合の良いこと
を聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め、
真理から耳を背け、作り話の方にそれて行くよ
うになります。しかしあなたは、どんな場合にも
身を慎み、」(4:3-5)

キリストの福音のみを正しく宣べ伝え、聖書

の御言葉をもってとがめ、戒め、励まし、十分
に教えなさいという、「聖書中心、聖書のみ」
の信仰と実践の命令であります。

もちろんこの命令は、プロの伝道者テモテに
対する命令ですが、教会学校に携わる者にも当
てはまります。

第一に、聖書の「御言葉そのもの」を語り、
教えなければなりません。

第二に、その際にいちばん大切なことは、聞き
やすく受け入れやすい言葉をやさしく楽しく
語ることでなく、ひたすら聖書のみを「正しく」
「忍耐強く」「十分に」語ることです。

第三に、御言葉をもって「キリスト」を証し
しキリストの「福音」を語るということを、決して
忘れてはなりません。聖書の言葉はキリス
トの御言葉であり、キリストの福音そのものだ
からです。

第四に、ですから、キリストを信じキリス
トの「救い」へと導かれることを願いながら語り
教えます。キリストの御言葉には、人を救う知
恵と力があります。

第五に、「家庭」において子どもたちに聖書
を教え親しませることが、最も重要な基本です。
ですから教会は、子どもたちに御言葉を教える
ことと共に、両親への聖書教育が欠かせません。

第六に、3章16節の「聖書はすべて神の霊の
導きの下に書かれ」という聖句から、教義学によ
って詳しい聖書靈感の教理が構築されていき
ますが、この聖句そのものは、聖霊が聖書を教
え導くうえで有益な書物となるように導かれた
ことを教えてくれています。ですから、聖書の
御言葉を語り教える際には、聖霊の導きを願
い求める「祈り」が絶対に必要です。

聖書がわたしたちに厳かに命じているのは、
聖霊の導きを祈りながら、キリストの福音であ
る聖書の御言葉を正しく語り十分に教えな
さい、ということです。

鈴蘭台教会日曜学校の紹介

鈴蘭台教会日曜学校教師会

1. はじめに

鈴蘭台教会は、六甲山の北側に東西に広がる神戸市北区の西部に位置し、標高300メートルほどの場所で、神戸電鉄「鈴蘭台西口」という駅から歩いて1分、住宅地にあります。

1976年から伝道が開始され、2002年に現在の場所に会堂を建てて移ってきました。旧会堂の時代から日曜学校の働きは続けられてきましたが、最近の日曜学校の様子をご紹介します。

2. 日曜学校の日

朝9時から教師・スタッフによる祈禱会、その後、礼拝が行われます。この礼拝の対象は中学生までです。こどもさんびか、聖書朗読、子ども向け教理問答の交読、そして説教です。9時半からは分級が行われます。高校生はこの時間からの出席となります。分級が終わった10時に全体で集まり、「シャローム」を歌って閉会します。

また、主日礼拝から親と一緒に教会に来る子どもたちのために、礼拝後、午後クラスを行っています。これは今のところ分級のみです。昨年の平均出席は、朝、午後クラス合わせて生徒6名、教師・スタッフ6名でした。

生徒の構成は、幼稚園1名、小学1-3年4名、小学4-6年2名、中学生3名、高校生3名となっています。

教師・スタッフは男性3名、女性6名、(牧師、長老2名、校長：佐々木順三長老)。

普段出席する生徒は、教会員または近隣教会会員の子弟です。ほとんどがそのまま主日礼拝に親と共に出席します。住まいは北区、西区、東灘区です。



日曜学校礼拝風景

朝の礼拝・分級は以前から行われていて、説教は数名の教師・スタッフが順番で行っています。

午後クラスは、主日礼拝から出席する子どもたちのために数年前から始めたもので、対象は2家族5名の子どもたちで、小学低学年と高学年の2クラスに分かれて行っています。



分級(中学)風景



午後クラス風景

3. 年間行事

①4月にはいつも進級式を行い、新しいクラス担任の紹介等をしています。このときは子どもたちに図書券をプレゼントしています。

②春または秋にハイキングを行っています。昨年は春に近くの施設（「しあわせの村」）にあるアスレチック公園、秋には有馬富士公園（教会から自動車です1時間ほど）に、主日礼拝後出かけ、楽しいひとときを過ごしました。



有馬富士公園ハイキングにて

③また、隔年で行われる教会の一泊修養会では、子どもプログラムを組んで学びやレクリエーションをしています。

④子どもクリスマス会
毎年12月（昨年は13日(土)）に子どもクリス

マス会を行っています。これはおもに近隣の子どもさんたちをお招きすることを目的としています。子どもクリスマス会の8日ほど前に、近く（教会から徒歩3分ほど）にある鈴蘭台小学校の校門前で、登校して来る児童に案内ピラを配ります。当日は礼拝、その後ゲーム、ケーキタイムを行っています。毎年数名の子どもたち、そして保護者の方が出席したり子どもさんの送り迎えに来てくださっています。地域とのつながり・伝道のために大切な行事と位置づけています。毎年必ず何名かの子どもさんたちが来てくれますし、ピラを受け取る子どもたちの中には「あの教会知ってる」「（クリスマス会を）知ってる」といった反応も出て来るようになりました。これからも続けていきたいと思っています。

⑤クリスマス祝会で

毎年クリスマス祝会では、劇や合奏、あるいはハンドベルを行っています。普段日曜学校に出席されない教会員、また祝会に出席された求道者の方々の前で生徒たちが発表します。いつも好評で、クリスマス祝会を豊かなものにしていきます。昨年は、放蕩息子のたとえを現代風にアレンジした劇を行いました。このとき分級の先生が自分のクラスの子どもたちに合った書籍を中心に用意した、クリスマスプレゼントを皆の前で渡します。

このほか直接日曜学校が行っている活動ではなく教会の働きですが、毎月第4主日の礼拝のとき、牧師が説教の冒頭に子ども向けのメッセージを行っています。その日の聖書箇所を、子ども向けに語るのです。このときは出席する子どもたちは一番前の席に座ります。

4. 教師会

原則的に毎月第4主日に行なっています。活動報告、計画の検討、現状や課題について話し合います。また、牧師が次月の聖書箇所につい

て「プレビュー」としてレジュメ（A4で1ページ程度）を作り、朗読範囲、ポイント、また教材の使い方などについて簡単な解説を行います。また説教集などの紹介もします。

5. 課題

①第一に今来ている子どもたちへの信仰教育です。普段主日に教会に来られる生徒たちは、幼児から小学生までが8名、中学生3名、高校生3名です。部活等もあり毎週全員来られるわけではありませんし、教会全体の行事のために午後クラスの時間が取れない場合もあります。そうしたことで、平均出席は前述の通りですが、そのほとんどは教会員の子弟です。ですから、この子どもたちに信仰を継承していくことは、私たちの教会のとても大きな課題です。そして適切な時期に信仰告白へと促すことに祈りも集中しています。昨年クリスマスには大学1年生と高校3年生の2名の未陪餐会員が信仰告白をしました。上の学年から順次告白に導かれたことは私たちの大きな喜び・励ましとなりました。

②二つ目は近隣の子どもたち、教会員の子弟以外の子どもたちへの伝道です。今のところ子どもクリスマス会がその直接の機会となっていますが、どのような展開が可能かを考え行なっていきたいと思っています。

③もう一つは中会・大会の修養会に積極的に送り出す、ということです。

昨年参加者が与えられた行事としては西部中会合同夏期学校（小学生対象）、西部中会中高生会修養会、雀のお宿キリスト教会館で行なわれた「サマーデイズ2008」、その他、西部地区の高校生の行事があります。これらの中には普段なかなか礼拝に出席できない子どもたち、また生徒の学校の友達の参加もあり、前述の課題①と②の両方につながる恵みと思い、感謝しています。日曜学校として可能な参加費援助を行なっています。毎回参加者が与えられていますが、もっともっと参加してくださることを願っています。

以上、私たちの教会の日曜学校を紹介させていただきました。日曜学校の働き、子どもを育てる働きは、教会全体の課題であることを強く感じています。教会員全体の祈りとあたたかいまなざし、声かけ、こうしたことがあってこそ日曜学校の働きもよく機能していきます。子どもたちが喜んで教会に来るような雰囲気、それは教会全体の「キリストの愛を映し出す交わりの形成」と不可分です。そんなことを踏まえながら、今与えられている子どもたちを大切に育てつつ、新しい子どもたちへの伝道をしていきたいと思っています。

さらなる成長をめざして

—日本同盟基督教団・教会教育の働き—

本澤敬子（日本同盟基督教団教育局教会教育部員）

日本同盟基督教団は200以上の教会、1万人を超える信徒からなる、宣教協力を目的とした教団です。宣教の働きに重きがおかれているのはもちろんですが、教団が大きくなり、歴史が長くなるにつれて、教会教育の働きもその多様性を増してきました。発足当初から様々な取り組みがなされてきましたが、1998年にそれまでの教職教育部、神学生教育部、教会学校部、テキスト編集委員会を組織改編、2004年には教会教育部が働きを開始しました。現在、教団の教育局には教職教育部と教会教育部、そして新設の家庭教育部の三つの部があり、その中でもおもに子どもから大人までの聖書教育に関わっているのが教会教育部です。

同盟教団の各教会も、他教団の諸教会と同じように、教会内での聖書教育に熱心です。教育の働きには、青少年局、バイブルキャンプ局といった他局も関わっています。青少年局は、5年ごとに開かれる青年宣教大会や、全国を東地区・西地区に分けて毎年青年修養会を企画し、みことばによる養い、同世代の青年たちとの主にある交わりから、青年たちを霊的成長へと導いています。ここから数多くの献身者も与えられています。また、バイブルキャンプ局の働きも信徒教育に欠かせないものです。現在、同盟教団は松原湖、浜名湖、北海道日高にバイブルキャンプ場を持っており、多くの青年、信徒がそこで霊的な養いを受け、各教会に送り出されています。さらに、全国を16に分けた宣教区も、各宣教区内でCS教師研修会、SS大会などを企画し、教会教育の働きを担っています。

そのような中で、教会教育部は、各教会の教会教育・聖書教育をどのようにしたらよりよくサポートできるか、という視点で活動してきました。最近の教会教育部は、教団レベルで聖書教育をサポートするもっとも効果的な方法として、発行物を最大限用いるという方法をとっています。ひとつは、学びのためのテキストを発行するという働きです。現在までに3冊の成人向けのテキストと1冊の子どものための受洗テキストを出版しています。

成人向けのテキスト、『聖書が教えている基本的なこと』、『聖書が教えている教会生活』、『聖書が教えている家庭生活・社会生活』の3冊は2000年と2005年に出版されましたが、同盟教団の諸教会のみならず教団外の諸教会の聖書教育のためにも用いられています。



成人向けのテキストが、基本的なことを網羅したところで、長年願ってきた子どものための受洗テキストに着手、昨年出版にこぎつけました。これまで子どもの受洗準備には、適当なテキストがなく、大人用を作り直したり、自分で作成しているという声も聞いていました。それ

だけに、子どもたちを受洗に導きたいという願いのある教会に広く用いられています。

『かがやけ★クリスチャンキッズ～おしえて！フランソン先生～』と題したこのテキストは、B5サイズで、小学校4年生くらいの子どもの対象に書かれています。同盟の創設に深い関わりのある宣教師フレデリック・フランソンに、フランソン先生として登場してもらい、子どもたちと対話しながら学ぶというユニークな形をとっています。このテキストの特徴は大きく三点あります。

一点は受洗を決意した子も、これから救いに導かれる子も、どちらも使用できるという点です。聖書、神、罪、救いについて学んだあと、第五課で決心に導けるように工夫してあります。決心した子どもは確認の時に、まだの子どもにはそこで決心のチャンスを提供することができます。一課ずつ時間をかけて学びながら、少しずつ子どもの心を耕し、救いに導くことができます。第六課からは、教会生活やディポーションのことなど、クリスチャンとして歩むための学び、後半は進化論や天国、クラブや性についてなどのQ&Aをのせてあります。教会教師だけでなく、CS教師やご両親も導きやすいように大人への手引きを巻末につけています。

二点目は、小学校四年生くらいの子どもの対象に書いたという点です。子どもたちがより楽しく学べるよう会話調で書かれています。また、漢字の方がよいと思われる用語については、ルビをふり、読みやすくしています。適度なむずかしさの設問を工夫して、各課に入れています。小学校高学年向けのテキストですが、四年生以下の子どもたちも導き手の助けがあれば十分使用できますし、中高生であっても内容は充分、大人で要点を学びたいという方にも大変有益です。

三点目は、子ども用であるということから、価格を極力おさえた点です。一冊七百円でこれだけ子どもに親しみやすい体裁のテキストは、

おそらくキリスト教界でも類を見ないと自負しています。価格をおさえたのは、一人一冊ずつ渡し、子どもたちが手元に置いて繰り返し読めるようにするためと、自分で購入する必要がある子どもたちが手に入れやすくするためです。中身のカラー刷りはできませんでしたが、やわらかいタッチで書かれたイラストを多く入れ、見やすくしました。子供用のテキストは、採算を取ることがむずかしく、教団出版だからこそ可能になったと思います。こちらも教団外の教会でも利用されています。



また、発行物を活用しての働きとして、一昨年は毎月発行の教団誌『世の光』に、CS教師の基本的な心得を連載しました。CSの目的は何か、CS教師の姿勢は、CS教師の資質とは、そんな基本的なことを各教会のCS教師会で、短時間で学べるようなテキストにしました。とかく行事に追われる事の多いCS教師会では、願っていてもなかなか学びの時間をとることができないことも多くあります。また学びたくてもよいテキストがないという声もありました。多くの教会から反響があり、現在もりフォーム版が利用されているのは大変感謝です。

現在のそのほかの活動としては、中高生の教会離れという各教会共通の課題をどのように打開できるか、いくつかの教会を廻って、中高生

〈毎月発行の教団誌に連載したCS教師セミナーのテーマ〉

	テ ー マ
1	CSの目的と責任
2	CSの働きの大切さ
3	CS教師①・召された者
4	CS教師②・礼拝者
5	CS教師③・協力者・仕える者
6	CS教師の資質①・教えられる者
7	CS教師の資質②・信仰と希望
8	CS教師の資質③・愛と忍耐
9	CS教師の資質④・柔軟さ
10	CS教師の資質⑤・品格
11	CS教師の資質⑥・誠実さ
12	CS教師の資質⑦・祈り

が多く集う教会の現状をリサーチしています。育てた小学生をどのようにこの世にとられないようにしているのか、中高生をどのように信仰の成長へ導いているのかなど、モデル教会の実体を分析し、教団誌で各教会にお伝えしてゆく予定です。各教会の教会教育の働きやビジョン形成のサポートをしていきたいと願っています。

また来年度は、子どもたちが育てば教会が育

つ、という視点からの教職者向けのセミナーの開催も予定しています。40パーセント以上の教会がCSを持たないと言われている日本の教会の現状を憂えながら、子どもミニストリーがどれほど教会にとって大切であるか、再認識する時になればと願っています。

教会教育のためになさなければならないことはそのほかにも数多くあります。与えられている子どもたちを一人の礼拝者としてよりよく育てるためにできることは何か、中高生、青年たちがこの世に流されず、主にある聖さをもってあかし人となっていくためにできることは何か、祝された結婚と結婚生活・家庭生活・子育てのためにどんなサポートができるか、成人たちがますますみことばに立ち、神と人にと力強く仕えていくためにできることは何か、全世代がキリストの似姿に変えられてゆくためにできることは何か。なすべきことは尽きません。与えられた資源を十二分に生かして、具体的に働きを続け、日本のクリスチャン一人一人が、喜びをもって主に礼拝を捧げ続け、この世で輝き続けるための一助となればと願っています。

(国立キリスト教会教育主事)

DVD『日曜学校から始まるキリスト教教育の歩み』から見えてくる我々の課題

—日本キリスト改革派教会の日曜学校像の確立を目指して—

中部中会日曜学校委員会委員 相馬伸郎

昔、良い子、悪い子、普通の子というテレビ番組がありました。私どもに当てはめれば、こうなるかと思います。良い子とは、先輩の負の遺産については、きっぱりと清算、克服して、良き遺産についてはこれをしっかりと受け継いで、さらに良きもの、つまりあるべき日曜学校の姿へと形成するために、努力する教会、日曜学校教師会になることだと思います。普通の子というのは、負の遺産もよき遺産そのまま受け継ぐということでしょうか。悪い子とは、負の遺産も受け継ぎながら、しかし、よい遺産は食い潰すということでしょう。

先ほどのDVDを視聴して、100年を越える歴史の中で、日曜学校にかかわった先輩たちの尊い働き、主に対する熱心、子どもたちへの愛については、頭が下がる思いがいたします。確かに、我々の日本伝道は、なお困難さを増し、厳しくなっていくばかりです。しかし、それでもなおこれまでの豊かな遺産、その積み重ねがあればこそ、今私どもは、ここにあることができることを思います。わたしも開拓伝道をしてまいりましたし、なお継続しております。しかし、すでに100年あまりの先達の働きの遺産があったからこそ、貧しくとも開拓の実りを結ぶことができたと考えています。ですから、日本における日曜学校の草創期の先輩たち、まさに開拓者たちにどれほど感謝すべきであろうかと思えます。

来年は、プロテスタント宣教開始150周年を迎えます。—ただし、何をもって150周年とするのかについての議論がなされているのか、寡

聞にして知りません。むしろ、それこそ大切だと思います—私どもが今、直面している現実とは、先輩たちのよき遺産をただ食い潰してしまっている、彼らの労苦の実りにあずかって、しかし、自分たちの時代において、後の世代に遺産を受け継がせないということだと思います。私どもは、今まさに、その危機に立たされているのではないかと、そう恐れます。そのために、私どもは親の遺産、日本の日曜学校の歴史を学ぶことがどうしても必要であると思います。

しかし、過去から学ぶこととそれを評価することを可能にさせるためには、私どもキリスト教会としては、大前提があります。つまり、あるべき日曜学校の姿、日曜学校像とはいかなるものなのか、その未来を切り拓くためには、今、どうすればよいのか、これを問うためには、まず何よりも聖書、徹底的に聖書から学ぶことです。あわせて信仰告白を学び、教理に基づくことです。それ以外に私どもの将来を展望するすべはありません。これが、改革教会の基本姿勢です。そこから、歴史を学び、検証するというあり方をとるのです。

実は、今年の研修会の主題を、日曜学校の歴史、特に日本の日曜学校の歴史を学ぶことといたしました最大の理由があります。それは、私どもの委員会は、皆様からの要望を受けて、最重要課題として、新しい教師の学びの場、また既に奉仕をしておられる教師方の継続教育のプログラムをどのように設けることができるかを検討いたしております。信徒の委員が中心に

なって各々、カリキュラムの素案を持ち寄り、熱心に検討しています。しかし、その過程で次第に見えてまいりましたこと、何よりも問題にすべきことは、そもそも、私どもの日曜学校の働き、日本キリスト改革派教会としての日曜学校像とはいかなるものであるべきかということでした。まず、相互の共通認識を得る努力から始めなければならないということでした。

そのようなとき、日本キリスト教協議会(NCC)教育部から、自分たちの歩みが100年を迎えるのを記念して、100周年記念事業委員会が立ち上げられました。委員会は、歴史編纂委員会を立ち上げて、昨年2007年2月に「教会教育の歩み 日曜学校から始めるキリスト教教育史」という書物が刊行されました。また、あわせて先ほど視聴したDVD『日曜学校から始まるキリスト教教育の歩み』が発行されました。それを委員方に観ていただき、また皆さんにも観ていただいで共通の知識とそれに基づく共通の認識を持ちたいと願ったわけです。

横道にそれですが、今回、この日本の教会教育の歩みの書物を読んで、驚かされたことがあります。100年の歴史を振り返る貴重な書物の中で、戦後すでに60年の歩みを重ねた日本キリスト改革派教会の実践についての記録が掲載されているのは、二つのことだけなのです。

一つは、【1990年、岩井素子『教会教育』日本カルビニスト協会／いのちのことば社】です。岩井素子さんは、すでに急逝された方で、灘教会の会員でした。すぐれた論考を発表された方でした。日本キリスト改革派教会の日曜学校の働きにとっては、極めて大きな損失となったと考えます。しかし年表からでは、岩井さんが日本キリスト改革派教会の立場にたって、教会教育の書物を著したということは、分かりません。

もう一つは、2001年の欄、その最後に、私どものことが記録されています。【日本キリスト改革派教会中部中会は、『教会学校教案誌』を創刊。】これだけです。本題ではありません

が、日本キリスト改革派教会がもっと広く他教派、教団に貢献できるはずですし、すべきであろうと思います。私どもも、もっと宣伝に長けなければならないと、反省もいたします。本文のなかにも取り上げられているのですが、「子どもカリキュラム」も刊行中と記載されていました。「子どもカテキズム」のことです。忙しさにかまけ、委員会に訂正をお願いもしていません。次に刊行されるのは、30年後になるでしょうから、しないつもりです。

さて、私どもが、2001年に「教会学校教案誌」を発行した理由、その問題意識の大きな一つに、これまで、日本キリスト改革派教会としての「教案誌」がなかったということの背後に、日本キリスト改革派教会としての「日曜学校像」が確立されていないのではないかというものがありました。

しかしこれは、単に、日本キリスト改革派教会という一つの教会だけの課題ではありません。日本の教会は、これまでの日曜学校とは何であったのか、何をしてきたのか、その過去の検証をきちんとしたのか、それが問われていると考えました。そのようにしてあるべき日曜学校の姿についてきちんと考えなければならないとも考えたわけです。率直に申しますと、この100年誌を拝読して、改めて思わされました。まさに「我々」の課題が浮き彫りにされました。つまり、なお日本の日曜学校、教会学校や教会教育は、まだまだ手探りで進めてゆく以外にないような状況にあるということです。この記念誌は、NCC、日本キリスト教協議会から発行されたものですから、とくにこれに加盟する主要教団、教派の日曜学校の展望に限ってもそう思います。いわゆる福音派の諸教派の実践については、言わずもがなと思います。

私ども日本キリスト改革派教会は、戦後突如、創立した教会ではありません。日本の日曜学校の歩み、教会の歩みの中で生まれたのです。で

すから、日本の教会の課題は、そのまま私どもの課題に当てはまることは、少なくないはずで、私どももこの課題をそのまま与えられていると考えています。何よりも、私どもで申しますと、その実践における熱心の点で、今どうなっているのか、「良い子」になれていないのではないか、「普通の子」であることがせいぜいなのではないかと危機感を抱くのです。

今回、もしかすると皆様の中で初めて、日本の教会の戦争責任の、その恐ろしいまでの深刻さに気づかされた方もおられる、カモしれません。そのことだけでも、今日、来ていただいた価値と意味があると思います。ちなみに、来年の、中部中会の「信教の自由を守る集会」は、君が代伴奏を拒否した高校教師を講師にお招きします。私自身は、日本の教会の戦前、戦中の教会を「サタンの会堂になるほど墮落した」（ウェストミンスター信仰告白第26章5節）教会と考えています。私自身は、「悪魔化した教会」という表現を用いて、自分たちの罪の重さを言い表しています。それは言い過ぎ、表現が間違っているという意見は、少なくありません。しかし、私は、表現については注意が必要ですが、言い過ぎではないと今でも思っています。当時の「教案誌」をひも解けば、子どもたちに天皇陛下のために、死ぬこと、血を流すこと、つまり、戦争に行き、敵を殺すことが、キリストの血に報いること、贖罪にあずかった者としての責務であると書いたのです。子どもたちを、キリスト教、聖書、福音の名の下に、皇国少年、軍国少年少女に育ててしまったことは、日本の日曜学校のまさに恐ろしい罪、汚点であると考えています。少なくとも、私は、その教会学校教案誌を発行した制度的教会、全体教会のことを、悪魔の策略にまったくはまり込んだ、悪魔に蹂躪された、悪魔の道具となってしまったと、考えております。

それなら、そもそもどうして、そのような教

会、日曜学校に転落してしまったのでしょうか。そのことを真剣に考えるひと時としたいのです。そこから、私どもの課題も鮮明になるはずで、私は、日本における日曜学校の歴史を振り返るとき、あらためて名称そのものから今一度、考え直してみる必要があると思います。いわゆる「日曜学校」の歴史を考えると、何よりも1780年、イギリスの印刷業者、ロバート・レイクスの働きから語り始められます。

レイクスはグロスターの出身で、21歳で、父親の事業を引き継ぎます。それは、産業革命が進展していたときでした。45歳のときに、彼は、教育の機会を与えられることもなく、労働力として狩り出されている幼少年の者たちの現実を目の当たりにしていました。それは、多くの子どもたちが、道に迷い、不道德、退廃的な生活へ誘われて行く姿でした。レイクスは、そのような彼らの健全な成長を願い、毎週日曜日に、4つの学校を開きました。その私塾に、女性教師を雇い、6歳から12・3歳の子どもたちに、いわゆる読み書きを教えたのです。あわせてカテキズム教育を施したのです。日曜日の朝10時から夕刻5時半までの、この「日曜学校」が、急速に支持を集め、イギリス中に広まり、やがてアメリカに渡り、世界的な運動へと展開されて行きました。

今日の私どもで申しますと、NPO・民間非営利団体に近いのではないかと思います。このように、日曜学校とは、当初、教会そのものの中から生み出されたというより、一人の篤信のキリスト者による、伝道的、福祉的な動機に裏打ちされて始められた活動であるということです。ただ、そこでなご見逃してはならないことは、実は、子どもたちをより良い労働者にする、労働者を確保するという実利的な側面をもあわせ持ちつつ進展して行った、きらいがあることです。そしてもう一つの特徴は、これを主体的に担ったのは、信徒であったということです。つまり日曜学校とは、「日曜学校運動」と呼ぶ

べきものだったということです。運動体という性格を持つ営みだったのです。そして、それを中心的に担ったのは、信徒たちでした。つまり、一つの「信徒運動」であったわけです。

やがてアメリカにおいては、政教分離の原則のなかで、宗教教育のみを扱う場所として、私塾ではなく、教会の中に設置されて行きます。そのおよそ百年後の、1889年には、「日曜学校世界大会」がロンドンで開催されます。ローマにおける第5回大会では、「世界日曜学校協会」(Sunday School Association)が組織されます。ここにもう一つの特徴が見えてまいります。つまり、日曜学校運動はその最初から、「超教派運動」であったということです。1907年には、世界キリスト教教育協議会と改称されます。

この運動の特徴や意義を三点挙げる研究者がおられます。

①いかにして子どもたちを回心に導くか(魂の救い)に焦点をあてるというもの。回心運動。

②女性キリスト者が教会のなかで公的な働き場を見出すことに寄与したこと。

③信徒のボランティアによって担われたことによって、エキュメニカル(世界教会)運動として展開されたこと。

わたしは、そこで見逃せない歴史的背景として、19世紀のリバイリズム(「信仰復興運動」)があると思います。つまり、神学的に教会の教育を考えた上での働きであるというより、むしろ伝道(回心・救霊)最優先の空気のなかで、信徒を中心とした熱意に支えられ、超教派的に急速に拡大されていたわけです。

ここで簡単に整理すれば、日曜学校運動の性格、特徴とは、①「子どもたちを回心に導く救霊運動」②「信徒中心の運動」③「超教派運動」④「慈善運動」とすることができると思います。特に四番目の慈善運動、今回それをNPOに似ていると申しましたが、日曜学校運動の成り立ちの動機の主要部であり、全体の通奏低音として

流れていると思われます。

全体に共通していること、日曜学校の本質とは、「運動」、「運動体」であるということでもあります。つまり、2000年の教会の歩みのなかで、育まれた教会教育の伝統とは、異質なものが入り込んでいる、入り込んだということもできるわけです。もとより教会の伝統は、常にみ言葉によって新しくされて行くべきものですから、伝統墨守などということが重んじられるのではありません。しかし、新しいものをすべて素朴、純朴に受け入れてよいものでもないはずです。その長所と短所、その危険性についてもわきまえがなければ、私どもの実践が、日本キリスト改革派教会としての目指すべき実践とは、異なり、結実に至らない可能性があるということです。この運動から学び取るべきことが、どれほど大きなものであるか、また、その危険性は何か、それについてのわきまえを持つことが大切なのです。そこに、私ども日本キリスト改革派教会にとっての日曜学校とは、いかなるものであるべきかという問いを立てなければならぬ必然性があるのです。

第一点にあげた、回心に導く救霊運動は、まさにリバイバル運動の影響です。「神、罪、救い」という信仰へと導くために最低限、基本的な福音の教えを子どもたちに教えて、信仰の決心、決断を促すアプローチです。この運動、このアプローチの問題点は、それは、伝道ではあっても、教育的な配慮が足りないということだと思っています。また、教会の形成という目標が不明瞭であるということです。つまり、信仰の決心を目指して、それが実現されたら、そこで大きな目標が達成されてしまうわけです。その後、信仰によってどのように生きるのか、教会員として、神の民として、どのように教会を建て上げ、教会に仕えるのか、教会形成と離れることが起こる、それが問題なのです。彼らは、救われた子どもたちを、今度は、救われていない子ども

たちへの伝道者として育てる訓練を施す。それが、救霊運動です。

わたしは、この点で、むしろ私どもが学ぶべき点も多いのではないかと、考えを変え始め、私どもの弱さを思わざるを得ないのです。実は私自身は、このような背景の神学校で育ちました。そこから、改革教会へと自覚的な歩みを進んで参りました。その問題点についても、厳しく批判をしてまいりました。しかし、そもそも、何とかして子どもたちを主イエスの救いに導きたいと言う、燃えるような熱い思いがなければ、私どもの日曜学校の実践は、彼らの心に響かず、届かないのではないかと反省するのです。

自分のことで恐縮ですが、かつて夏期伝道するとき、教会で寝泊まりしました。教会で二か月住み込んでいるわけですから、近くの子どもが遊びに来るときがあるわけです。神学生のわたしは、小学生の低学年の子たちにも、「神、罪、救い」を説いて、「イエスさまを信じれば、今、神さまの子どもになれるから、一緒にお祈りしよう。」このように勧めました。今は、子どもがそのように遊びに来てくれませんが、しかし、子どもたちを見たら、伝道しなければと考えることは、救いへと導かなければと思うことは、キリスト者であれば、当り前のことでしょう。

ただし、わたしがかつてしていたように、同じようにしてくださいとは、申しません。神学生であれば、それぐらいのファイトを持って、されたらとは思いますが。

たとえば、小学生の低学年、幼児にむかって、こう言います。「天地を造った神様がいらっしゃるよ、神様は愛の神様だけど、あなたには、汚い心、悪い心があって、そのままでは天国に入れず、地獄に行くよ、でも十字架のイエスさまを信じれば、赦されて、神様の子どもになって、天国に行けるよ、今、天国に行ける人になりたいのであれば、先生と一緒に祈りしよう。」一緒に遊んであげた、親しくなった子どもで、そこまでの話を聞いてくれた子であれば、信じ

ると言って、祈ります。しかし、それで終わるなら、それは、教会的な伝道とは言えません。その子が、教会に来て、継続的に日曜学校につながるように配慮しなければ、無責任となります。

ちなみに、教案誌の分級展開例には、幼稚科があります。幼稚科の子どもたちには、この回心運動のアプローチを行うことは、今日の発達心理学、教育学にたてば、まさに非常識なことになるのではないのでしょうか。あなたは罪人で、悔い改めなければ天国に行けないよ、罪人のままでは、地獄に行ってしまうのよ、そうアプローチすることは、その子どもの自己像を損なうことに通じるからです。

さてしかし、私どもは、日曜学校を開いています。そこで回心、救霊運動の考えに基づいて行うわけではありません。ただし、子どもたちを救いへ、主イエスへ導こうという熱心、真剣さ、霊的な会話、神さまや救いに対するについては、負けてはならないと思います。

私どもは、契約の子の教育、信仰継承のための教育については、比較すれば、相当大きな力を注いで来たと思います。今もそうであると考えます。おそらくウェストミンスター小教理問答を軸としながら、子どもたちにカテキズム教育を施して、信仰告白への準備教育をどの教会でも取り組んでおられると思います。子どもたちへの信仰教育とは、聖餐桌に招く準備教育であると言うことができます。現住陪餐会員となって、教会に生きるキリスト者、キリスト者として社会にも奉仕する信徒を育て、訓練する学校です。教会とは、神の民の学びの家、神の民の学校なのです。その学校に連なるすべての年齢層に、神のみ言葉の教えを提供するのです。その中にある日曜学校とは、胎児から中高生までを対象にしている教会の教育的働きを示すものであります。つまり、あくまでも教会は、子どもにも大人にも、全年齢層に、すべての民族に、性別に、すべての階層の人々にも

福音の伝道と教育を施すことが、復活の主イエス・キリストから命じられています。

私ごとで恐縮ですが、来週、神戸で、三年に一度、開催されます日本福音主義神学会全国研究会議にまいります。今日の日本における伝道が主題です。私も、一人の応答者として、伝道しない教会は、存在理由を失っている。教会が、自分の存在を神の国そのものと考え違いを犯しているとお話します。教会は、福音の宣教へと呼び出されています。ですから、私どもは、契約の子の教育はもとより、すべての年齢層、すべての人に向けて時がよくても悪くても福音宣教に専心しなければならないのです。その視点から言えば、日曜学校の教師とは、子どもたちのために神に選ばれ、立てられた伝道者と言っても言い過ぎではありません。

二番目の信徒運動、信徒中心運動についてです。レイクスという事業にも信仰にも熱心な敬虔なキリスト者が始めた日曜学校は、教会から始まったのではなく、個人のキリスト者が始めたわけです。おそらく教会としては、これは、ありがたいことだと評価されたのではないかと思います。私どもの教派は、未だに女性の長老、教師を認めていません。しかし、日曜学校での説教を女性に禁じていることはないのです。これは、実は、すでに大きな矛盾があるわけですが、熱心な信徒たちは、自分たちの自由な発意に基づいて、子どもへの伝道活動を展開する働き場を得たということになったと思います。しかしまた、容易に考えられることですが、もしもそこで教会の働きの中の、教会の基本的働きとしての教会学校の中の日曜学校ということが軽んじられたら、その結果は、建德的ではなくなります。つまり教会形成的ではなくなるのです。もしも、日本キリスト改革派教会として、「日曜学校運動」に立脚する日曜学校の営みがなされるなら、ゆゆしきことでしょう。日本キリスト改革派教会の日曜学校像の確立を確

認し、徹底することは、きわめて基本的で、重要なこととなります。つまり、私どもは、日曜学校をまず、教会学校のなかでの子ども達のためのプログラムとして位置づけることです。

なにも大上段に構える必要はありません。「礼拝指針」第28条（教会学校の目的）に記されている通りです。「教会学校とは、教会教育事業が主として行われる組織を言う。それには、日曜学校・週日学校・休暇中の聖書学校・その他がある。その目的は、キリスト者の成長と完成であって、それは、主イエス・キリストにおいて揭示された神への信仰・キリストに対する救い主また主としての告白・キリストとの生命的交わり・キリスト者生活と教会員生活とへの明確な献身・教会の全活動への参与などによるのである。」第29条（教会学校教育の対象）「教会学校は、その目的に従って、契約の子らを訓育し、成人会員を教え、さらに未信者と未信者の子らに教育的伝道を行うものである。」

まさにその通りです。これは、聖書の伝統、教会の伝統の本筋に立っているわけです。それだけに、逆に、もしも牧師の指導がなされなければ、その結果は、どうなるでしょうか。しかしまさにそこでこそ逆に、私ども牧師の問題も見えてまいります。つまり、熱心な日曜学校の教師がいらっしゃったら、その人に悪い言葉では、「丸投げ」してしまって、任せてしまう。そのようにして、手を引くことがなかったでしょうか。もし、その熱心な教師が、自分の考えややり方を第一にしようとするなら、その結果は、とても残念なものとならざるを得ないと思います。聖書的な意味での教会の形成に至らなくなるからです。私どもの「教会学校教案誌」の発行を強く迫ったのは、実は、そこにもありました。日本キリスト改革派教会の神学によってなされるべき教会教育が、実に、私どもとは相容れないはずの神学的前提、さきほどの回心型の理解に基づいてなされていた「教案誌」すら用いられていたという現実があったのです。

「教案誌」発行の前までは、圧倒的に多くの教会では、「成長」が用いられていました。もとより、「成長」は、超教派によって編集されています。だから、よくないとは、決して考えておりません。しかし、もし「成長」を用いるのであれば、教会学校の校長も、誰よりも牧師自身がよほどこの教案誌を、前もって読んでおく必要があると思います。時には、やはり解説を加える必要があるであろうと思うのです。しかし、実際は、もしかすると成長を購入して、後は、教会学校教師会に任せてしまうというあり方も、少なくなかったのではないかと思うのです。日本キリスト改革派教会の教師たちは、猛烈に忙しく働かざるを得ない状況にありますから、同情の余地があります。しかし、み言葉の奉仕のなかで、まさにその主要な務めのはずですから、牧師が指導すること、その場面がなければ、日曜学校じたいが、その目的を実現することが難しくなると思います。ですから、信徒に任せてしまうあり方は、許されないことと思います。また、何よりもそこで、日曜学校の教師としても積極的に、率先して、牧師に指導を受けるといふ姿勢が求められているはずです。日曜学校こそ、自己流になりやすいからです。

先々週は、連合青年会の集会で、伝道についての講演をいたしました。そこで、青年方に、伝道のために自分たちを訓練してくださいと、牧師に願い出てくださいと勧めました。びっくりされていた方もおられました。しかし、エフェソの信徒への手紙第4章に、牧師、教師の職務規定が記されています。「こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。」新改訳聖書では、こうです。「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり」牧師の務めは、信徒を整えて、奉仕の働きをさせることであると聖書によって規定されているのですから、皆さんも積

極的に、牧師の指導と訓練を願いもとめるべきであると思いますが、いかがでしょうか。

そして、そのためにこそ、日曜学校教師研修の講座やカリキュラムを、中部中会として持つ必要性が、挙げられているのだと思います。しかし、言いわけですが、まさに、その時間や人材について困難を覚えさせられています。ないものねだりをしていても仕方ありませんから、少しずつ前進したいと思います。

第三番目の「超教派運動」です。ここで、先ほどのDVDで視聴した日本における日曜学校の歴史をごく簡単に振り返り、事柄に直接触れたいと思います。

信徒運動でなおかつ超教派運動であった、日本の日曜学校の言わば、ピーク、絶頂期を迎えるのは、わたしは、1920年であろうと思います。日曜学校世界大会が、東京で開催されました。海外32カ国から1800人を迎え、明治開国以来最大の国際会議であったと言われます。財閥の渋沢栄一が募金委員を務めたように、日本の財界、政界から積極的な協力がありました。諸教派一丸となって、この大会を盛り上げたわけです。ここにも光と影があると思います。特に、影の部分こそ、私どもが徹底的に認識し、そして悔い改めること以外には、日本の日曜学校、いへ、日本の教会の再建ということは、ありえないと考えます。

そもそも日本における日曜学校の出発、それは1872年、つまり、その最初の教会（日本基督公会・横浜基督公会）にまでさかのぼります。つまり、日本にとって教会のスタートと日曜学校のスタートとは同じになされているのです。

しかし、日曜学校伝道の先駆的働きを担った、田村直臣牧師（日本基督教会）は、その頃の日曜学校の状況を批判的に述べてこう言います。「教会の付録のごときもの」であり、「宣教師が外国の教会に日曜学校というものがあるということを教えてくれたから、子供の好きなキリス

ト者が物好きに子供に手を出し始めた。」しかし、たどい思い思いに聖書の話をし、聖画を見せ、カードを配る程度のものであっても、子どもへの伝道の熱い思いにあふれたこの働きは、当時の日本社会に大変な勢いで拡大、進展して行きます。

(1881年、日曜学校数、教師数男67名女22名計89名、生徒数838名。※日本基督一致教会のみ。最初の日曜学校統計)

1882年の東京宣教師会議録によれば、教会数95、信徒数56354人、日曜学校49校、教師156名、生徒4060名。

1885年、教会数115、信徒数10542人、日曜学校73校、教師213名、生徒6853名。

1888年は、教会数206、信徒数24133人、日曜学校267校、教師360名、生徒16820名。

つまり、生徒数は6年間で4倍です。3年前の約3倍、驚くべきことに、当時の教会数は206教会ですから、教会より多いのです。つまり、60校は、教会の外で、分校として開設されたのです。日曜学校は、子どもへの伝道であることはもとより、開拓伝道の拠点でもあったわけです。日曜学校から教会が始まる、これが、日本の草創期のキリスト教伝道の一つの姿でした。

横道にそれますが、このことは、日本伝道を考える意味で、今日でも新しい意味を持っているとわたしは考えています。つまり、今でも、日本伝道、特に開拓伝道においては、子どもたちに向けての教育的伝道は有意義であると思います。

日本の日曜学校の草創期のもう一つの特色は、ミッションスクールの開校です。ミッションスクールが教会とまた日曜学校とも、言わば渾然一体となって進んだことです。そこでは、一人の人間としての人格や尊厳の発見や解放、また教育を受ける機会から遠ざけられ、「家」をはじめとする古い習慣や社会的権力構造の中で抑圧されていた人々を自由にし、希望を与え

るものとしてキリスト教の教えが日本社会を動かして行きます。また、クリスチャンイコール禁酒禁煙、品行方正という評価を得るほどに、禁酒排煙運動、売春買春廃絶運動などを柱にしながら、社会に良き規範を与えることになりました。また、欧米文化を学ぼうとする上流層の教育への求めにも応じる魅力を持ち、さまざまな階層に影響を及ぼしました。

しかしこの中でも、既に表面化するのが、「教会教育の歩み」の編者のこの指摘にある通りです。「しかし、「何とかして日本社会での認知を」という熱心さに支えられた草創期の日曜学校運動が一牧師に支えられながらも一いわば『おんなこども』を対象とし、子ども好きの篤志信徒に担われるものであったことは、この運動の基盤の脆弱さとなる。それは、教会の中では、一段低いものとして差別化されていく傾向とつながっていく。また、社会においては国家主義体制づくりに教育が利用されていく流れに対して、またこの時代の『朝鮮』『台湾』『満州』への侵略および、覇権争いのための日清、日露戦争に対しても、なんら批判的視野や抵抗を表すことができないありようを露呈するのである。」(教会教育の歩み p17)

先を急がなければなりません、生い立ちが既にそうであるように、実に日本教会史と日本日曜学校史とは、そのまま一つの線で結ばれてゆきます。前述したように、日本で開催された1920年(大正9・第8回)「日曜学校世界大会」は、日本の財界、政界から積極的な協力があつたのですが、後日、日曜学校会館建築の際には、宮内省から千円が寄付されました。キリスト教界は、まさに歓喜に沸いたのです。しかし、そこですでに「徳育教育」が、国家体制の中にすでに絡めとられている現実を、当時の関係者は気づくことができませんでした。

そして、ついに1930年代に至り、37年には、日曜学校協会理事長が、日中戦争支持の姿勢を表明し、加盟校宛に「質素を旨とし、反戦思想

ありと誤解されるごときなきよう」と、主事名で通告します。38年には、当時の教案誌である「日曜学校の友」で、神社参拝に理解を示すように訴えています。さらに40年には、皇紀2600年記念日曜学校大会を各地で開催しました。諸教会が、日本基督教団に統合された際には、当時の教案誌では、繰り返し、天皇の赤子としての使命、つまり天皇のため、お国のために従軍することが、神の御心であると推奨され、これを鼓舞する説教がなされ続けます。

以前、日本キリスト教団の宣教研究所の職員の方をお願いして、1941年の日本基督教団の教案誌である「日曜学校の友」のコピーを送っていただきました。たとえば、1940年11月3日の明治節の日の幼稚科の「おはなし」の一節にこうあります。

「汽車、飛行機、電車、自動車。学校もお役所も郵便局も電気も。そして今のように強い国になったのです。明治天皇様が、こんなにさせてくださったのです。だから、日本の国中の人が明治天皇様を、お父様のように思って、いつでもいつまでも、おしたい申し上げるのです。神様は日本の国が弱そうになったときに、こんなにお偉い天皇陛下を下さって、強い国にして護ってくださいました。私たちも強い子どもになって、天皇陛下によくお仕えて、ほんとに良い日本の国にいたしましょう。」

これは、ほんの一例です。小学科になれば、さらに国策にすりよった奨励がなされています。いったい、どうして神の御前におそるべき偶像礼拝の罪、第六戒、その他の罪を犯し、このような惨めでおそるべき教会、悪魔化ということに抵抗感があれば、キリストの教会であることを実質上やめてしまった日曜学校の営みがなされてしまったのでしょうか。

時間の関係で、第四の「慈善運動」としての日曜学校にも短く言及して終わります。ロバート・レイクスが工場労働者として駆り出された

少年少女たちの宗教教育を中心としながらも読み書きを教えたことが、日曜学校の始まりでした。つまり、そこにはキリスト者の慈善行為としての側面があったのです。

私どもの名古屋岩の上伝道所は、久しく、日曜学校を教会のディアコニアの面からとらえなおそうと呼び掛けています。今、ようやく動きの兆しが見えてきたように思います。昨年から、毎月一度土曜日に「お絵書き教室」がなされています。これも地域の子どもたちへの教会の伝道とディアコニア奉仕であると考えます。ごく最近、まだ日曜学校教師でも、補助教師でもありませんが、なんとか、地域の子どもたちを教会に招き入れたいとの働きがなされつつあります。皆様もそうだと思いますが、小学校の下校時にチラシを配っても、なかなか、日曜学校に導けません。しかし、公園で一緒に遊びながら子ども達と人格的な関係をもって、誘いたいという願いが出されたのです。日曜学校のルーツとは、我々でいえばNPOに近いと申しました。わたしは、日曜学校を教会のディアコニア、地域社会への奉仕としても、積極的に捉え直したいと心から願っています。その一方で、レイクスのような信徒が教会の中から起こされ、教会との深い結びつきの中で、子どもたちに対する事業を起こす人が起こされる可能性についても祈ります。

DVDでは、子どもたちが教会にあふれているシーンが目には焼きつきます。明治、大正、戦前の昭和、戦後すぐ、子どもたちは、教会の周辺にいました。現代の日本社会はどのようなのでしょうか。厳しい状況であることは、今更言うこともありません。しかし、私どもの役割と使命はいつの時代でも変わりません。福音の真理は、どの時代の子どもにも大人にも、必要です。

私どもは、日曜学校に地域の子たちを招き入れることで、平和と正義、福祉に仕えることもできると思います。日曜学校は、どれほど地域社会における必要性、可能性を秘めているかと

思います。ですから、教会学校教案誌が主張し続けているように、日曜学校伝道に私どもはもっともっと力を注いでよいし、注ぐべきだと思います。教会は、慈善団体ではありません。しかし、教会が地域社会のなかでどのような貢献を果たすのか、これは、福音の真理を証言し、飾る上で、私どもが重んじなければならないことと考えます。

ただし、そこに恐ろしい落とし穴があることを、私どもはこれまでの負の遺産、歴史から十二分に学ぶ必要があります。今回のDVD視聴は、それだけでも大きな意味があると私は考えています。

たとえば、わたしども日本キリスト改革派教会は、戦前の日本基督教会の歴史を担っている教会ですが、この教会の最大の指導者は、植村正久牧師でした。植村の日曜学校についての認識は、その後の日本基督教会の日曜学校像とその実践に大きな影響を及ぼしたはずです。植村の考えていた「日曜学校像」の一端をうかがい知ることのできる言葉にこのようなものがあります。

「【日曜学校を】宗教教育及び徳育をしくのに有力な機関たらしめなば、国家の利益、教会の勢力、キリスト教の声価いかにたかめらるべきか」

ここに「宗教教育」と「徳育」という言葉が記されています。彼によれば、日曜学校とは、この二つを地域になすための機関としようということです。

植村の時代の社会状況の一端を伺い知ることのできる事件として、有名な内村鑑三の不敬事件があります。内村が教育勅語に拝礼しなかったことから、国家権力、文化人からの厳しいキリスト教批判がなされていました。そのような厳しい逆風のなかで、彼は、日本の教会が、子どもたちに聖書を説くことによって、道德教育に貢献し、国家の利益と教会の勢力、キリスト教の名声を高めようとしたわけです。ただし、

誤解してはならないと思いますが、彼にとっての国家の利益とは、単純に国家権力者、為政者の利益を指し示しているわけではありません。彼は、キリスト教こそ日本という国家を進歩発展させるために最大の力を発揮するものであって、キリスト教によって日本は、「国家の元気」を高揚させ、その天職を全うさせる力となると考えていたのです。植村は、著しく国家を肯定的、楽観的に見ていました。ここに植村が後の日本の教会、いわゆる主流派教会をして、国策に迎合する教会となってしまうその方向性の弱点を見逃すことはできません。植村の神学の系譜を継ぐのは、熊野義孝先生ですが、そこでも「国民教会」構想が語られています。これ以上に横道にそれではいけませんが、この構想の危うさも、今日の日本の教会があらためて考えてよいことと思います。

このような日曜学校像は、実は、植村自身の福音理解に根ざしています。同時にその限界にも言及せざるを得ない深い問題があると思います。端的に申しますと、植村は、「志」という武士の精神的遺産を土台にして、人間としての確立、道義的な、高い倫理観をもった人間としての確立をキリスト教によって実現させられたという体験的な理解をその神学の土台にすえているように思います。植村にとっての罪とは、「霊性の病」あるいは「霊性の死」でした。ウエストミンスター大教理問答のような、神の言葉への違反ではないのです。「神の律法に少しでもかなわないこと、またそれを犯すこと」ではないのです。子どもカテキズムは、「神さまの御言葉を破って、それに背くことです。」神の御言葉なしに、私どもは自分の罪の現実が分かりません。その罪の刑罰がどれほどおそろしいものであるのかも真実には分かりません。植村にとっては、この罪の理解が、聖書的に徹底していない恨みがあるわけです。それが、彼の国家論や教会論にも及んでいるとわたしは見ています。

宗教教育と徳育教育とは、おそらく連動している概念であると思います。いずれにしろ、それは「国家の利益、教会の勢力、キリスト教の声価いかにたかめらるべきか」という発想です。彼の中には、社会改良、社会人民の「木鐸」となる教会、という発想があります。福音による救いを個人に与え、神の御前に人格の完成を、そして社会や国家には、福音をもって人々の生き方の改良、国力の発展を求めたわけです。そして、彼は、当時のキリスト教のオピニオンリーダーとして、教会の内外に渡って、指導し、戦ったのです。この先達の評価は、今の私どもの水準に立って論じることが公平ではありません。今日の我々の教会は、この植村の論陣の水準に達しているかどうか、厳しく問われるでしょう。何よりも、そのような議論を、日本の社会のなかで起し得ていない現実を取じるべきであろうと思います。

私どもは、日曜学校運動の課題について検討してまいりました。まだまだ語るべきことは、山ほどあります。しかし、時間がありません。今回のDVD視聴を通して、恐るべき罪を犯した日本の教会、私どもとして、二度と同じ罪を主の前に、また伝道すべき、救いに導くべき人々の前に過ちを犯さないためにも、あるべき日曜

学校の姿を追い求めてまいりたいと思います。これは、私どもの最低の責任であると思います。それは、旧約の教会以来、神の民の学びの家としての教会の、契約の子のための、地域の子どもたちのための教育的伝道の場所、プログラムなのです。しかもその上に、「日曜学校」がもたらした良き遺産を、継承し、正しく発展させる道をも祈り求め、励みたいと思います。

教会学校教案誌第13号より、年度の最初の号には、必ず、本誌の基本方針が掲載されています。拙い文章で、手を入れたいのですが、できずにおります。しかし、そこであるべき日曜学校像へと至るための一つの道筋を示したつもりです。今回は、その背後に、このような問題意識があり、いよいよ、あるべき姿に至る道筋を整え、皆様と共に、進み行くためのよすがになれば、幸いです。その内容については、お帰りになられたら、時間のあるとき、あらためて春号を開いて、読み直していただければと思います。

Soli Deo Gloria ! (ただ神の栄光の為に！)
(名古屋岩の上伝道所宣教教師)

※2008年11月22日(土)に開催された中部中
会教会学校教師研修会の講演を掲載しま
した。

教会（日曜）学校像について

相馬伸郎（本誌編集長）

1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ第56章7節、マタイ第21章13節）があります。神の民の祈りの家である教会はまた、古来、「学びの家」と称されてまいりました。

教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするので、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。むしろ礼拝においてこそ学びの対象となる生ける神との交わりが与えられ、深められてまいります。つまり、礼拝なしに、教会の学びは成立しないのです。

子どもは、「日曜学校」と称して自らの営みを致しておりますから、うっかりすると「学校」の真似事のような営みへと傾斜してしまうのではないかと思います。日曜学校を学校と称しますが、何よりも、教会自身が学びの家、学校です。そうであれば、日曜学校は、まさに教会独自の「学びの家＝学校」になります。

現住陪餐会員によって組織される言わば大人の教会は、礼拝共同体です。このすべての営みを通して、キリスト者が生み出され、その成長がなされます。また、教会が形成され、成長させられます。日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これが本誌の基本的な日曜学校像です。

日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会という言い方は

神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、私どもはどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招き入れ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。つまり、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。日曜学校の礼拝式に出席して、その後の主日礼拝式（朝拝）に列席する契約の子は二回の礼拝式にあずかっていることになります。

2. 分級中心より、礼拝式中心

子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは

良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求める……。本誌が、繰り返し申し述べて参りましたことは、「分級展開例をそのまますることが大切なのではありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げることができればそれで良いのです。」準備したものの全部をやれたかどうかということが分級運営の良し悪しの基準にはならないと思います。礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。

3. 子ども礼拝式における説教の重要性

—日曜学校の目標—

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」であり、それゆえに日曜学校の目標は、自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活を確立できるように導くことにこそあります。しかもそれは、まさに公同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式（公同の大きな祈り）に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができます。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかとなると思います。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によって、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでしよ

う。そうなれば、牧師こそが日曜学校の奉仕、礼拝説教を担うことが求められるのではないのでしょうか。

本誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわかまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を説く自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

4. 説教の完成としての牧会—分級の目標—

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子どもたち全体になされる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、一人の子どもの魂の状況に、よりの確に触れ、届けるためには、「牧会」が求められます。私どもが、分級の目標を「共に祈る」こととしておりますのは、子どもへの牧会を指し示すあり方を指し示しているのです。この牧会に奉仕するのが分級なのです。この分級イメージは、「牧会」のイメージ、子どもと向き合う姿勢です。子どもの心、気持ちを聞き出すこと、聴き取ることが求められます。そこでこそ、教室において生徒全体に均一の知識を提供する「学校」のイメージは薄くなるはずです。

説教（神の言葉の共同的伝達）と牧会（個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

5. 教会形成の一環としての日曜学校

—教師会と教師—

およそ教會的な奉仕の在り方は、いずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。

例えば、礼拝説教を担うのは、担当日の奉仕者一人です。しかし、その時こそ、その背後の教師たちの祈りがどれだけ集められるかが問われます。教師たちの祈りに支えられてこそ説教や、その礼拝式は必ず聖霊の豊かな働きのなかで捧げられることを確信いたします。

教師会が、単に教師たちの実務的会議で終わるのではなく、日曜学校の働きを担う核としての「共同体」として形成されることが大切なのです。具体的には、充実した教案研究がなされ、全体の課題と一人ひとりの課題とを共有できる教師会を持つことです。本誌は、その一助となるために発刊されたものです。

さらに申しますと、教会全体の祈りに支えられなければ、日曜学校の業が、教会形成そのものとしての結実を求めることは難しくなくなります。日曜学校の働きとは、各個教会の形成と伝道の働きそのものと直に繋がっているものであり、そうでない働きは、少なくとも改革教会の教会形成の筋道とは異なる日曜学校となってしまいます。だからこそ、礼拝指針の第31条にある通り、小会の監督、配慮が定められているのです。日曜学校の営みとは教会形成そのものの営みなのです。いわゆる賜物のある牧師とか専門家の牧師だけが担うものではありません。

6. 伝道する日曜学校像

日曜学校は契約の子の信仰継承のためにもあります。しかしこれまで、宣教地である日本の教会は、日曜学校を地域の子どもたちを捉える伝道の場として考えてまいりましたし、今なお同じ状況にあると思います。

私どもは、今日の日本の荒廃は、教会の福音伝道の力の低下の責任であると考えております。社会から、教会の責任を問う問いはどこからもあがっておりません。しかし、神からは、問われています。

私どもの目に子どもたちは、どのように映っているでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渴いて、倒れています。真の教会で説かれる福音が届きさへすれば、子どもらこそははっきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲と働きを減退させてはなりません。

私どもは、教案誌を作成し、出版すればそれで良いとはまったく考えておりません。日本キリスト改革派教会をはじめ日本の諸教会から子どもたちの讃美の声、祈りの声が溢れるようになることをこそ目指しています。

「子どもたちを私のところへ来させなさい」と命じられた主イエスの御前に、共に悔い改め、祈りの叫びをあげたいと思います。忍耐と労苦が求められます。けれどもその光景を夢見ながら、主と共に、皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

本誌へのご批判、ご意見をお寄せ下さい。改革派日曜学校像を確立するために神学的、実践的な広い論議を心から期待致しております。

Soli Deo Gloria! (ただ神の栄光の為に！)

(中部中会日曜学校委員会委員、
名古屋岩の上伝道所宣教教師)

副読本のご案内

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

再刷発行いたしました。ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

● 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。一わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのだ、知らずにいるのとは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の眞の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手にするジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の眞の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身にはありません。私たち自身何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

「いのちのパン」のぞ案内

(「子どもカテキズム」による聖書日課)

価格 800円

著者 相馬伸郎

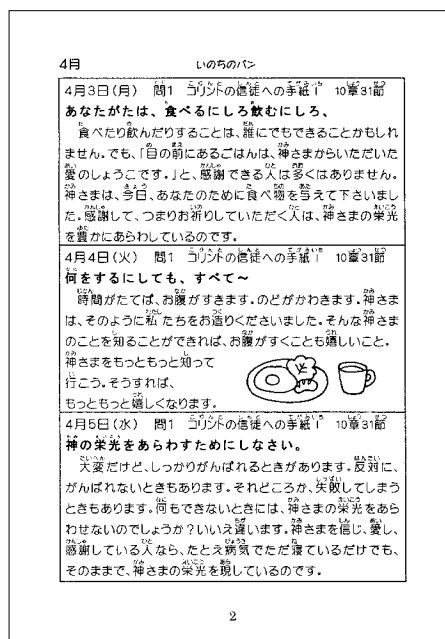
(名古屋岩の上传道所宣教教師・教会学校教案誌編集長)

本誌に掲載された「いのちのパン」が一冊の書物として改訂出版されました。

カテキズムに基づくものとして類のないものです。ご注文は名古屋岩の上传道所まで。



表紙



2ページ

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

〈背景と文脈〉

主イエスは二人の強盗と共に十字架につけられた(19:18)。主の着ておられた服についての聖書の言葉(詩編22:19)が、兵士たちによって実現した(19:23-24)。神のご計画は、十字架上で着々と成就していった。主は特別な使命をもって地上に来られ、その生涯によって聖書の言葉が実現したが、今日の個所は、そのクライマックスとも言えるもので、主の死において、聖書の言葉が実現し、神のご計画が成し遂げられたこと、また主の死は、過ぎ越しの小羊としての死、すなわち贖いの死であったことを私たちに教えている。

〈イエスの死〉(19:28-30)

刻々と主の死は近づいていた。主は「渴く」と言われたが、それによって聖書の言葉が実現した(詩22:16; 69:4)。「渴く」と言われたのを聞いた人々は、そこにあった酸いぶどう酒をいっぱい含ませた海面をヒソブにつけ、主の口元に差し出した。酸いぶどう酒は、兵士たちが飲むために置いてあったものと考えられ、没薬を混ぜたぶどう酒とは別の物である。主は、痛みを麻痺させるために差し出された、没薬を混ぜたぶどう酒を飲まなかった(マルコ15:23)。しかし、この酸いぶどう酒をお受けになられた。そのことによって、詩編69編22節の言葉が実現した。ちなみに、著者ヨハネは、詩編69編22節の七十人訳(旧約聖書のギリシャ語訳)で使われている「酸いぶどう酒」というギリシャ語をここで使っている。ヒソブは過ぎ越しや清めの儀式に用いられた植物である(出エジプト12:22; 民数19:6)。

主はその後、「成し遂げられた」と言われ、「頭を垂れて息を引き取られた」(30)。「成し遂げられた」は完了した、という意味である。これは、一切の宗教的な義務を果たし終えたことを意味する。すなわち、父なる神が、行うようにと、イエスに与えられた業が成し遂げられた(ヨハネ

17:4) ことの宣言であった。

〈イエスの死の意味〉(19:31-37)

その日は金曜日で安息日の準備の日であった。しかもその安息日は、過ぎ越しの特別な安息日であった。ユダヤ人は、金曜日の日没からを安息日と考えた。それでユダヤ人たちは、安息日に遺体を十字架の上に残しておかないために(申命記21:22-23参照)、足を折って取り降ろすように、ピラトに願い出た。足を折るのは、死を早めるためであった。

それで兵士たちは、主と一緒に十字架につけられた二人の犯罪人の足を折ったが、主の足を折らなかった。それは主がすでに死んでおられたからである。このことの霊的な意味は36節に記されている。「これらのことが起こったのは、『その骨は一つも砕かれない』という聖書の言葉が実現するためであった。」出エジプト記12章46節、民数記9章12節には、過ぎ越しの羊に関する規定が記されていて、過ぎ越しの羊の骨は折ってはならない、とある。主イエスが過ぎ越しの小羊として死なれたことは、次のパウロの言葉からも明らかである。「キリストが、わたしたちの過ぎ越しの小羊として屠られたからです。」(コリント一5:7)

兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺すと、すぐ血と水が流れ出た。これはイエスが人間として死なれたことを意味している。著者ヨハネは「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」(1:14)と、神の子の受肉について語っているが、その背景には、当時、受肉を否定する人々がいたからである。同時に、流れ出た血と水は、過ぎ越しの小羊としての贖いの死を通して、信じる者に与えられる罪の赦し(ヨハネ一1:7)、新しい命(4:14; 6:53-54)、聖霊(7:38-39)を象徴している、と考えることができる。ちなみに、ヨハネは象徴的な表現を多く使用している。(後藤公子)

(単元のねらい)

「渴く」「成し遂げられた」「その骨は砕かれない」といったヨハネ福音書独特のメッセージを、「聖書の実現」という観点から伝えることが求められる。子どもたちに理解しやすいようにどこまで簡潔に語れるかが説教者にとってのチャレンジであるが、子どもたちの年齢や理解力に応じて、思い切った捨象も必要となるだろう。「神の小羊」を十分黙想して備えなければ、クリアーな説教にはならないだろう。

「神さまから愛されているわたしたち」

今日から始まる一週間は受難週と言います。今週の金曜日にイエスさまが十字架につけられたのです。イエスさまが十字架につけられた今週の金曜日は、ユダヤ人にとっては一年で一番大切な祭りの前日でした。過越祭とよばれる祭りです。その祭りは小羊を私たちの身代わりに犠牲にして、それによって神さまからわたしたち人間の罪を取り除いていただきたいと願う、とても大切な祭りでした。

そういう大切な祭りの前日に十字架につけられたイエスさまは、十字架の上で最後に二つの言葉だけを言われました。「渴く」という言葉と、「成し遂げられた」という言葉です。イエスさまが「渴く」とおっしゃったのはどういう意味ですか。そうです、のどが渴くという意味ですね。兵士たちに殴られたり、鞭で打たれたり、ものすごく重い十字架を担いで歩かされたりして、最後に釘で手と足を十字架に打ち付けられましたから、イエスさまののどはもうからからです。イエスさまはみなさんのためにこんなに苦しい死に方をして、皆さんの代わりに死んで、みなさんの罪が神さまからゆるされるようにしてくださったのですね。

ですけれどもイエスさまが最後に言われたこの「渴く」という言葉は実は「のどが渴いた」というだけの意味ではないのです。この同じヨハネによる福音書の4章13節でイエスさまは、井戸の水をくみに来たサマリアの女の人にこうおっしゃいました。「この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしと与える水を飲む者は決して渴かない

」。イエスさまが与えてくださる水というのは、命の水です。わたしたちはイエスさまからいのちの水をもらって、ここはいつでもみずみずしく、いきいきとしていられるのですね。もしイエスさまから命の水をもらわなければ、人間はここが干からびて、死んだようになってしまうのですね。もしみなさんが神さまから離れているならば、普通の水をいくら飲んでも、心は干からびたまま、いつでも渴いてしまうのです。イエスさまが十字架の上で「渴く」と言って、死んでくださったということは、神さまから引き離された、渴いた人間の姿になってくださったということなのです。命の水を神さまからもらうことができないで、渴いてしまっていた人間の身代わりなのですね。だからわたしたちの身代わりなのです。イエスさまがわたしたちの身代わりになってくださいましたから、わたしたちはもう渴かないのです。渴くことのない神さまの命の水をもらって、みなさんはずっとみずみずしく、いきいきと生きていくことができるのですね。

さあ、イエスさまが十字架の上で最後におっしゃったもう一つの言葉はなんでしたか。そう、「成し遂げられた」という言葉ですね。イエスさまはみなさんの救い主としてこの世界に来てくださって、聖書に書いてあるようにいろいろなことをおしえてくださいました。そして神さまの愛を示してくださいました。その最後に十字架につけられてくださったのですね。イエスさまはもうやり残したことはない、みなさんを救うために聖書

に書いてあることを全部していただきました。十字架がその締めくくりです。みなさんが神さまの子として生きるために、イエスさまは命を捨ててください、これが仕上げなのです。もうイエスさまはみなさんの救いのために全部のことを成し遂げてくださったのです。だから一番最後に「成し遂げられた」とおっしゃったのですね。「成し遂げられた」と言って、ガクッと頭が傾いて、息を引き取られました。それが今週の金曜日の出来事だったので。

その次の日は土曜日です。ユダヤ人の安息日です。31節の後半を読んでみましょう。「ユダヤ人たちは、安息日に遺体を十字架の上に残しておかないために、足を折って取り降ろすように、ピラトに願い出た。そこで、兵士たちが来て、イエスと一緒に十字架につけられた最初の男と、もう一人の男との足を折った。イエスのところに来ると、すでに死んでおられたので、その足は折らなかった」。イエスさまの足の骨だけは折られなかったのです。これはどういうことなのでしょう。36節を見てください。「これらのことが起こったのは、『その骨は一つも砕かれない』という聖書の言葉が実現するためであった」。聖書の言葉が実現するために、イエスさまの骨は折られなかったのです。

聖書の中に（出エジプト12章46節、民数記9章12節）、「その骨を折ってはならない」とはっきり書いてあります。それは何の骨かというと、過越祭の小羊の骨のことなのです。私たちの身代わりとして犠牲になる小羊の骨のことなのです。このヨハネによる福音書はこのことをもう一番最初の第1章からすでに予告していました。1

章29節を見てください。イエスさまに洗礼を受けたヨハネという人が、イエスさまのことをこう言っています。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」。そして36節でももう一度「見よ、神の小羊だ」と、繰り返して教えてくれていたのです。この一番最初に言われていたことが、一番最後の十字架でその通りになったのです。イエスさまはわたしたちの罪、世の罪を取り除くための、身代わりの小羊になってくださったのです。それが十字架の意味なのです。だから聖書に書いてあるとおり、その小羊の骨は砕かれないと書いてあるとおり、イエスさまの骨は砕かれなかったのです。十字架は本当にわたしたちの罪を取り除いてくれるための出来事だったので。

イエスさまはこのようにして、みなさんの身代わりの小羊になって、みなさんの罪を取り除いて、みなさんを神の子にするというお仕事を完成してくださいました。もう完成してくださったのです。だからみなさんはもう完全に神さまの子なのですね。もうみなさんの命は完成しているのです。

イエスさまは十字架の上から、「○○さん、この完成した命を上げるよ」とおっしゃっているんですよ。この命がほしい人！はい、あげます（手渡す）。ほかにほしい人！はい、あげる（手渡す）。みんなイエスさまから命をもらったね。それは完成した命ですから、ずっと大事にもっててください。イエスさまがくれた命です。もうみなさんは完全に神さまの子です。今みなさんがもらった命は神さまからのプレゼントです。大事にしてください。みなさんは神さまから愛されています。十字架はみなさんを愛している神さまの愛なのです。（赤石純也）

[今週の暗唱聖句] ヨハネの手紙 一 4章9節

神は独り子を世にお遣わしになりました。

その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。

〈ねらい〉

イエス様が十字架にかかって死んでくださった……それはわたしたちの罪を贖うために成し遂げられたことで、わたしたちは新しい生命をいただいていることを伝えます。

〈子ども観〉

「ジーザス」という映画があります。イエス様が十字架にかかれ、息をひきとる様子が、とてもリアルに、聖書の記述に忠実に描かれていました。いばらの冠をかぶせられた頭からは血と汗がしたたり落ち、手足にはぶすりとくいが打ち込まれ、その表情は苦渋に満ちていました。あまりに残酷なシーン……けれども、これがまさしくイエス様のご受難であることに間違いありません。

しかし、CSのママたちと、「これはキョーレツすぎて、とても子どもには観せられない!」と話しました。「イエス様のご受難」の真実を子どもたちに伝えますが、ここでは視覚的な補助教材は用いないで、「こどもリビングプレイズ」の讚美を用いてみましょう。お話を聞く子どもたちの表情をよく見て取りながら分級を進めます。この世は刺激的な情報や映像に満ち溢れていますし、アニメでは残酷なシーン、暴力的なシーンが日常的です。もしかしたら、教会に集っている子どもたちもそんな刺激にはなれっこになってしまって、十字架の残酷さも平気で受け入れられるのかもしれませんが、子どもたちの感性を守りながら育むことも教会の重要な役割の一つです。

また、罪の認識が十分ではありませんからピンと

こなくて、「わたしたち、ぼくたちのために死んでくれたの?」って言うかもしれません。「そうですよ。そんな苦しい目にあってみんを救ってくださったんだよ。ありがとうってお祈りしましょうね」と語ります。教師自身がこのイエス様の十字架に深く感謝していることを伝えます。

〈展開例〉

おはよう。先週は元気に幼稚園や保育園に行けたかな。イエス様は目には見えないけれど、みんなと一緒にいて守ってくださいました。

今日の礼拝では、そのイエス様が十字架にかかって死んでくださったお話を聞きました。それは、わたしたちの罪、悪い心のためでした。イエス様はこの世にいる間、何一つ悪いことはしていないのに、わたしたちの代わりになって、痛くて、苦しくて、恥ずかしい十字架に、ものすごく悪いことをした人としてはりつけられたのです。それは、みんなのことが大、大、大好きだから身代わりになってしてくださったことなのです。「神様の子」にさせていただいてうれしいね。「イエス様、ありがとう」って言いましょね。

さあ、「十字架のイエス様、ありがとう」っていう気持ちをこめた讚美があります。みんなで歌いましょ!!

〈お祈り〉

天の父なる神さま、ぼくたちわたしたちの代わりに十字架にかかってくださってありがとうございます。わたしたちは、神様の子どもになって、とてもうれしいです。アーメン。

〈うたってみよう〉

『両手いっぱい愛』（いのちのことば社『プレイズワールド（ジャンプ）13番』）

1 ある日 イエスさまにきいてみたんだ どれくらい ぼくをあいしてるの?

これくらいかな? これくらいかな? イエスさまは だまって ほほえんでる

2 もういちど イエスさまにきいてみたんだ どれくらい ぼくをあいしてるの?

これくらいかな? これくらいかな? イエスさまは やさしく ほほえんでる

3 ある日 イエスさまはこたえてくれた しずかに 両手を ひろげて

そのでのひらに くぎをうたれて じゅうじかにかかってくださった

それは ぼくの つみのため ごめんね ありがとう イエスさま それは ぼくのつみのため

ごめんね ありがとう イエスさま ごめんね ありがとう イエスさま

〈ねらい〉

イエス様がわたしたちの罪のために十字架につけられたことを知り、神様に愛されていることを知って、感謝の気持ちを持つ。

〈展開例〉

みんなはケガしたことがあるかな？ どんなケガをしたことがある？

(子どもたちがそれぞれ意見を言う)

ケガって痛いよね。でもイエス様はその100倍か、もっと大きな痛みである鞭で打たれたり、釘で手と足を十字架に打ち付けられたりと、とても苦しい思いをして十字架につけられました。なぜそんな苦しい思いをして十字架につけられたかみんな考えてみましょう。

みんなはいけないことをしたり、嘘をついたりしてまったことってあるかな？ 先生は小さい頃、家に帰ってきたら、お母さんに「帰ってきたらうがいをしなさい！」って言われたけれど、うがいをするのがめんどくさくて、「もう、うがいしたよ」と嘘をついてしまったことがあります。でも、嘘をついたりしていいのかなー？

(みんなに聞く)

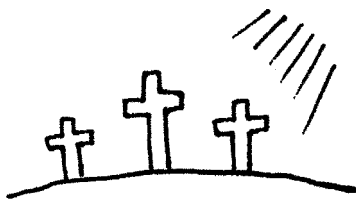
……よくないよね！ 神様は嘘をつくことを嫌います。ほかにもケンカすることなども好きじゃありません。でもわたしたち、人は、わかっているてもしてしまうことがあります。神様が嫌いなこと、「罪」を、人はたくさん持っています。わたしたちは、いったいどうしたら、その罪の苦しきから自由になることができるのでしょうか。

イエス様がわたしたちの代わりになって、わたしたちの「罪」を取り除くために、大きな痛みを味わい、苦しい思いをして、十字架につけられました。そうして、わたしたちの罪を取り除いて、わたしたちを助けてくださいました。わたしたちは、罪がありますが、神様に愛されています。神様の子どもとして命が与えられています。

胸に手をあててみましょう。ドキドキしているね。わたしたちの命、これは神様からの愛のプレゼントです。大事にして感謝しましょう。

〈祈り〉

神様、わたしたちは罪の多い人間です。イエス様がわたしたちの罪のために十字架にかかってくださったことに感謝します。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉


十字架のイエス様の言葉から学ぶ。

- ① 「渴く」……父なる神との交わりの中に生きておられたイエス様が、神から完全に捨てられた苦しみの叫び。
- ② 「成し遂げられた」……イエス様は、聖書に記されている救いのみわざを完了された。


〈展開例〉


1. 「渴く」

厚紙を切り抜いて⊕ ⊙ ▲、十字架の絵を作る。
(十字架の表側は赤色、裏側は青色にぬる。罪は十字架の真ん中におさまるような大きさで作る)





私たち人間は、罪を犯すことによって、(罪を人の上のせる) 神様と交わることができなくなってしまいました。神様は罪を憎まれるる聖なるお方だからです。







罪が取り除かれるためには、その罪が罰せられなくてはなりません。





イエス様は私たちの罪を背負って十字架につけられました。(▲を十字架(赤色)の上のせる)

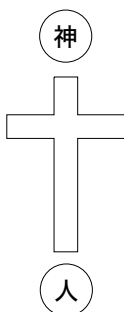




罪に対する神様の恐ろしい怒りとのろいは、十字架の上のイエス様に向けられました。私たちの罪は、イエス様の死によって罰せられたのです。

「渴く」という主イエスの言葉は、このとき神

様から捨てられた苦しみの叫びでした。



罪は十字架によって取り除かれました。十字架の救いによって私たちは清められ、神様から命の水をいただくことができるようになりました。

(罪をのせたままで十字架を裏返し、青色にする)

2. 「成し遂げられた」

イエス様は「成し遂げられた」と言って息を引き取られました。口語訳聖書は「すべてが終わった」、新改訳聖書は「完了した」と訳しています。イエス様は、救い主としてやるべきことを聖書に書かれてあるとおりに全部なし遂げて、完了してくださいました。この言葉は「救いのみわざは完了した」というイエス様の勝利の宣言です。十字架によって取り除かれない罪はありません。ですから、私たちは安心してこの救いに依り頼むことができるのです。

○比べてみよう

釈迦しやか(仏教を開いた人)の最後の言葉

「どうかいつも次の言葉を思い出してほしい。すべて生まれたものは滅びるということ。そして解脱げだつ(迷いの世界の苦悩を脱すること)するために休みなく努力してほしい。」(『人間最後の言葉』クロード・アヴェリーヌ著より)

イエス様の言葉と比べて、どこが違うか話し合ってみよう。

3. 作ってみよう(バクバク折紙)

(次ページを参照)

つくってみよう。パクパクおりがみ

〈用意するもの〉

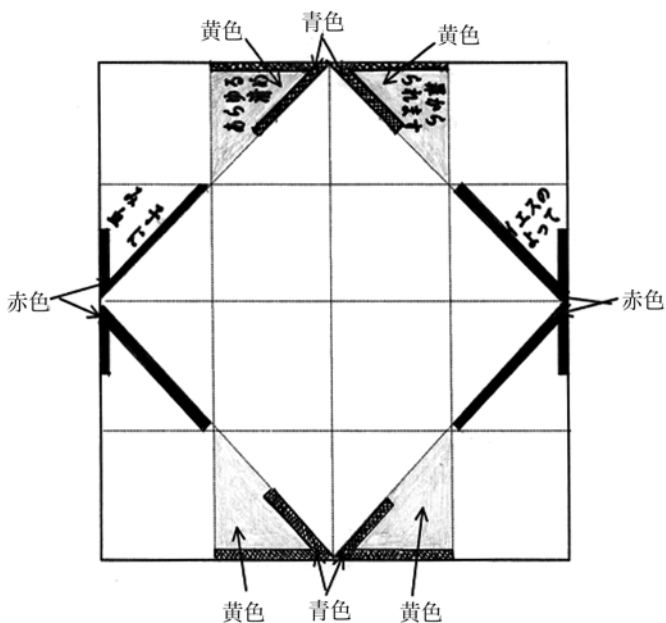
折紙、サインペン（赤と青と黄色）、黒のボールペン

〈作り方〉

- ①折紙の色のついていない方を上にする。
- ②四つの角が真ん中にくるように折る。（座布団折り）
- ③裏返して②と同じように折る。
- ④下側の袋になっている部分に両手の親指と人差し指を入れる。（さらに四つに折りたたんで折り目をつける）とやりやすい）
- ⑤縦に開いた面の真ん中に赤で十字架を書く。
- ⑥横に開いた面の真ん中に青で十字架を書く。



- ⑦色のついていない方を上にして折紙を開く。まず黄色の部分をめり、「み子イエスの血によってあらゆる罪から清められます」（ヨハネー1:7）を各部分に分けて書く。（開く前に、書く面に鉛筆で印をつけておくとわかりやすい。下の図は開いたときのもの）



- ⑧再び①～③の順で折って指を入れてパクパクする。

〈ねらい〉

- 旧約聖書のメシヤ預言が具体的にどのように新約で成就しているかということを確認することによって、旧約と新約の一貫性について学ぶ。
- イエスが旧約聖書で約束されていたメシヤであり、約束の成就としての贖いを成し遂げられたということ学ぶ。

〈展開例〉

質問1

「渴く」と言われたのは、旧約聖書のどんな預言の成就なのか。キリストについてどういうことを意味しているか。(参照 詩22:16)

質問2

「酸いぶどう酒を…… 受ける」とは、どんな預言の成就なのか。キリストについてどういうことを意味しているか。(参照 詩69:22)

質問3

「その足は折らなかつた」とは何の象徴なのか。キリストについてどういうことを意味しているか。(参照 出12:46)

質問4

「わき腹を刺した」とはどんな預言の成就なのか。キリストについてどういうことを意味しているか。(参照 ゼカ12:10)

質問5

キリストが言われた「成し遂げられた」の内容は何を指しているのだろうか。

まとめ

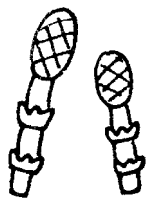
イエスは、十字架上で私たち、本来は自分の罪のゆえに神から引き離され、見捨てられるべき存在、の身代わりとして苦しみを受けられた。「渴く」や「酸いぶどう酒を……受ける」はそうした見捨てられた私たちの身代わりとなられたことを表している。

また、主は真の過ぎ越しの小羊として私たちのために血を流され、その血によって私たちを滅びから救い出してくださった。「その足は折らなかつた」は、そのことを示している言葉である。「わき腹を刺した」のは、キリストが真に人間として私たちの身代わりになられたことを示している。

キリストは、このように真の過ぎ越しの小羊として、受肉して、罪深く神から見捨てられて当然である私たちの身代わりとなって死んでくださり、贖いを成し遂げられて、私たちに永遠の命への道を開いてくださったのである。

〈祈り〉

神様、私たちのために独り子を真の過ぎ越しの小羊としてお与えくださり、感謝します。私たちは、キリストのその贖いによって死から命へと移されました。神様の愛の深さ広さを少しでも私たちが理解できるようお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



この聖書箇所は、ヨハネ福音書全体のクライマックスの一つと言えるでしょう。

主の復活を疑っていたトマスに、復活の主ご自身が出会ってくださり、そのことによって、福音書が冒頭で語っていた「言は神であった」(1:1)との信仰の告白へと、彼もまた導き入れられたことが印象的です。

〈トマスの疑い〉

トマスは、先に主イエスとその復活のみ姿を弟子たちに示してくださったおり(19以下)には、その場に居合わせませんでした。ほかの弟子たちの証言にも復活を信じることができず、イエスの手に釘跡を見、指をそこにいれ、またイエスの脇腹に手を入れてみなければ決して信じないと言い切ります(25)。

注解者たちの中には、彼を「実証主義的懐疑論者」と呼ぶ人もありますが、彼がひたすらに懐疑論者であったと考えるよりも、信仰と疑いの間を揺れながら生きていた人であったとするほうが適切であると思います。そうであればトマスは、特別に疑い深い人ではなかったということになります。

ただ、11章で主イエスがラザロの死について語られた時、彼は「わたしたちも行つて、一緒に死のうではないか」(16)と言っています。このことから、彼は人間は死ぬば終わりであり、誰かのために死ぬことこそ人間の最高の行為であると考えていたとも推測されます。

〈わたしの主、わたしの神よ〉

八日の後、おそらくは復活日の次の安息日に、復活の主はトマスにも出会ってくださり、み言葉をくださいます。トマスは「わたしの主、わたしの神よ」と明確に信仰を言い表します。

信仰は実証的な次元をこえて、主との出会いの

いとなみです。トマスは科学的に説得されたのではなく、復活の主との出会いを通して、主の十字架の死とよみがえりとがまさに「わたしの」ためであり、「わたし」への愛のみわざであったことを理解して、信じたのです。

主イエスとともに死のうと決意したにもかかわらず、トマスもまたほかの弟子たちとともに十字架の主イエスを裏切り、見捨てて、主のみ前から逃げてしまいました。その時に彼は自分の罪の深さと無力とを痛切に思い知らされ、絶望を感じたに違いありません。

しかし、そのような彼を赦し、死をこえる命を与えることのために、また真の「平和」(26)を与えてくださることのために、主は死んでよみがえってくださいました。そしてこのお方とともに生きる命こそ、まことの命であることを示してくださいました。そのことがわかった時に、彼は主イエスのみ前にひれ伏すほか、なすすべがなかったのです。そして彼自身も、新しい命によみがえったのです。

復活は人間の理性をこえた、ただ信仰によってのみ受け入れることを許される事柄です。人間理性をこえたみわざであるからこそ、私たちは復活のイエス・キリストを主、神として礼拝するので

す。復活の主は「見ないのに信じる人は、幸いです」(29)と仰せになりました。地上の、また復活の主イエスをその目で見ると幸いにあずかった弟子たちの時代は去って、新約の教会は主イエスのみ言葉と聖霊によって主を信じます。聖書と聖霊を通して、私たちも「見ないのに信じる」「幸いです」な者とされているのです。(木下裕也)

※第9号(2003年4・5・6月号)27ページより、再掲載です(編集部)。

(単元のねらい)

復活の主イエスとの出会いをトマスの体験から伝える。復活という、信仰者の幸いの核心を子どもたちにわかりやすく伝えるには最適の聖書箇所であるだけに、できるだけテキストに即したい。「平和」「幸い」というメッセージを生き生きと伝えるために、信じないトマスに平和がなかったこととのコントラストを明確に描き分けたい。そしてヨハネ福音書の趣旨に沿って、「信じる」ことへと子どもたちを招きたい。

「イエスさまに会う日」

今日は何の日ですか。そう、イースターです。イースターとはどういう日ですか。そう、イエスさまが復活した日ですね。ですから今日は、イエスさまがよみがえられたその日のことを考えてみましょう。弟子たちがみんな集まっているところによみがえったイエスさまが現れました。弟子たちは大喜びです。よみがえったイエスさまはそのときこうおっしゃいました。「あなたがたに平和があるように」。弟子たちには平和はなかったのでしょうか。なかったのです。弟子たちの心には平和なんかありませんでした。つらい悲しみで心はもう真っ暗だったのです。どうしてだと思えますか。そうです、イエスさまが死んでしまったからです。でもイエスさまが捕まえられたときに弟子たちは何をしていましたか。そうです、逃げてしまったのです。イエスさまを裏切ってしまった。だから弟子たちは自分たちの罪のことがつらくてつらくて苦しんで、悲しくていっぱいだったのです。ああイエスさまはわたしの罪のために死んでしまった。ああわたしは本当に罪深い罪人だ。だから心に平和なんか全然なかったのです。心は真っ暗だったのです。

イエスさまはそういう真っ暗闇の弟子たちに、太陽のように現れたのです。あなたの罪はゆるされているよ。もう悲しまなくていい、苦しなくていいよ。わたしは復活したから、もうあなたの暗闇は吹き飛んでしまったよ。もうあなたは太陽の明るい光に照らされて、明るい心で生きていく

ことができるよ。わたしがあなたに平和を与えてあげるよ。こう言ってくださったのです。「あなたがたに平和があるように」。

ところが、そのときそこにいなかった弟子がいました。トマスという名前の弟子です。あとになってからほかの弟子たちがトマスに「わたしたちはイエスさまを見たよ」と言ったとき、トマスは「ぼくは絶対信じない」と言いました。復活なんて絶対信じない、と言ったのです。トマスは信じない人でした。信じない人だったということは、トマスの心は真っ暗闇のままです。つらい苦しい心のままです。

みなさんはどうですか？ トマスと同じような気持ちをする人はいますか？死んだ人がよみがえるなんて絶対信じられない、と思いますか？そういう人にはどうことが起こるか、トマスに起こったことを読むとよく分かります。だからよく注意して続きを読んでみましょう。26節に「さて八日の後」と書いてありますね。この日は何曜日だったかわかりますか。ここだけではわかりません。ヒントは19節に書いてあります。「その日、すなわち週の初めの日の夕方」、週の初めの日とは何曜日ですか。そうです、日曜日です。日曜日にトマス以外の弟子たちはみんな最初イエスさまを見たのです。そのことをトマスに言ったのだけれども、トマスは信じなかったのです。その日から数えて「八日の後」ということは次の日曜日ということ。もういちど日曜日

の出来事だったのですね。そのときには先週の日曜日にいなかったトマスもみんなといっしょにいました。そのときに何が起こったのでしょうか。もう一度26節を見てください。「戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真真中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた」。今度の日曜日には、トマスも一緒にみんながイエスさまに出会ったのです。鍵がかけてあってもイエスさまには出会えるのです。どうしてだと思えますか。私たちは聖書を通してイエスさまに出会うからです。ドアに鍵がかけてあっても私たちはイエスさまに出会えるのですね。イエスさまに出会うための本当のドアは聖書なのです。聖書を開けば、みなさんはイエスさまに出会えるのですね。

イエスさまは今まで信じなかったトマスに何とおっしゃっていますか。27節を読んでください。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」。そこに現れたイエスさまは幽霊ではなくて本物のイエスさまです。手にくぎを打たれて十字架に付けられたそのイエスさまです。だから手にはくぎの傷があるのです。先週の十字架のお話を覚えていますか。十字架の上でもう死んでしまったイエスさまに兵士の一人がどんなことをしましたか。そうです、イエスさまのわき腹を槍で刺したのでしたね。だからイエスさまのわき腹には槍で刺された傷があります。その傷をトマスに見せて、あなたの手でさわってみなさいとおっしゃったのです。それは幽霊ではなく本物の

イエスさまだったのですね。その本物のイエスさまが、今まで信じない人だったトマスに現れて、こうおっしゃったのです、「トマス、信じない人ではなく信じる人になりなさい」。これが日曜日の出来事でした。

みなさんが日曜日に教会学校の礼拝に来て、聖書を開いて、イエスさまのお話を聞くときに、みなさんは本物のイエスさまに出会うことができます。そしてイエスさまはみんなに、「○○くん、信じる人になりなさい」、「○○さん、信じる人になりなさい」とおっしゃっているのですね。さあ、みなさんはどうしますか。

トマスはどうしたのでしょうか。何と答えていますか。「わたしの主、わたしの神よ」、「主イエスさま」、信じる人になりました。今まで真っ暗闇の心のままで、つらい苦しい心のままだったトマスに、パーッと太陽のような光がさしました。「イエスさま、信じます!」。もうトマスは、明るい光の中を歩いていくことができます。トマスの心にも平和が与えられました。「トマス、あなたにも平和があるように」。

みなさんはどうしますか。今まであまり信じていなかった皆さんも、今日からは、トマスと同じようにイエスさまを信じる人になってください。そしてイエスさまを「わたしの主」、「ぼくの神さま」と呼んでください。そして日曜日にはいつも教会学校に集まって、一緒に聖書を開いて、本物のイエスさまに出会って、イエスさまに太陽のように照らされて、イエスさまを信じる子どもとして、光の中を歩いていってください。(赤石純也)

[今週の暗唱聖句]

ヨハネによる福音書 20章27節

信じない者ではなく、信じる者になりなさい。



〈ねらい〉

十字架にかかられたイエス様は、墓の中からよみがえり、弟子たちの前にあらわれてくださいました。最初はイエス様の復活を信じることができなかったトマスも、主ご自身に出会い、信じる者に変えられました。主を信じることの幸い、平和を子どもたちに伝えます。

〈子ども観〉

幼稚科の子どもたちもゲーム全盛の現代に生活していますから、「復活」という言葉を、聖書が取り扱う「イエス様の復活」という意味合いより、ずいぶんお気軽に受け入れているかもしれません。しかし、イエス様の墓の中からのよみがえりは、ゲームやお話の世界のことでありません。その証拠に、主を信じたトマスは劇的に変えられたのです。「わたしの主、わたしの神よ」と告白したのです（ヨハネ20：28）。十字架につけられ葬られたイエス様がよみがえられたことを、驚きと感謝をもって伝えましょう。

〈展開例〉

イエス様は、十字架につけられて死んでしまいました。お墓の中に入れられたイエス様はどうなったのでしょうか。そう、お墓の中から出てこられたのです。復活されたのです。最初、マグダ

ラのマリアさんたちは、空っぽのお墓を見つけて、「誰かがイエス様のお体を持って行ってしまったのね」と思い、嘆き悲しみました。すると、そこによみがえられたイエス様が現れたのです。その後、弟子たちの前に現れ、次の日曜にはトマスの前にも現れてくださいました。

トマスは、「わたしはこの目でちゃんとみるまではイエス様の復活を信じません」と言っていたけれど、イエス様に出会って、「わたしの主、わたしの神よ」と言いました。イエス様を本当の神様だと信じることができました。イエス様を信じることができて、トマスさんはきっととってもうれしくて、喜びに満ち溢れていたでしょう。わたしたちは、マグダラのマリアさん、弟子たち、トマスさんのように復活したイエス様に直接お会いすることは、できないけれど、「見ないのに信じる者は幸いである」（ヨハネ20：29）とイエス様はおっしゃいました。復活のイエス様をわたしたちも信じられるように祈りましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、今日はイエス様が復活されたお話を聞きました。わたしたちもトマスさんのようにイエス様の復活を信じ、イエス様を神様と信じることができるよう。アーメン。

〈やってみよう〉

◎にわたりのたまごは、おかあさんにわとりから生まれたときはまったく動かなくて、あれ？死んじゃってるのかな？って思うけど、おかあさんにわとりがあたためていると、からをやぶってかわいいひよこが出てきます。イエス様の復活に似ていますね！だから、イースターには、たまごを配っておいわいするのです。では、手遊びをしてみましょう！

まるい たまご

まるい たまごが パチンとわれて かわいいひよこが

ぽろ ぽろ ぽろ (おねのまごを手にあそぶ) ま〜あかひん (ひよこのまわりには卵をひらく) ぽろ ぽろ ぽろ (おどろいて) (毛)一層はねを(29/30)

まるい たまごが パチンとわれて かわいいひよこが ま〜あかひん ぽろ ぽろ ぽろ

〈ねらい〉

イエス様の復活を喜び、信じることの幸せを伝える。

〈展開例〉

先週お話しした、イエス様がわたしたちの罪のために死んでくださった話を覚えていますか？
それでは、イエス様は十字架にかかって死なれて、それでおしまいだっただけでしょうか？

いいえ。イエス様はよみがえって、お弟子さんの前に現れたのです。みんなはどう？？死んだ人が生き返るなんて信じられないって思う人もいるかな。実はお弟子さんの中にも、イエス様の復活を信じられない人がいましたね。

そのお弟子さんの名前は誰でしょうか！
ジャジャン！ 1、ペトロ 2、トマス 3、機関名 トーマス

正解は2、トマスでしたね。トマスさんはイエス様がよみがえったことを信じられず、心が真っ暗でした。ですが、イエス様がトマスの前に現れてくださいました。お弟子さんが集まっていたところに現れて、「あなたがたに平和があるように」と言われました。そして、トマスに近づいて、トマスにご自身の手の釘の跡を触らせ、わき腹を

触らせて、イエス様はなんとおっしゃったでしょうか！？

○に入る言葉を考えてみよう！！

「○○○○○ではなく、○○○○○になりなさい。」
正解は「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」でした！

イエス様は信じる者になりなさいと言われてましたね。トマスさんは心が明るくなって信じる者になりました。

イエス様はみんなにも言っています。「信じる者になりなさい。」そして聖書にこう書いてあります。「見ないのに信じる人は幸いである。」

わたしたちは目の前で復活を見たわけではないですね。でも、聖書を通して信じています。見ないで信じることは幸せです。わたしたちも、日曜学校や聖書を通して、イエス様が復活したことを信じる者になり、イースターと一緒に喜びましょう！

〈祈り〉

神様、イエス様が復活したことを心から感謝します。また、信じない者ではなく、信じる者にして下さい。アーメン。



〈ねらい〉

論理的な説明や科学的な証拠が示されたからといって、信じていない人が信仰を持つようになるわけではない。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と語りかけてくださる主イエスと出会うことから信仰が生まれる。私たちと出会い、私たちの主となってくださるために、イエス様はよみがえってくださった。

〈展開例〉**1. 信じるって、愚かなこと？**

信仰を持たない人は「本当にそんなことを信じているの？」と、神様を信じていることを愚かなことと思うかもしれません。目に見えないことや証明できないことを信じることは恥ずかしいことなのでしょうか。でも、実は多くの人が、自分で見たり確かめたりしていないことを信じて生きているのです。

手紙が宛先の相手に届くことを信じてポストに入れます。お医者さんからもらった薬が効くことを信じて言われたとおりに飲みます。友だちが約束の場所に来ることを信じて待ち合わせをします。信じることをしないで生きることのほうが難しいのです。このように自分で確かめていないことでも信じることができるのは、相手が信頼できるからではないでしょうか。信仰とは信頼することから始まります。

2. トマスの告白

トマスはイエス様がよみがえったことを最初、信じるできませんでした。自分で見て触って確かめてみなければ信じられないと言いました。そんなトマスに、復活されたイエス様は姿を現され、「あなたの指をここにあてなさい、あなたの手をわたしのわき腹に入れなさい」と言われます。主ご自身がトマスに、「見なさい、触りなさい、信じる者になりなさい」と語ってください

ます。

「わたしの主、わたしの神よ」とトマスは告白します。そこにあったのは、もはや疑いの思いではなく、ただ驚きと喜び、悔い改め、信仰の告白だけでした。

3. 信じる者となりなさい

信仰は、御言葉によって語りかけられる主との出会いから始まります。圧倒的なイエス様の力、言葉、愛にふれたとき、信じる者とされるのです。トマスだけでなく私たちも聖書を通して、よみがえられたイエス様に出会うことができます。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と、イエス様は私たちにも語りかけてくださっています。

4. イースターエッグを作る**①用意するもの**

生卵、キリ、ストロー、竹串、ボール（卵を入れる）、ボンド、マジック、リボン、スパンコール、ビーズ、シールなど、お好みで

②キリで卵の上下に穴をあける。（下を大きめに）
下の穴に竹串を入れて黄身をつぶす。

③上の穴にストローを差し、息を吹き込み穴から黄身を出す。（卵は後でお料理してね）

④卵の中を水で洗って乾かす（ここまでは教師がやっておくと早く作業ができる）

⑤マジックなどで色を塗り、ビーズなどを貼る和紙や絵を貼ったり、穴にリボンを通してもよい。（裏返したペットボトルの蓋に卵をおくと描きやすい）



〈ねらい〉

- 復活の主にお会いして、トマスの心がどう変化したか理解する。
- キリストの復活は、見て信じるものではなく、神からいただく信仰によって受け入れるべきものであることを学ぶ。

〈展開例〉

質問1

トマスは、なぜ復活の主についての他の弟子たちの話を信じようとはしなかったのか。

質問2

イエスが部屋の中央に立ったのを見た時、トマスはどんな気持ちだっただろうか。

質問3

イエスの手とわき腹を見て触るようにとの仰せを聞いて、トマスはどう思っただろうか。

質問4

トマスは、どういう気持ちで「私の主、わたしの神よ」と言ったと思うか。

質問5

イエスの言う「見ないのに信じる人」とはどのような人のことだろうか。

まとめ

トマスは、特に疑い深いというわけではなく、私たち不信仰な者の代表のような人物である。

彼は、復活のイエスに直接お会いして手とわき腹を見て触ることによって信じたが、聖霊をいただいている私たちは、直接イエスにお会いすることはないけれども彼を信じている。

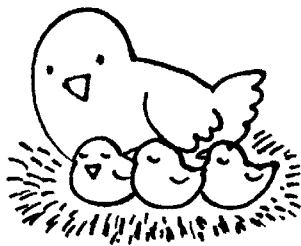
旧約の神の民イスラエルは、直接神の奇跡を何度も目撃したが、それは彼らの神への信仰を強める役には立たなかった。

結局のところ、神を信じるためには私たちは自分の経験を根拠にすることはできず、神からいただく信仰によって神を信じるしかない。この信仰こそが、神からの恵みの賜物なのである。

私たちは、しるしを求めることをせず、信仰のみによって神を信じ、従う者でありたい。

〈祈り〉

神様、私たちはみなトマスのように疑い深く、あなたを信じることができない者です。どうか私たちに聖霊によって信仰をお与えくださり、あなたを心から信じ、従う者とさせてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



テキスト ヨハネによる福音書 12章1～8節

〈背景と文脈〉

四福音書のすべてに、女が香油を主イエスに注いだ記事が収められている。一般に、マタイ26章6～13節とマルコ14章3～9節に記されている出来事は、ヨハネ12章1～8節の出来事と一致する、と考えられている。それに対してルカ7章36～50節の記事は、異なる出来事である、と考えられている。

主イエスはベタニアで、マルタとマリアの兄弟ラザロを生き返らされた（ヨハネ11:1-44）。それを目撃した多くのユダヤ人がイエスを信じたことを知り、危機感を抱いた祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを殺そうと企んだ（11:53）。それで主は、荒野に近い地方のエフライムという町に行かれ、弟子たちと滞在された（11:54）。しかし、ご自身が死なれることになる過ぎ越し祭が間近になり、再びベタニアに来られた。

〈マリアの香油注ぎ〉（12:1-3）

それは、過ぎ越し祭の六日前のことであった。主イエスと弟子たちを迎えて、ベタニアで夕食の席が設けられた。上記のマタイとマルコの並行記事を見ると、それはらい病人シモンの家で行われた夕食会であった。ラザロはイエスの一行と共に食事の席に座っていた。マルタは給仕をし、客をもてなしていた。

そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一トラ（326グラム）もってきて、主の足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。並行記事のマルコ14章3節によると、「ナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた」とあるので、壺を壊し、香油を使いつくしたことがわかる。それは、ユダがその香油を三百デナリオンと値踏みしていることと一致する。一デナリオンは、当時のユダヤの労働者の一日分の賃金にあたる。ユダヤ人は安息日や律法で定められた祝祭日は働かないため、三百デナリオンは、ざっと一年分の賃金に当

たる。非常に高価なものだった。

ユダヤ人は、足を投げ出して半分寝そべった体形で食事をしたが、マリアはその投げ出した主の足に香油を塗った。ナルドの香油はインドから輸入されたもので、裕福な人が特別な客を迎えたときに、客に注ぐために用いられた。「イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった」（3）マリアの行為は、彼女の信仰、謙遜、感謝、愛、献身を表わすものと思われる。当時、足を洗うのは奴隷の仕事であり、彼女のはしめとしての姿勢が強調されている。

〈ユダの反応とイエスの答え〉（12:4-8）

マリアが高価な香油を惜しげもなく主に注ぐのを見たユダは、「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか」（5）と厳しく非難した。彼は、マリアが無駄なことをしている、と感じた。ユダは、貧しい人々を心にかけていたわけではなく、主と弟子たち一行の金入れを預かっていたが、その中身をごまかしていたからであった。彼は、お金の勘定に優れた現実主義の人だったと思われる。主イエスに高価な香油を惜しげもなくささげつくすマリアの信仰を理解できなかった。

主は「この人のするままにさせておきなさい。私の葬りの日のために、それを取って置いたのだから」（7）と言われた。ユダヤ人が死体を葬るときは、香料を塗り、亜麻布に包んだ（19:39-40）。マリアの行為はそれに匹敵する。ちなみに並行記事を見ると、マリアは足だけでなく、「頭」（マタイ14:3）と「体」（マタイ14:8）にも香油を注いだ。主イエスは繰り返し弟子たちに、ご自分がメシアとして贖いの死を遂げられる、と予告されていた。マリアはそのことをかなり理解していたのではないだろうか。そして、メシアとして身代わりの死を遂げられる、主イエスへの深い信仰と感謝を、高価な香油をささげることによって表現した、と思われる。（後藤公子）

子どもカテキズム

問37 神さまが人に求めておられることは何ですか。

答 神さまが私たちに求めておられることは、感謝することです。

参考教理問答 ハイデルベルク信仰問答 問2, 86, 90

ウエストミンスター信仰告白 16章2, 6節

ウエストミンスター大教理問答 問97

聖書に書かれているのは、真の神様が、「私たちのためにしてくださったこと」と「私たちに求めておられること」でした（問6）。前回までの第二部「信仰の道」で、「私たちのためにしてくださったこと」、真の神様について信じるべきこと、特にイエス様の救いの恵みを学びました。今回の問37からは、第三部「生活の道」に入ります。ここでは、真の神さまが、すでに救われた「私たちに求めておられること」を学びます。

(1) 感謝の応答

大洪水から救い出されたノアは、箱舟から出ると、祭壇を築いて神様を礼拝しました（創世記8:20）。また、葦の海を歩いて渡ったモーセとイスラエルの民は、主を賛美して歌いました（出エジプト15:1）。このように、真の神様に救い出された者たちは、神様を礼拝し、賛美を捧げて、感謝を表してきました。イエス・キリストの贖いによって、罪から救い出された私たちは、ノアやモーセたちが体験したものにまさる神様の偉大な御業によって、救われたのです。もはや感謝を表さずに生きて行くことができるでしょうか？ 神様が、すでに救われた私たちに求めていらっしゃるの、感謝の応答です。

(2) 新しく生まれた者の生き方

キリストの救いに感謝するという事は、単に道徳的な礼儀として感謝をするということではありません。感謝の応答は、神様が創造の御業において最初に意図された人間の生き方の回復です。罪に囚われた古い生き方を捨て、キリストによって新しくされた生き方です。キリストに倣って生きる、キリストに従う歩みでもあります。神の国の進展に仕える、終末の完成へと向かう歩みと言っても良いでしょう。このような生き方は、永遠に「神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすため」（問1）という私たちの人生の目的でもあります。

(3) 主が喜んでくださる

もちろん、私たちの感謝の応答は、弱さや不完全さを持っています。しかし、感謝の応答は、私たちを義としたり、救いに入れたりするためのものではありません。すでに救われた者たちの喜びの応答です。したがって、私たちが神様を喜ばせようとして、神様を愛し、人々を愛する行動が、不完全さを持っていたとしても、それについて、あまりにも気に病む必要はありません。

むしろ、大胆さをもって、主に仕えて歩むべきです。主は、そのような私たちの不完全な良い行いをも、喜んで受け入れてくださいます（ウ信仰告白16:6）。
(大西良嗣)

テキスト ヨハネによる福音書 12章1～8節
カテキズム 子どもカテキズム 問37

〔単元のねらい〕

ウェストミンスター小教理問答にせよ、ハイデルベルク信仰問答にせよ、教理問答は救いの教理について述べた後に、救われた者の感謝の生活について教えている。「子どもカテキズム」でも、今回から「第三部 生活の道」の単元に入る。救いの恵みを受けた者は、キリストの愛に駆り立てられて（コリント二5:14）おのずからこれにこたえて生きる感謝と献身の生へとうながされていくであろう。キリストを愛する者たちにとっては、キリストに仕えて生きることそのものが喜びなのである。今朝のテキストもそのことを豊かに語り示している。

「かぎりない愛」

イエスさまが地上のご生涯の、最後の一週間を過ごしておられたときのことで、イエスさまはベタニアという村の、マルタとマリアの姉妹の家に招かれて、食事の席についておられました。マルタもマリアも、イエスさまを愛していました。イエスさまもふたりの姉妹を深く愛しておられました。

その食事の席で、そこにいた人々がびっくりするようなことが起こったのです。妹のマリアが、とても高価なナルドの香油をイエスさまの足に塗り、自分の髪でイエスさまの足をぬぐったのです。家中が、香油のよい香りでいっぱいになりました。マリアのこのふるまいは、イエスさまへの愛のあらわれです。マリアはイエスさまへの愛と感謝の思いをこのようにしてあらわしました。それは彼女がイエスさまに対してなし得た、精一杯の愛の表現だったのです。

けれども、マリアのこのふるまいをとがめる人があったのです。イエスさまの弟子のひとりのイスカリオテのユダは言いました—なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。

この香油の値段は三百デナリオンだったようです。一デナリオンは、およそ一日働いた分のお給料だと言われています。そうすると、三百デナリ

オンは三百日働いて得ることができるお金です。このナルドの香油がどれほど値段の高い、上等なものであったのかがわかります。

それで、ユダはこう思ったのです。これほど高価な香油を惜しげもなく、全部イエスさまの足にそそぎかけて、使い果たしてしまうのはもたないではないか。無駄遣いではないか。これを売ってお金にかえて、貧しい人々にほどこしをしたほうがよほど有効に用いることができはたはずではないか。

もしかしたらユダだけでなく、このときに一緒にいた弟子たちもみなそう思ったかもしれません。そしてイエスさまもやはり自分たちと同じようにお思いになって、マリアをお叱りになるにちがいないと考えたかもしれません。みなさんは、このマリアのふるまいをどう思うでしょうか。

イエスさまは、このマリアのふるまいをとがめることをなさいませんでした。それどころかとてもお喜びになったのです。マリアがこんなにも深い愛でご自分を愛していることをお喜びになったのです。そして、この人のするままにさせておきなさいとおっしゃったのです。

愛はお金にかえることはできません。愛の値打ちをお金ではかることはできません。マリアが三百デナリオンの香油を、イエスさまへの愛のた

めに惜しげもなく使い果たしたことを、ユダは無駄遣いだ、もったいないことだと思ったのでしょう。けれどもマリアは、まだこれでもはるかに足りない、遠く及ばないと思っていたはずです。なぜならマリアは、イエスさまの愛がかぎりなく大きな、深い愛であることを知っていたからです。

この出来事は、イエスさまが十字架にかかって死なれる一週間前の出来事です。なぜイエスさまは十字架に死なれたのでしょうか。わたしたちを罪から救ってくださるためであったのです。十字架は罪の刑罰です。イエスさまには罪がありませんでしたから、イエスさまが十字架にかけられる必要は少しもなかったのです。それにもかかわらず、なぜイエスさまは十字架にかけられ、死なれたのでしょうか。わたしたちの身代わりとなられ

たのです。わたしたちを罪と死のさだめから救い出してくださるために、ご自分の命を犠牲にしてくださったのです。わたしたちを愛するあまり、ご自分の命を十字架の上で捨ててくださったのです。なんと大きな愛でしょうか。

イエスさまはわたしたちをも、この十字架の愛をもって愛してくださっています。わたしたちもイエスさまを愛しています。イエスさまの愛にくらべるなら、わたしたちの愛はほんとうに小さな愛です。それでもイエスさまは、わたしたちのささげる愛を喜んでくださるのです。ナルドの香油をささげて精一杯の愛と感謝をあらわしたマリアを喜ばれたように、わたしたちがささげる愛をも喜んでくださるのです。 (木下裕也)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙 二 5章14節前半
なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。



〈ねらい〉

神様が求めておられることは、信仰のあかしとしての神様への感謝と献身の生活です。

〈子ども観〉

5才の息子（保育園・年中）に尋ねました。
 母「かんしゃってなんのことか、わかる？」
 子「知らん。わからんし。」
 母「ほら、ご飯の前に言うでしょ？ 神様に感謝していただきますって。」
 子「あ～！あれかあ。知っとるよ。分級のときに〇〇先生も言っとるよ！」
 母「お祈りするときに言うよね。」
 子「そうだ。神様、おいしいごはん、感謝していただきます、アーメンってよく、言うよ！」
 「感謝します」という言葉は、幼稚科の子どもの生活では、あまり耳慣れない、どちらかというの意味不明な言葉かなと思っていたら、教会生活をしている子どもたちにとっては、「お祈りのとき言ってる！」と、馴染みのある言葉のようです。感謝という言葉の意味をはっきりと知る以前に、教会の礼拝で、家庭でのお祈りの中で、子どもたちは「感謝」という言葉にふれて親しんでいます。感謝といえば「教会」「お祈り」と結びついているとしたら、とてもうれしいことです。キリスト者の感謝は、まず神様に対してささげら

れるものです。神様の救い、神様の愛への応答が感謝です。与えられているものはすべて神様からの愛のしるし、プレゼントです。人間は神様に愛されて生き、その愛に応じて感謝して精一杯生活する。神様の愛に気づき、受け止めて、「ありがとう」と素直に言えたとき、子どもたちの心は満たされ、すっきりと生活することができるのです。

〈展開例〉

ベタニアという村でマリアという女の人がイエス様に香油を注いだお話です。幼稚科の分級では、説教展開例をやさしくして、お話してみましょう。あれもこれも盛り込むとお話が難しくなってしまうようですから、礼拝の説教を受けて

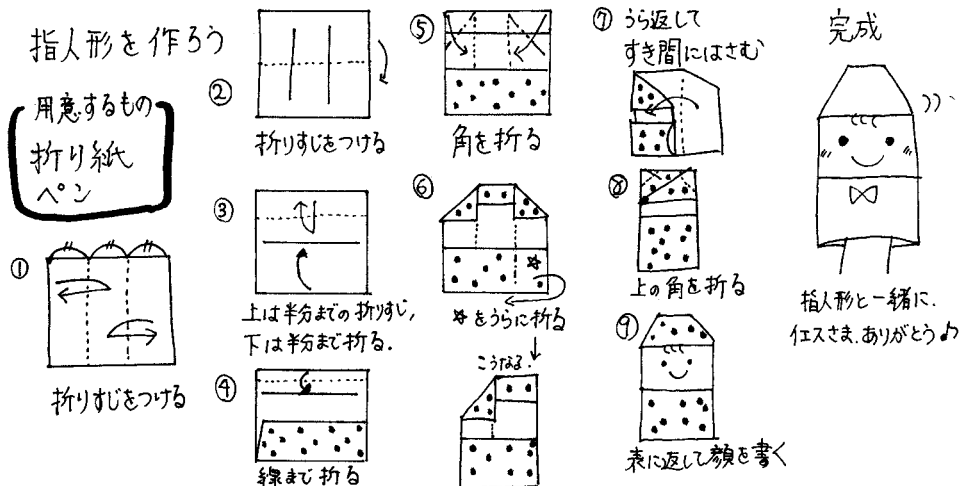
- ①マリアは心からのもてなし、感謝の気持ちをあらわしたこと。
- ②イエス様は、そのマリアの感謝の気持ちを心から喜ばれたこと。

この2点に、ポイントをしぼります。「イエス様、ありがとう」という気持ちをイエス様は喜んで受け取ってくださいます。

〈お祈り〉

父なる神さま、わたしたちの感謝のお祈りを神様が喜んでくださることを知りました。これからも素直に、いつも一緒にいてくださってありがとうございますと言えますように。アーメン。

〈やってみよう〉



〈目標〉

今日の礼拝でのお話を子どもたちといっしょに確認して、マリアの信仰を学び、感謝の生活へと導かれたい。

〈展開例〉

マルタさんとマリアさんのところに、ある日、イエスさまがいらっしゃって、いっしょに食事をされました。そのとき、妹のマリアさんがみんながびっくりするようなことをしました。それはどんなことでしたか？（三択で選ばせてもよい。①イエスさまにケーキを食べさせた。②きれいな洋服を着せた。③香油を注いだ。）

そう、香油でしたね。皆さんは香油で知っていますか。お母さんやお姉さんが使っている香水と同じようなものです。（もし香水が持参できたら、子どもたちにかがせると良い。）いい香りですね。これ、いくらぐらいするか知っていますか。（当てさせる。）実は、この小さな瓶で5,000円ぐらいします。高いでしょう。

じゃあ、マリアさんは、どれだけ注いだのでしょうか。マリアさんは、壺いっぱい香油をイエスさまの足に注ぎました。200万円ぐらいではないかと言われています。そんな高い香油をいっぺん

に使ったのです。

すると、もったいないと文句を言った人がいます。ユダです。そこにいたほかの人の中にも、もったいないと思った人がいたかもしれません。皆さんはどう思いますか？（思う思わないで選択させる。）

マリアさんはもったいないと思いませんでした。もしマリアさんが香油の壺をもう一つ持っていたら、それもイエスさまに注いだと思います。

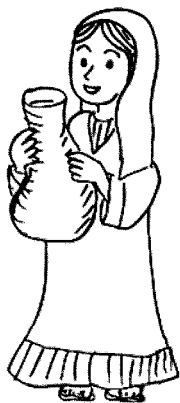
イエスさまは、マリアさんのしたことをどう思われたでしょうか。イエスさまはたいそう喜ばれました。この日はイエスさまが十字架に架かって死なれる、一週間前のことでした。

マリアは知りませんでした。イエスさまへの精一杯の感謝を香油に託してあらわして、それがイエスさまの葬りの準備となったことを教師は記憶しておきたい。

〈祈り〉

神様、イエスさまはわたしたちを救うために十字架に架かって死なれました。マリアさんのように、その感謝をいっぱいさげることが出来ますように導いてください。イエスさまの聖名によってお祈りします。

マгдаラのマリア（東広島キリスト教会 CS より）



〈ねらい〉

ナルドの香油について調べることで、マリアがしたわざを思い描き、マリアのうちにあった主への愛がいかにか大きかったかを考える。主への愛は主への感謝の生活となってあらわれる。

〈展開例〉

1. ナルドの香油について調べよう

①ナルドとは？ 聖書辞典などで調べてみよう。



「ヒマラヤに生息する植物。高さ70cmほどで、葉は大きく花はうす紅色。根から採れる香料で香油を作る。」(教文館『聖書植物図鑑』より)

②いくらぐらいしたの？

「300デナリオン」は約1年分の賃金。(1デナリオンは1日分の賃金)

③どんな香り？

すっきりとしたひのきのような香り。できたら自分で実際に香りを確かめてみたいですね。アロマオイル専門店やインターネットで買えます。「スパイクナード」や「インドナルド」の名前で売っています。

④どんなときに使ったの？

お客様の頭にこの香油を注いでお迎えしたり、死体を墓に入れるときに消毒薬および臭い消しとして体に塗ったりしました。

⑤1リトラってどれくらい？

1リトラは約326gです。実際にサラダ油や水などを瓶などに入れて、はかりで量って326gがどれくらいの量なのか確かめてみましょう。(油は水の約0.9倍の重さなので水で量る場合は359g。)意外に量が多いのにびっくりするかもしれません。それを頭(マタイ

26:7) や足にたっぷり注ぐ様子を想像してみましよう。(実際に足に同じ量の水やお湯を注いでみる)

2. 考えてみよう

①なぜマリアはこんなに高価なものをイエス様に塗ったのでしょうか。香料は少量でもよい香りがするのに、もったいないとは思わなかったのかな。→(あなたはイエス様に何をささげる?)

②マリアの思い→マリアにとってこの高価なナルドの香油はとても大事なものだと思いません。その大事な香油を惜しげもなくささげてしまえるほど、イエス様に感謝していたのでしょうか。イエス様のために、自分にできる精一杯のことをしたかったのです。神様の愛と恵みで満たされた人は、そのあふれ出る喜びと感謝をあらわさずにはいられなくなります。

3. 「喜び探しゲーム」に挑戦しよう！

欲しかった人形がなくて、代わりに松葉杖が届いたとき、パレアナは泣きました。でも牧師である父親は、「これは嬉しいことなんだよ。だってね、君には足があって松葉杖を使わなくてもいいだろう」と言って「喜びの遊び」を教えました。それはどんな状況にあっても その中から喜ぶことを探し出すゲームでした。パレアナのゲームは町全体に広がり、人々の心を明るくしました。「いつも喜んでいなさい」という聖句が、このゲームの始まりでした。

①もらったプレゼントが欲しかったゲームではなく、国語辞典だったら……

②ウソをついて叱られたら……

③病気になってしまったら……何を喜ぶ？ 喜ぶことは感謝することにつながります。『少女パレアナ』(エレナ・ポータ著) 参照

〈ねらい〉

- マリアのイエスに対してした行為の性質について理解する。
- キリストの贖いに対する私たちのふさわしい応答とは何かを考える。

〈展開例〉

質問1

マリアは、イエスに何をしたのか。

質問2

それを見てイスカリオテのユダは何と言ったか。

質問3

それに対してイエスは何と言われたか。

質問4

「わたしの葬りの日」とは何を指しているか。

質問5

マリアは、どういう気持ちで、一見せいたくな無駄とも見えるこうした行為をしたのだろうか。

まとめ

マリアは、当時のユダヤ人の一年分の労賃に相当する高価なナルドの香油をイエスの足に注いで、自分の髪でそれをぬぐった。当時、足を洗うのは奴隷の仕事であり、マリアがその仕事をする必要はなかったが、それは、メシヤとして贖いの死を六日後に遂げようとしていたイエスへのマリアの深い愛と敬意と献身の表れであった。

私たちがマリアのように、たとえ他の人たちから非難されようと、バカにされようと、ひるまず主に感謝をささげ、従う者でありたい。

〈祈り〉

神様、私たちのために、独り子の命を与えてくださってありがとうございます。私たちは、ほんの小さなことしかあなたのためにすることができませんが、マリアのように自分の持っているすべての良いものをあなたのためにささげて感謝して生きるものとさせてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



〈背景と文脈〉

パウロは、「恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか」(6:1)という疑問に「決してそうではない」(6:2)と答えて、その理由を6章の中で詳しく説明している。なぜなら、キリスト者はすでにキリストと共に葬られ、キリストと共によみがえったからである(3-5)。それは、罪に対して死に、神に対して生きる者とされたことを意味する。ここで、罪はアダムにあるすべてのものを支配するものとして描かれている。キリスト者は罪の支配から解放され、神に対して生きている者である。だから、新しい自己にふさわしい生き方をすべきである、とパウロは語る(6-11)。

〈献身の必要性〉(6:12-14)

「従って」(12)は、これから言うことが、前述の事柄と深く関わっていることを表わす。キリスト者は霊のパプテスマを通して、キリストと結合し、新しい命に生きる者とされた。「従って」(12)、以前のように、体の欲望に従うようなことがあってはならないし、体を不義のための道具として罪に任せてはならない(12)、むしろ五体を義のために用いていただくために、神に献げなければならない(13)。「献げなさい」(13)は、完全な献身をあらわす。新生の恵みにあずかったキリスト者のなすべきことは、完全な献身である。

「罪は、もはや、あなたがたを支配することはない」(14)と語っている一方、「あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません」(12)とも言っている。一見矛盾に見えるが、そうではない。キリスト者が生きている間、体の欲望から完全に自由にはならない。しかし、罪がもはや、支配することはないのも事実である。生きている間に完全な聖化はあり得ない。キリスト者は生かされている限り、このような緊張関係のなかにある。

〈二つの道—神の奴隷と罪の奴隷〉(6:15-23)

パウロは一般の原理を用いて二つの道、すなわち神の奴隷になって義に至るか、罪の奴隷になって死に至るか、どちらかの道しかない(16)、中立はあり得ない、と説明する。なぜなら、奴隷は完全に主人の所有物であり、ふたりに兼ね仕えることはあり得ないからである。キリスト者は、かつては罪の奴隷だったが、聖書の教えを受け入れ、従うようになり、罪から解放され、義に仕える者となった、すなわち義の奴隷となった(17-18)。自分の五体を不法の奴隷として生きていたが、今はこれを義の奴隷として献げて、聖なる生活を送りなさい(19)、とパウロは勧める。キリスト者のうちに聖霊が働かれて、聖化のみわががなされていくが、そのなかで、キリスト者が果たすべきことは、自分自身を義、神の奴隷として献げることである。これが聖なる生活の基礎である。

ふたつの道の行き着くところは全く違う。神の奴隷としての道の行き着くところは永遠の命である。「永遠の命」には二面ある。ひとつは、キリスト者が現在与えられている永遠の命、もうひとつは、終末的な意味での永遠の命である。ここでは終末的な意味での永遠の命の意である。罪の奴隷として行き着くところは死である。「罪が支払う報酬は死です」(23)、とは皮肉な言い方である。「報酬」は労働に対して、働いた者に支払われるものである。罪の奴隷として一生懸命罪に仕えた者に、主人である罪が支払う報酬は死である。それに対して、神の奴隷として神に仕えた者が、恵みとして与えられるものが永遠の命である。神の奴隷が与えられる永遠の命は、その働きに応じて支払われる報酬ではない。どんなに働いても永遠の命を得ることはできない。永遠の命は、ただ神の賜物として、恵みによって、神の奴隷に与えられるのである。(後藤公子)

子どもカテキズム

問38 あなたはその感謝をどのようにしてあらわしますか。

答 神さまが聖書を通して明らかにしておられる御心に従うことです。

参考教理問答 ハイデルベルク信仰問答 問91

ウェストミンスター大教理問答 問97

ウェストミンスター小教理問答 問2, 39

聖書に書かれているのは、真の神様が、「私たちのためにしてくださったこと」と「私たちに求めておられること」でした（問6）。私たちは、聖書に記された主な内容の1つである、真の神様が「私たちに求めておられること」に基づいて、感謝を表します。

(1) 自分が正しいと思うことではなく

自分が正しいと判断したことで、感謝を表そうとした場合、どのようなことになるのでしょうか？ 例えば、士師記11章にエフタの例があります。彼は、主が勝利を与えてくださるならば、無事に帰ったときに、最初に家から出迎えた人を焼き尽くす献げ物とする誓いを立てます。結果として、一人娘が出迎えて、彼女を焼き尽くす献げ物としなければなりません。モーセの律法に、人間を焼き尽くす献げ物とする礼拝方法はありません。この出来事は「それぞれ自分の目に正しいとすることをしていた」（士師記21:25, 17:6）時代に起こった悲劇です。

人間の知恵には、限界があります。自分の考えだけで、神様に喜ばれる感謝の表し方を探し当てることはできません。神様は、聖書によって、ご自身が求めておられる感謝の表し方を示してくださっています。それは、真の信仰によらなければ、喜んで従うことはできないものです。そして、それに従って感謝を表すことは神様のご栄光を表す

ことになります（ハイデ91）。

(2) 「従う」という自由

「従う」と言うと、「自由」が重んじられる現代の社会では、否定的な印象を与えるかもしれません。しかし、実際には、聖書に現された神様の御心に従うことが、私たちを様々な束縛から解放し、真実の自由を与えてくれます。明らかな罪ばかりでなく、この世の価値観の束縛、他人の目という束縛、様々なしがらみ、こういった全ての束縛から、神様の御心に従うことこそが、むしろ解放を与えてくれるのです。

また、神様の御心に従うということは、とても創造的な生き方でもあります。聖書を開いてみても、私たちが今日この日に行うべきことが書いてあるわけではありません。こういう場合にはこうするというマニュアルに従うような生き方が求められているのではないのです。

むしろ、御心に従う生き方は、私たちが生きている現実の中で、どのように考え、振舞い、神の国の進展に奉仕するかを様々な考えさせます。それぞれに与えられた賜物を生かして、時には忍耐し、時には涙を流し、時には喜びを分かち合いながら、神の国の完成に向けて共に歩みを進めます。

そのような歩みをなすために、聖書を通して神様が何を求めていらっしゃるかについて、繰り返し理解を深めて行くことが必要です。（大西良嗣）

テキスト ローマの信徒への手紙 6章12～23節
カテキズム 子どもカテキズム 問38

〔単元のねらい〕

イエス・キリストはわたしたちを罪の悲惨からときはなち、わたしたちにまことの命の喜びを回復してくださった。そのように大きな恵みをくださった以上、わたしたちがこの恵みにこたえて生きることが当然のことであるし、そのようにして生きることこそがわたしたちの喜びである。そして主イエスは（わたしたちを義としてくださったのみならず）わたしたちがご自身の栄光のために生きることができるようにと、聖霊によってわたしたちを新しく生まれさせてくださり、今もわたしたちの五体を支配してくださっている。キリスト者の「生活の道」が、ひたすらなる主の恵みによって備えられる道筋であることをとくに覚えつつ、子どもたちを主イエスに従う喜びへと招きたい。

「イエスさまのために生きる」

わたしたちはイエスさまを信じて生きています。イエスさまはわたしたちに、ご自身を信じる心を与えてくださいました。それはすばらしい恵みです。

でも、今日知ってほしいことは、イエスさまを信じることの恵みは、決して心の中で信じるということにはとどまらないということです。イエスさまの恵みはわたしたちの日々の生活の、あらゆるところにまで及びます。心も、言葉も、行いも、すべてイエスさまの恵みのご支配のもとに置かれるのです。

イエスさまを信じる前、わたしたちは罪人でした。罪がわたしたちの主人となって、わたしたちを支配していました。わたしたちの心も体も、罪の道具としてほしいままにあやつられ、そしてそのような自分をどうすることもできませんでした。それは、とてもみじめな境遇でした。

けれどもイエスさまは、十字架の贖いのみわざによってわたしたちを罪からときはなち、自由にしてくださったのです。それはわたしたちの心も、体も、手も、足も、今や罪の支配からときはなれたということです。そしてイエスさまのものどされたということです。

イエスさまはわたしたちに、ただ罪のゆるしの恵みをくださるだけではありません。それだけで

はなく、わたしたちを新しくつくりかえて、ご自分に似せてくださるのです。ちょうどイエスさまを自分の着物として着てしまうように、わたしたちの毎日の生活がイエスさまに似てくるのです。わたしたちの言葉や姿や行いが、イエスさまに似てくるのです。すばらしいことです。

もちろん、このことはわたしたちの努力や、がんばりによることではありません。イエスさまのみ霊の力によることです。み霊はわたしたちを新しい人、イエスさまにあって生きる幸いな人に生まれ変わらせてくださいます。わたしたちをイエスさまとひとつに結びつけてくださいます。そして、日々イエスさまに似る人にしてくださるのです。これはただひたすらに、み霊の恵みによることです。

そのように、わたしたちは今やイエスさまのものとなりました。それゆえ、今や自分のためではなく、イエスさまのために生きるのです。

イエスさまを知らない人たちは、自分の喜びや楽しみのために生きることが人生の目的だと考えているかもしれません。自分の思いのままに、自由に生きることが人生の喜びだと思ふかもしれません。けれどもイエスさまを知らない人は、罪からときはなれていません。ですからどれほど自

由に生きようとしても、楽しく、おもしろおかしく生きようとしても、ほんとうの自由はないのです。罪人である自分自身にしばられたままなのです。

イエスさまを知り、イエスさまを信じることによってこそ、人はほんとうに自由にされるのです。ほんとうの意味で幸いな人になることができます。わたしたちの人生の喜びは、わたしたちが自分自身のものではなく、イエスさまのものとなることにあります。そしてわたしたちの心も、体も、み霊の恵みによってイエスさまに似せられていくことにあります。わたしたちの罪のみじめさを知れば知るほどに、そしてイエスさまのすばらしさを知れば知るほどに、わたしがわたしのものではなく、イエスさまのものにされていくことがどれほどすばらしいことがわかってきます。

イエスさまのものとされた幸いな人は、イエスさまの恵みにこたえ、イエスさまのみこころを求

めて生きます。そして自分の手足をイエスさまの栄光をあらわす道具としてささげます。そのようにして生きるところにこそほんとうの喜びがあり、幸いがあることを知っているからです。

そしてイエスさまは、わたしたちがご自身のみこころのあるところを知ることができるようにと、わたしたちにみ言葉を与えてくださっています。み言葉に聞き従って生きる時、わたしたちの命は豊かに祝福されます。イエスさまはみ言葉を行う人々を喜んでくださいます。わたしたちもまたみ言葉に聞き従うことを喜びとします。

そのとき、果たしてわたしはイエスさまに従うことができるだろうかと心配しなくてもよいのです。み霊が助けてくださるからです。み霊はわたしたちの心も、手も、足もつくりかえてくださり、イエスさまの道具としてくださいました。み霊の恵みの力を受けて、わたしたちはみ言葉に従って生きることができます。そのことを信じて、わたしたちの命と生活とをイエスさまにささげたいのです。
(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙 一 15章55節
死よ、お前の勝利はどこにあるのか。
死よ、お前のとげはどこにあるのか。



〈ねらい〉

幼児にとっての神様への感謝と献身の生活とは、一体どんなものなのでしょうか。子どもたちと一緒に生活をふりかえり、考えてみます。

〈子ども観〉

幼稚科の子どもたちのほとんどは、それぞれ幼稚園や保育園に通っているでしょう。4月の保育園の朝は、子どもたちの泣き声でいっぱいです。新入園児がママとのお別れがうまくできないからです。「ママがいい〜!」「ぼくも会社につれてって〜!」と泣いてしがみつかれると時間も体力も奪われてママのほうが泣けてしまいます。夕方にはお迎えに来てくれるのだけれど、ママと離れるときの子どもの気持ち……喪失感、取り残され感、不安ははかり知れません。そんなとき、クリスチャンの母親なら「〇〇ちゃんは独りぼっちじゃないよ。イエス様がいつも一緒だよ」と話すことができます。たとえ半日でも母親から離れて集団生活をするのは、幼い子どもにとっては冒険です。子どもたちは、頭も心も体もフルに使って、どんなに楽しくとも、多少の緊張感をもって園生活を送っているはずです。

お父さん、お母さん、教会の先生やお友だちがいない園生活の中でも、いつもイエス様が共にいてくださっていることを伝えましょう。一人ひとりが神様にとってかけがえのない存在で、大切に守られています。神様の存在を、教会の中や家庭での生活だけでなく、いつもでも、どこにでも、生活すべての中に神様がいてくださっていることがわかる時、神様への親しい気持ち、御心を知

ろうとする気持ち、服従する気持ち、そして感謝の気持ちが育まれます。罪の支配ではなく、子どもたちの頭も心も体もすべてが、恵みの主のご支配のもとにあることを伝えましょう。キーワードは「神様といつもいっしょ」です。

〈展開例〉

礼拝の説教では、イエス様を知りイエス様を信じることによって、まことの自由が与えられることが語られます。分級では、子どもたちにふだんの生活について、特に幼稚園や保育園でのことを話してもらいましょう。一人ずつしっかり聞きます。子どもが自分の生活について一生懸命話しはじめ、頭の中が園での生活のことでいっぱいになったところで、「神様は目には見えないけれど、幼稚園（保育園）にいる〇〇ちゃんのことを、見守っていてくださるね。感謝だね」と話します。

- 例）・幼稚園（保育園）で何をしているときが一番楽しいかな？
- ・担任の先生は何ていうお名前ですか？
 - ・好きな給食（おやつ）はなあに？
 - ・よく一緒に遊ぶお友だちは、何ていうお名前ですか？
 - ・幼稚園（保育園）では、あなたはみんなに何て呼ばれているの？ など

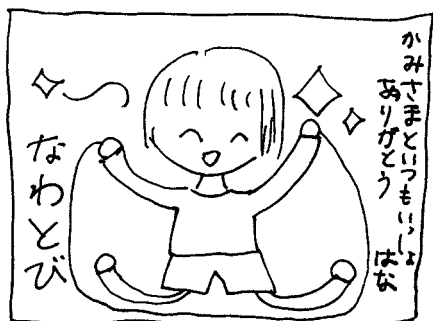
〈お祈り〉

天の父なる神さま、いつもわたしたちといつも一緒にいてくださってありがとうございます。神様の愛に気づいて、これからもたくさん、「神様に感謝します、ありがとうございます」と言えますように。アーメン。

〈かいてみよう〉

〇はいくえんやようちえんで、あそんだり、おきゅうしょくをたべているところなどを、がようしにじゆうにかきます。

さいごに、じぶんのなまえと「いつも かみさまと いっしょ」という字をかいたら かんせい!!



〈目標〉

引き続き、神さまへの感謝について学びます。

〈展開例〉

先週は、マグダラのマリアさんが200万円もする香油をイエスさまにささげて感謝したお話でした。今日は、もう一人、神さまに感謝をささげた人のお話ですが、悲しいお話です。

旧約聖書に士師エフタという人が出てきますね(士師記11～12章)。どんな人かな。「士師」というのはライオンではないよ。「士師」、こんな字を書いて、国を守る人、王様みたいな人だったのだよ。エフタは、特別に強い人では無かったけれど、選ばれて士師になりました。そして、その頃、隣の国のアンモン人が戦いを仕掛けて来ました。敵はイスラエルの兵より多く、戦ったら負けるに決まっているような戦争でした。イスラエルにあるのは勇気と神さまに頼る心だけでした。

その時、エフタは神さまに「どうか敵のアンモン人に勝たせてください。無事に帰って来たら私を出迎えた最初の人をあなたにささげます」と祈り、神さまに約束をしました。ささげるというのは、その命を神さまに差し上げることです。

エフタはアンモン人に勝って帰って来ました。

そして、最初にエフタを出迎えたのは誰だったでしょうか。太鼓を叩いて大喜びで出迎えたのは、エフタの一人娘でした。「お父さん、お父さん」と、喜んで踊りながら出迎えたのです。エフタは一人娘を神さまとの約束通り命を取ってささげました。

かわいそうですね。皆さんだったら、どうするかな。そんなことしないよね。いくら勝つためといっても、人の命をささげるなどという約束はないよね。これは間違った感謝の約束でした。

ではどんな感謝をしたらいいのでしょうか。

○○ちゃんなら、どうする？(年令によって展開は変わるが、いちばん大切なことは何かに気づかせたい。)ちょっと難しいかな？ どうすれば神さまに喜んでいただけるのでしょうか？

答えは、イエスさまに喜んでいただけるようにすることです。みんなでどんなことをしたらイエスさまに喜んでいただけるかを考えようね。

〈祈り〉

天の神さま。神さまが喜ばれる感謝とご奉仕はどんなことですか。私たちに教えてください。そしてそれをすることができる心をください。イエスさまの聖名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

御言葉を学ぶということは、子どもたちが単に知識を得るだけでなく、子どもたちの考え方や生活が聖霊の働きによって変わるといふことでなければならぬ。イエス様のために生きるとはどういふことなのか共に考える。

〈展開例〉**1. 何を第一としていますか**

あなたは学校や家で何かをするとき、どんなことを目指していますか。

- ・一番早く、または一番上手にできるように
- ・自分が優秀で良い人だと思われるように
- ・自分が楽しく、得になるように

このような思いにとらわれていないでしょうか。(みんなで話し合う)

私たちの周りには間違っただけの考え方がたくさんあります。人に負けないこと、人からほめられること、お金持ちになることなどが幸せになる近道だという考え方です。しかし、そのような生き方は人を本当に幸せにするのでしょうか。人と比べることによってうぬばれや高慢が出てきます。ねたみや恨みも生まれます。

2. 二つの生き方

この世界には二つの生き方があります。一つは自分を喜ばせようとする生き方、もう一つは、神様を喜ばせようとする生き方です。

神様を喜ばせることを第一とする生き方は、人にどう思われるかではなく、神様が願われることは何なのかを考える生き方です。罪から自由にされた人は、感謝と喜びから、神様に喜ばれる者になりたいと願うようになります。神と人を愛する生き方は、自分だけでなく、周りの人をも幸せにするのです。

3. 何に従って生きるのか

私たちは毎日、いろいろな場面でどちらかの道を選んでいきます。どちらを選ぶのかを、何によって決めたらよいのでしょうか。

自分の感情や願いや考え方は、その時は正しいと思っても、後で変わったり、間違っていることもあります。しかし、神様の言葉は永遠に変わることはありません。御言葉を読み、祈るとき、聖霊なる神様が私たちを正しい道へと導いてくださいます。

4. こんなときどうしたらいいの？

次のようなときどうしたらよいか、御言葉を読んで考えましょう。

- ①お母さんが、「もう寝る時間だからテレビを消しなさい」というけれど、まだ見ていたい。(コロサイ3:20)
- ②作文コンクールで賞をもらった。気分がよくて自慢したくなった。(サムエル記上2:3)
- ③悪口を言われたので、私もその人の悪口を言って仕返しをしたい。(ペトロ一3:9)

5. イエス様のように

私たちは、罪の力に支配されていて、正しいことをしたくてもできない、罪の奴隷です。しかし、イエス様は私たちを罪や恐れから自由にしてくださり、聖霊の力によって罪に打ち勝つことができるようにしてくださいました。神様は日々私たちにイエス様に似た者へと造り変えてくださいます。

6. 迷路 (次ページを参照)

御言葉に導かれて、ゴールを目指そう。

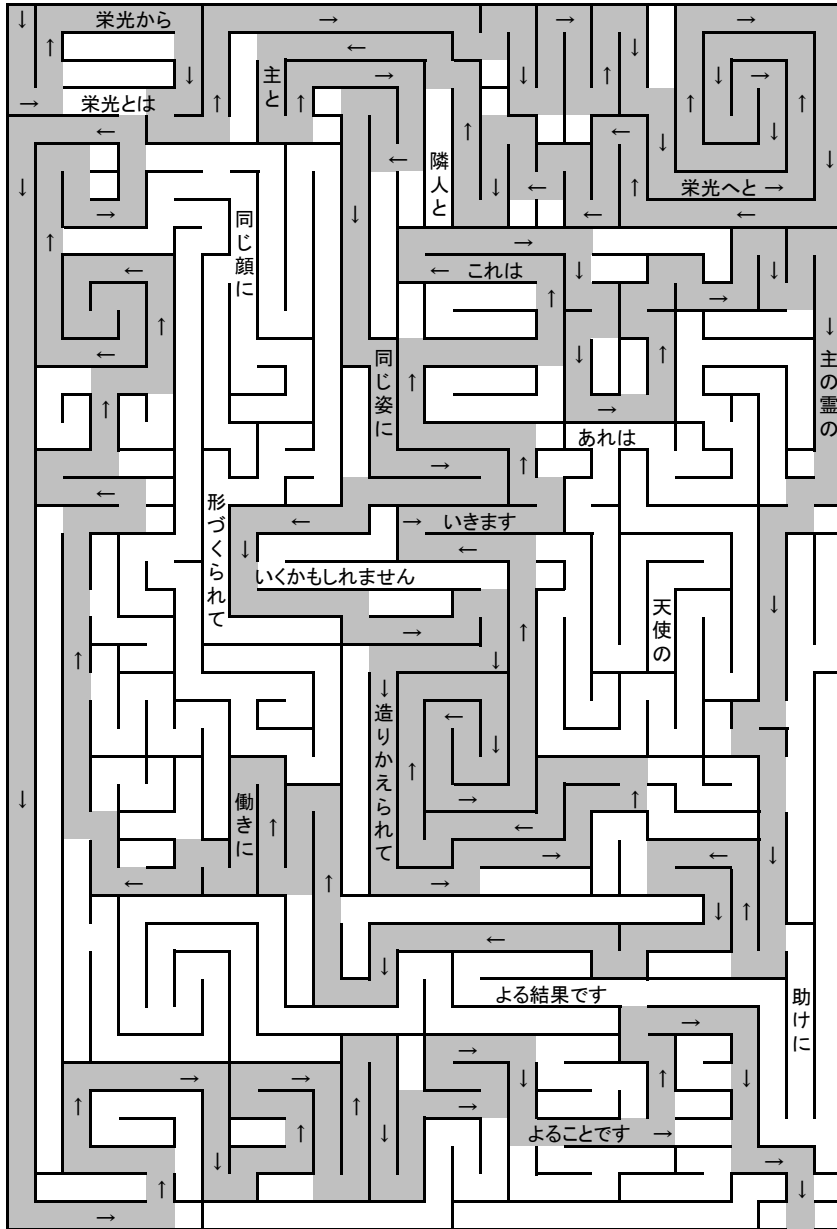
正しいみことばをたどってゴールをめざしましょう。(コリントの信徒への手紙二3章18節後半)

スタート ↓

栄光から
栄光とは
主と
隣人と
栄光へと
同じ顔に
これは
同じ姿に
主の霊の
あれは
形づくられて
いきます
いくかもしれません
天使の
働きに
造りかえられて
よる結果です
助けに
よることです
ゴール ↓

キリストに似た者となる

「迷路」の答え



〈ねらい〉

- 自分の考えに従って自由に生きるということが、生まれたままの人間にとっては罪の奴隷状態で、死に至るものであるということを理解する。
- 神の奴隷ということは、真に自由な状態であり、私たちに永遠の命をもたらすものであり、私たちは自発的に神の愛に応える意味でそうすべきであるということを理解する。

〈展開例〉

質問1

パウロは、私たちが自分の体をどうするべきだと言っているか。

質問2

パウロの議論によれば、私たちは2人の主人に仕えているとあるが、その主人とは誰と誰か。

質問3

それらの主人に仕えて私たちが得る報酬とはそれぞれ何か。

質問4

奴隷の仕事とは、どんな仕事か。主人に対してどのような立場に立っているか。

質問5

あなたは、どちらの奴隷になっているか。それはなぜか。

まとめ

私たちが救われる時、私たちは、それまでの罪の奴隷から神の奴隷に変わる。罪の支払う報酬は死であるのに対し、神のくださる賜物は、永遠の命である。

神の奴隷となることは、強制的にされるものではなく、神に対する愛と感謝から自発的になされるものであり、それゆえその行為自体が神に喜ばれるささげ物となる。

私たちは、神の救いに感謝して、心から喜んで主の奴隷として主に仕える者でありたい。

〈祈り〉

神様、私たちを御子の贖いによって救ってください。ありがとうございます。その御愛に覚えて、私たちが喜んで自分自身をささげて、あなたに仕える者となることできるようお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



〈背景と文脈〉

イスラエルの民はエジプトの地で奴隷であったが、主なる神の力強い御手によって解放された。主は彼らと契約を結ばれ、彼らは主の民となった。彼らはエジプトの王ファラオに仕えていたが、今は、新しい主人、即ち主なる神に仕える民とされた。主は彼らに乳と蜜の流れるカナンの地を約束されて、荒野での四十年間の旅を守られ導かれた。今、彼らは、神がイスラエルの先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブに対して与えると約束された地に入ろうとしている。彼らは、そこで主が備えてくださったものを楽しむことができる(6:10-11)。そのような恵まれた状況のなかで、エジプトの地から彼らを導きだしてくださった主を忘れてはならない、主を畏れ、主にのみ仕えなければならぬ(6:12-13)、とモーセは諭す。

〈主の命令を守ることの大切さ〉(6:16-19)

今カナンに入ろうとしているのは、彼らの子どもである。モーセは、イスラエルの民が、かつてマサで主に対して犯した罪(出エジプト17:1-7参照)に言及し、その罪を繰り返してはならない、と語る。荒野で飲み水がなかったとき、彼らは主と主の御力に信頼せず、「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのか。わたしも子どもたちも、家畜まで渇きで殺すためなのか」、とモーセに不満をぶつけ、「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」と言って、主を試した。その罪を繰り返してはならない。

かえって、「主が命じられた戒めと定めと掟をよく守り、主の目にかなう正しいことを行いなさい」(17-18)。主の命じられた戒めを忠実に守るならば、主は敵を追い払われ、彼らは約束の地とその地での幸いを得る。カナンの地の取得、またそこでの繁栄は、彼らが契約の民であるからということでは無条件に約束されるのではない。むしろ、彼らが主と主の命令に忠実であることが求められ

ている。これと同じ思想は、申命記の中で繰り返されている(例、4:1; 5:29; 6:1-3)。

主なる神の掟を守るように、という命令の根拠は、彼らが、すでに主によって救われ、契約の民とされたことにある。この思想は十戒の序文「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」(出エジプト20:2)に顕著に表れている。神は一方的な恵みによりイスラエルの民を救われた主であられる。だから、この主に服従することが求められるのである。

〈子どもの信仰教育〉(6:20-26)

それゆえ子どもたちが、「我々の神、主が命じられたこれらの定めと掟と法は何のためですか」(20)、と聞くとき、次のように教えなさい、とモーセは言う。世代交代し、出エジプトの体験を知らない契約の民が出現するとき、彼らが主の命令を忠実に守るために、その根拠となった出来事が語り継がれていくことが必要である。そのような信仰教育なしには、神の掟を守る意味を理解できず、ただ律法的に守るか、あるいは掟を守ることに意義を見いだせず、主に不忠実になる危険性があるからである。モーセは親が子どもに教えるべき内容を21～25節の中で具体的に示している。

子どもに教えなければならぬのは、父祖がエジプトでファラオの奴隷であったこと、主がそのような状況からイスラエルの民を解放してくださったこと、主がカナンの地に導き、彼らにカナンの地を与えられたこと、主が掟を与え、主を畏れてそれに従うように命じられたこと、そして主は、今あるように、常に幸いに生きるようにしてくださったこと、である。その信仰教育は、子どもたちが、契約の民に現わされた過去から現在に至る主の恵みを確認し、その恵みに応答し、主に忠実であり続けるために必要な営みである。

(後藤公子)

子どもカテキズム

問39 神様の御心の、明らかにされた規準はどこになりますか。

答 十戒の中にあります。

参考教理問答 ウェストミンスター信仰告白 19章2, 5, 6節

ウェストミンスター大教理問答 問95, 97, 98

ウェストミンスター小教理問答 問40, 41

救われた私たちは、聖書に示された神様の御心に従って、感謝の応答をします。聖書全体に神様の御心が、歴史物語や、法律集、格言集、預言、手紙などの形で記されています。それらの全体を自力で把握することは容易ではありません。十戒が、神様の御心を要約的に示してくれています。

(1) 神の民に与えられた十戒

十戒は、エジプトから救い出されたイスラエルの民に与えられました。十戒の序文には、「わたしはあなたの神である」という宣言が含まれています。つまり、十戒は、救い出されて、神様の民とされた者たちに与えられたものなのです。

したがって、その内容は、神の民としてふさわしく生きるための方法であり、周辺世界の偶像礼拝、慣習、価値観から解放するためのものです。救い出されて神様のものとされた民が、感謝の応答をして、神様のものとして歩み続けるための方法を教えるものと言えます。

(2) 道徳律法

この十戒の内容は、今日の私たちにも有効な「道徳律法」です。(旧約の礼拝方法を定めた「儀式律法」、民事・刑事法である「司法律法」と異なり、時代や場所に左右されず、普遍的に有効である律

法を「道徳律法」と呼んでいます。)

聖書は、様々な箇所、神様の御心を語っています。どのように生きるべきかについて、モーセばかりでなく、主イエスもパウロも語っています。旧約聖書にも、新約聖書にも「道徳律法」が含まれているのです。十戒は、聖書全体が語っている「道徳律法」を要約的に語っているものとして理解されます。

(3) 愛に満ちた戒め

十戒は、私たちが救い出し、宝の民とするほどに私たちを愛してくださった方が、与えてくださった戒めです。したがって、十戒は、私たちが生きるための最善の道を示す愛の戒めであるはず。そうでないような戒めを、主ともあろう方が私たちに与えられるでしょうか？

十戒の表現は、「～してはならない」という禁止条項が続いているために、束縛的な印象を与えます。しかし、実際には、むしろ様々なことに囚われている私たちを解放してくれる言葉です。創造に際して神様が意図された人間本来の姿を回復し、永遠に神を喜び、神のご栄光を表す人生へと導くものです(問1)。私たちの感謝の応答は、このような喜ばしい道しるべに沿ってなされて行くのです。(大西良嗣)

5月3日

「十戒 —感謝の道標—」

説教展開例

テキスト

申命記 6章16～25節

カテキズム

子どもカテキズム 問3

〔単元のねらい〕

主イエス・キリストにより罪と悲惨から救われた者として、どのように神様に感謝をあらわすべきか。子どもカテキズムは、問39から、「第三部 生活の道」の「二 感謝に生きる道」として、具体的に教えて行く。それは、やはり、十戒に感謝して従う道である。十戒は、キリストによる救いにあずかった者にとって、神様に感謝する生活の規準となる。子どもたちが律法主義に陥らないためにも、キリストの十字架による罪の赦しの恵みの中で、神様に感謝して、十戒に従って行くことの大切さを教えたい。

「神様への感謝から十戒を守ろう」

愛する子どもたち。おはようございます。

みんな、先週一週間のことを思い出してみましょう。先週も、教会の日曜学校で、神様を礼拝し、聖書のお話を聞くことから始まりました。そして、お家で、幼稚園や学校で、いろいろな人たちと一緒に生活しました。楽しいこともたくさんあったと思いますが、反対につらいこと、苦しいこともたくさんあったと思います。もしかしたら、病気やけがをした人もいたかも知れませんね。また、誰かに悪いことしてしまったり、反対に誰かから悪口言われたり、いじわるされたかも知れません。いろいろなことがあったかも知れませんが、今日の日曜日、教会の日曜学校で、いつものように神様を礼拝することへと導かれました。礼拝というのは、目には見えませんが確かにいらっしゃる神様の前に出で、神様に感謝することです。

先生の心の中には、いつも、旧約聖書の詩編第23編があります。昔、イスラエルで王様だったダビデさんが歌ったと言われています。次のような歌です。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける。わたしを苦しめる者を前にしても／あな

たはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ／わたしの杯を溢れさせてくださる。命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう。「主」というのは、神様のことですが、みんなにとっては、イエス様のこと。神様、イエス様はみんなの羊飼い、そして、みんなはイエス様の羊、先生もイエス様の羊です。ですから、みんなにとっては、イエス様が、いつも共に歩んでくださって、守り導いてくださるという歌になります。イエス様が共にいてくださるならば、「何も欠けることがない」のです。楽しいことはもちろん、つらいこと、苦しいことさえもお与えくださって、全部のことが、みんなにとって益となるように導いてくださいます。誰かに悪いことをした時も、「ごめんなさい」と謝ることへと導いてくださる。そして、誰よりも神様がみんなのことを赦してくださいます。そのために、神様は、愛する独り子イエス様を十字架にかけられたのですから。このようにイエス様が、みんなの神様、みんなの羊飼いとして共にいてくださって、守り導いてくださることぐらい、すばらしいことは他にありません。

詩編第23編の中に、「命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう」と歌われていることに心を留めましょう。イエス様が共に歩

んでくださるならば、恵みの方から追いかけてくると歌われています。みんなが恵みを求めて追うのではないのです。恵みの方から追いかけて来る。ですから、イエス様を信じる人は、至れり尽くせりです。

ところで、羊飼いが羊を養うのは当然だから、イエス様の羊ならば、至れり尽くせりで当然だ！と思うかも知れません。しかし、私たち、ぼくたちは、神様に養われる資格なんかないことを覚えましょう。今日の聖書の箇所は、神の民イスラエルが、約束の土地カナンを目前にした時に、指導者モーセさんが最後に語り伝えた神様の御言葉の一部ですが、モーセさんは次のように語り継ぐようにと命じました。「我々はエジプトでファラオの奴隷であったが、主は力ある御手をもって我々をエジプトから導き出された。主は我々の目の前で、エジプトとファラオとその宮廷全体に対して大きな恐ろしいしと奇跡を行い、我々をそこから導き出し、我々の先祖に誓われたこの土地に導き入れ、それを我々に与えられた」(6:21-23)。イスラエルの人々は、確かに神様のお約束の通りに、約束の土地カナンへと導き入れられます。このことは、神様の奇跡的なお働きが、大国エジプトからの脱出に始まって、葦の海において、荒れ野において、与えられたからこそです。ところが、エジプトから約束の土地カナンへの旅にあって、人々は、何度も、神様に対して罪を犯したのです。今回の箇所には、荒れ野のマサで罪を犯したことが言われています。しかし、そのようなイスラエルの民さえ、神様は、お見捨てになられることなく、愛と寛容と忍耐をもって約束の土地カナンへと導き入れてくださったのです。このイスラエルの民の姿には、私たち、ぼくたちの姿が本当によく映されています。鏡を見ているようです。私たち、ぼくたちも、神様に対して、何度も罪を犯してしまうのです。お家で、幼稚園、学校で一緒に生活する人に向かって、悪いことをしてしまうの

です。けれども、神様は、そんな私たち、ぼくたちでさえ、決して、お見捨てになることなく、罪を「ごめんなさい」と悔い改めることへとお導きくださって、罪を赦し続けてくださって、そればかりか、たくさんのお恵みで私たち、ぼくたちをお支えくださいます。私たち、ぼくたちは、神様に養われる資格なんて、これっぽっちもないのですが、神様は、そんな私たち、ぼくたちを愛して下さって、たくさんのお恵みで養ってくださって、「何も欠けることがない」ようにしてくださるのです。

そういう神様と私たち、ぼくたちとの関係を思うと、神様に感謝しないではいられなくなります。だから、ダビデさんも、「主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう」と歌いました。先生もだけれども、みんなも、神様に感謝するために、毎週日曜日、教会に戻って来て、日曜学校で、神様の前で、神様に感謝の礼拝を捧げないではいられなくなります。そして、神様への感謝の礼拝をスタート地点として、「この新しい一週間も神様に感謝して生活しよう！」と思います。その際、神様は、みんなが、神様にしっかり感謝して生活できるように、一つの規準、道しるべをお与えくださいました。モーセさんは、続けて次のように語りました。「主は我々にこれらの掟をすべて行うように命じ、我々の神、主を畏れるようにし、今日あるように、常に幸いに生きるようにしてくださいました。我々が命じられたとおり、我々の神、主の御前で、この戒めをすべて忠実に行うよう注意するならば、我々は報いを受ける」(6:24,25)。「掟」というのは、十戒です。この十戒は、今も、みんなが、神様に感謝して生活する時の道しるべなのです。こんにち、イエス様は、この十戒を通じて、みんなを守り導いてくださいます。今日から始まる新しい一週間も、恵みあふれる神様への感謝の思いから十戒に従って生活しましょう。(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] 申命記 6章17,18節

あなたたちの神、主が命じられた戒めと定めと掟をよく守り、
主の目になう正しいことを行いなさい。そうすれば、あなたは幸いを得る。

〈ねらい〉

わたしたちを救い出し、宝の民としてくださった神様。神様はわたしたちに、「十戒」という道しるべを与えてくださいました。神様の御心が要約された「十戒」を感謝して受け取りましょう。

〈子ども観〉

みなさんの教会学校の礼拝では、十戒を唱えているでしょうか。そのとき、幼稚科の子どもたちはどうしていますか。今の子どもたちは、読み書きを覚える時期が早いですから、年中さんくらいになると、すらすらとひらがな、かたかなが読める子もいます。漢字もふりがながあれば、どんどん読み進めていけます。でも十戒の朗読はさすがに大変です。文章全体が長いし、一文も長いし、言葉も難しい……。幼稚科さんは、「十戒を唱えましょう！」の時間になると、がたがた、ごそごそしてしまっているかもしれません。それでも継続は力なり、信仰は毛穴からも伝わるもので、毎週聞いているうちに、言えるようになります。

十戒が、実はわたしたちの生きる道しるべであること、わたしたちは罪に束縛された不自由な者でなく、罪から解放され感謝して十戒に従って生きる者であることを伝えましょう。

〈展開例〉

子ども礼拝の説教で、イスラエルの民が神様の恵みによって、約束の地カナンに入ることができたこと、民は何度も罪を犯しましたが、神様は見捨てられなかったことが語られます。神様に養われる資格など、まったくないぼくたちわたしたちを神様は愛してくださっています。そして、十戒という道しるべをあたえてくださいます。

分級では、教師がこの十戒に感謝していることがらを具体的にわかりやすくあかししてみましょう。「十戒という生きるルールがあって、先生はすごくよかったと思っているよ」と。そして、十戒をもう一度、ゆっくり教師のあとについて子どもたちも唱えます。

十戒の中身については、また来週、お話しします。お楽しみに。

〈祈り〉

天の父なる神さま、わたしたちに十戒をくださってありがとうございます。どういうことがわるいことなのか、どうすればいいのかわからないことも、神様が十戒を通して教えてください。感謝して十戒にしたがっていくことができますように。アーメン。

〈やってみよう〉

Let's Cooking

△ こいのぼりパン ▷

材料

食パン

チョコレート

ピーナツクリーム

チョコスプレー

干しぶどう

① 食パンの耳を切り、半分に切る。

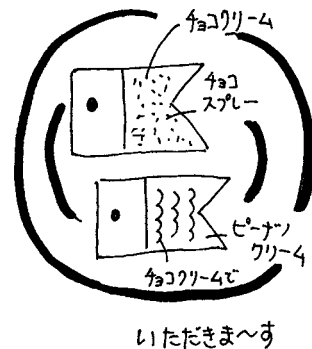
② しっぽの形にパンを切り落とす

……ここから子供達と……

③ $\frac{2}{3}$ くらいチョコレートもぬる。

④ チョコスプレーをかけて、干しぶどうの目をのせる。

♡ 同じ要領でピーナツクリームバージョンも♡ アレルギーに注意しあげてください。



〈目標〉

今週から十戒について学ぶ。その内容は、神さまへの感謝から始まっていることを学び取りたい。

〈展開例〉

先週は神さまへの感謝のあり方を学びました。士師エフタは間違った感謝を神さまに約束して、一人娘を殺してしまいました。けれども、神さまは私たちに神さまに感謝して仕える正しい方法を教えてくださいました。それが十戒です。

先週、楽しいことがあった人は手を上げてください。どんなことがありましたか。(手を上げた子どもに尋ねる。)先生はこんなことがありました。(自分の体験があれば短く話す。)

では、悲しいことのあった人は手を上げて。(手を上げた子どもがあれば尋ねる。)

イスラエルの人たちも、嬉しいこともあったけど、悲しいこともいっぱいありました。(出エジプトの絵本を用意する。)とくに悲しかったのは、エジプトで奴隷となって働かされていたことです。(奴隷の働きぶりの絵。)**「しっかり働け、息**

けるな」と鞭で打たれ、イスラエル人はまるで牛や馬のように働かされました。

その時、イスラエル人を助けた人がいました。覚えていますか。(生徒に答えさせる。)神さま?神さまなんだけど、神さまに導かれてイスラエル人を助けた人はモーセです。(モーセの絵。)

イスラエルの人たちはモーセさんに最初はありがとうと言っていました、だんだんと感謝することを忘れて神さまから離れていきました。そして偶像といって、偽の神さまを作って拜んだり、何でも自分勝手にするようになりました。そんな時、神さまがモーセにくださったのが十戒です。

ですから、十戒はね、私たちが神さまにいつでも「ありがとう」と忘れず言えるためにくださったのですよ。

〈お祈り〉

天の神さま。私たちには嬉しいことや悲しいこと、いろんなことがあります、どんな時にも神さまありがとうと感謝できるようにしてください。イエスさまの聖名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

十戒は私たちの自由を奪うためのものでなく、救われるための条件でもない。罪から救われた私たちが、どのようにして主に従えばよいのかを教えてください。道しるべなのである。

〈展開例〉

1. 十戒ってどんなイメージ？

あなたは十戒に対してどんなイメージを持っていますか。十戒を一緒に読んで見ましょう。「……してはならない。」「……してはならない。」してはいけないことばかりで窮屈だなあと感じるかもしれません。十戒を私たちの自由を縛る鎖のようなものだと思いませんか。

2. 十戒は道しるべ



道路標識を見たことがありますか。最高時速50キロ、Uターン禁止など交通ルールを示す標識です。車を運転する人は交通ルールを守らなくてはなりません。「今日から自分の好きなように運転しても良い」となったらどうなるでしょう。あちこちで交通事故が起こり、安心して運転したり歩くことができなくなってしまいます。交通ルールは私たちの安全を守るためにあるのです。

私たちの人生にも標識のような道しるべ（目的地までの方向・距離などを記してある立札）が必要です。もし、嘘をついてもいいですよ、人を殺しても盗んでもいいですよとなったら、世の中はめちゃくちゃになってしまいます。神様の掟は、私たちが正しく生きるための道しるべなのです。

3. 十戒は鏡のようなもの

Uターンしてはいけない交差点でUターンして

も、Uターン禁止の標識がなかったら自分が違反をしていることに気がつかないでしょう。「偽証してはならない」という戒めがあるから、嘘をつくことが間違っていると分かるのです。顔が汚れていても鏡を見なければ汚れていることがわかりません。

十戒は私たちの罪を映し出す鏡のようなものです。十戒を学ぶと、自分が十戒を守ることのできない罪人であること、イエス様の救いが必要であることが分かるのです。

4. 感謝をもって従う

誰かに親切にされたら、私たちはありがとうとお礼を言います。それだけでなく、その人に感謝の気持ちをあらわしたいと思うのではないのでしょうか。

私たちは、罪から救い出してくださった神様に対してどのようにして感謝の気持ちをあらわしたらよいでしょうか。もしあなたがわたしを愛するのなら、わたしの戒めを守りなさいと神様はおっしゃいます。「神を愛するとは、神の掟を守ることです。」（ヨハネの手紙一5:3）

「私は両親を心から愛しているんだけど、両親の言うことはきかないことにしているの」という子がいたら変ですね。

「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、どれいの家からみちびきだしたものである。」十戒は、奴隷から解放してくださった神様の恵みを思い起こすことから始まります。イエス様の十字架によって罪から解放してくださった神様への感謝と愛を、神様の掟に従うことによってあらわすのです。

5. 「宝さがしゲーム」で遊ぼう(次ページを参照)

宝探しゲーム

ゲームの進め方

1. 宝を探す場所まで行けるように、道しるべとなるマークを下の表から選んで紙に書く。
(マークの解説文は書かずに、マークの意味を解説する表を渡して自分で解説させる)
(自分でマークを作ってもよい。下記のマークはロコス文字を利用)

[宝の場所のヒントとなるマークの例]



階段を上がり右へまがり、まっすぐ進む。ドアを引く。部屋の隅の聖書の下を探せ。

2. 宝（出エジプト記19:5の聖句を書いた紙とお菓子）を1の紙が示す場所に隠す。
(出エジプト記19:5「今、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたたちはすべての民の間においてわたしの宝となる。」)

————— (ここまでは分級の前に準備しておく) —————

3. 1で書いた紙とマークを解説するための表を子どもたちに渡す。
4. 子どもたちはマークを解説して、宝を探し出す。

聖書	机	ドア	十字架	イス	教会	階段	部屋	入口
そば	すみ	中	角	外	まっすぐ	右	左	出口
上	下	曲がる	出発	右へ	～に	～から	上がる	下がる
押す	引く	進む	開く	通る	よける	見つける	探す	見あげる

[ロコス文字の表]

〈ねらい〉

- 神がイスラエルに戒めを与えた背景について理解する。
- 神の戒めは、それを守るならば、私たちを守り、祝福へと導くものであることを理解する。

〈展開例〉

質問1

冒頭では、何が命じられているか。

質問2

もし、その命令を守るならば、神は何をしてくださると書いてあるか。

質問3

子どもたちに教える事柄の中で、神はイスラエルに何をしてくださったと書いてあるか。

質問4

子どもたちに教える事柄の中で、もし戒めを守るならば、神は何をしてくださると書いてあるか。

質問5

私たちにはなぜ戒めが必要だと思うか。

まとめ

神は、奴隷になっていたイスラエルを力ある御腕をもってエジプトから導き出され、約束の地カナンに導き入れられた。しかし、約束の地では、偶像礼拝をする異民族がイスラエルを囲んでいたため、彼らは神に従って歩み続けるために戒めを必要としていた。神は、十戒を代表とする律法をイスラエルにお与えになったが、それは、神の戒めの中で彼らが誘惑から守られて安全に歩み、神から祝福を受けるためであった。

この戒めは、親から子へと神の御業と共に語り聞かせるべきものであり、それによって神を畏れて彼らが代々歩み続けるためであった。

新約の神の民である私たちもまた、イスラエルと同じように、神の戒めを子どもたちに語り聞かせ、心を込めて、子どもたちと共にそれを守り、従っていく者でありたい。

〈祈り〉

神様、イスラエルにしてくださったように、私たち一人一人にすばらしい贖いの御業をなしてください、ありがとうございます。すべての誘惑から守られ、私たちがあなたの深い御愛に感謝し、心からあなたのくださった戒めを守ってあなたと共に歩んでいけるようお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



テキスト マルコによる福音書 12章28～34節

ここには「一人の律法学者」が出て来るが、律法学者の皆が皆、イエスに敵対的であったわけではないことを知る貴重な記事である。「彼らの議論を聞いていた」とあるように、これまで「祭司長、律法学者、長老たち」(11:27)や、「ファリサイ派やヘロデ派の人」(12:13)、また「サドカイ派の人々」(12:18)など、さまざまな立場の人々が次々にやって来て、「イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして」(12:13)、イエスと議論をしていた。そのどれもに対して、実に立派で胸のすくような解答をイエスがなされたのを見た、この一人の律法学者は、もはや悪意に満ちた心によってではなく、ただ純粋な求道心から、イエスに重要な問いを投げかけた。他の律法学者たちがいろいろな説を唱えているけれども、このイエスというお方は何と答えられるのだろうか、是非とも聞いてみたいと思ったのであろう、彼ら律法の専門家たちにとって非常に重要な問い、「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか」との問いを問うたのである。

律法の専門家たちは、多岐に亘る律法の規定を様々な分類し、優先順位や相互の関係などを分析していたが、それと同じくらい重要なこととして、律法の全体を把握する言葉、律法の根本が何であるかを追求していた。この問いに対して、イエスは、申命記6章4～5節とレビ記19章18節をもってお答えになった。どちらも律法学者たちには馴染み深い御言葉であり、特に申命記6章4～5節は敬虔なユダヤ人ならば毎日唱えていたほどのものであるから、その意味では何か新奇な目新しいことをイエスがお答えになったわけではない。しかし、レビ記19章18節と合わせて、律法の神髄を「神を愛し、隣人を自分のように愛する」(12:33)だとされたことには大きな意義がある。愛が律法の基本原理であると語られたのである。これは、十戒の第一と第二の板の要約でもあるが、神への愛

と人への愛は別々ではない。それは一つのことであるし、神への愛に基づかない人への愛は、真実の愛とは言えない。

「この二つにまさる掟はほかにない」(31節)と言われたイエスの解答に、律法学者は全くその通りだと認め、サムエル上15章22節を引き合いに出して、「心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を愛する」ということは、どんな焼き尽くす献げものやいけにえよりも優れています、(33節)と答えた。

これは、単に宗教の儀式や儀礼よりも、愛の方がもっと根本的に重要なことだ、ということを行っているだけではない。サムエル上15章9節には「しかし、サウルと兵士は、……その他何でも上等なものは惜しんで減ぼし尽くさず、つまらない、値打ちのないものだけを減ぼし尽くした」とあり、そのことをサムエルから指摘されると、サウルは言い訳をして、「あなたの神、主への供え物にしようと、羊と牛の最上のものを取って置いたのです」と言ったとある。それに対してサムエルが言ったのが、上記の御言葉である。つまり、幾ら主に対して供え物を献げようとも、主の御心に逆らって従わず、その意味で主を愛さないで献げたものが、主に喜ばれるだろうか、ということなのだ。

このことと、主であるイエスに対して、心には悪意を込めながらも、表面的には従うかのような素振りを見せたユダヤ教の指導者たちの姿が重なってくる。少し前まではそうであった、この一人の律法学者は、今や自分のかつての誤りに気づきはじめ、サムエル記を引用して、言わば自分はイエスの方にくみすると、表明した。それ故、彼は「神の国から遠くない」と言ってもらえたのである。後は、もう一步を踏み出して、イエスに従うことである。

(梶浦和城)

カテキズム 子どもカテキズム 問40

子どもカテキズム

問40 イエス様が教えてくださった十戒の要約は何ですか。

答 「わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、
思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」と、
「隣人を自分のように愛しなさい」です。

神と人への愛、二つで一つの愛に生きることです。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問42

ハイデルベルク信仰問答 問93

〈神への愛〉

私たちが神様を愛するのは、まず私たちを神が愛してくださったからです。それは義務でもなければ、恩返しでもありません。愛さずにはいられないから、そうするだけです。私のために独り子を与えてくださったという神の愛が、胸に迫ってきてどうしようもないからです。その圧倒的な神の愛に等しい愛は、罪人には持ちえません。だからせめて、あらんかぎりのまごころをもって神に応えたい。そんな思いが「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして」という表現にあらわれるのです。

では神を愛するとは、具体的にどういう愛のかたちをとるのか。それは十戒の第一戒から第四戒を学ぶことで教えられます。ここであえて一言にまとめるとすれば、すべての栄光を神のみに帰するということになるでしょう。

〈人への愛〉

同じく人への愛の具体的なかたちについても、第五戒から第十戒を通して教えられます。これもあえてまとめるとすれば、神から与えられた出会いを喜び大切にすることでしょう。同時に、私の隣人は決して私のものではなく、どこまでも神の大切な宝であるから、決して粗末に扱ってはいけないということも覚えるべきでしょう。父母、子、友人、夫、妻 etc、あるいは憎い敵であっても、どの人も神の特別な愛を受け、神の支配のもとにいます。だから私たちは主に仕える思いで、隣人に仕えるべきです。主イエスが弟子たちに仕える

しもべであったように。

またここで、「誰が隣人であるのか」を問うことはあまり意味がないでしょう。大切なことは、「誰が隣人になるのか」のほうです。よきサマリア人のたとえの後に、イエス様が律法の専門家に問うているのもそのことです（ルカ10:36）。隣人とは私たち自身です。だれが隣人なのかと考える前に、私たちが必要としている他者への想像力が求められています。もちろん現実には、何をしてあげることが隣人としてふさわしいのか、私たちは状況に応じて慎重に考慮せねばなりません。友のために自分の命を捨てること、これ以上の愛はないと主イエスは言われました（ヨハネ15:13）。しかし「命を捨てる」とはどういうことか、いつも十分な吟味が必要です。その上で、私たちは覚えたいと思います。隣人とは私たち自身です。私たちが「主と同じようにする」ことを主イエスは求めておられます（ルカ10:37）。

〈二つで一つの愛〉

神と人への愛を二つで一つの愛と示す点で、このカテキズムは白眉です。神様は「私」を世界で一番愛してくださいます。でも神様はみんなの神様でもあります。全人類が、「私」に注がれているのと同じ愛で、神に愛されています。イエス様につながるということは、他のあらゆる枝とつながって、いっしょにぶどうの木になるということです（ヨハネ15章）。「神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが神から受けた掟です。（ヨハネ4:21）」
(坂井孝宏)

テキスト マルコによる福音書 12章28～34節
カテキズム 子どもカテキズム 問40

〔単元のねらい〕

キリストの十字架による罪の赦しの恵みの中で、神様に感謝して、十戒に従って生きることは、神様を愛し、人を愛する生き方にほかならない。子どもカテキズムは、十戒の各々に示されている神の御心を説き明かす前に、まず、問40で、十戒が愛の戒めであることを教えている。この愛の戒めに罪赦された罪人が生きるためには、まず何よりも、神様の愛を与えられなければ、この戒めに生き得ないことを教えることが必要である。神の愛を祈り求める中で、身近な小さなことから愛を実践できればと願う。

「神様への愛と人への愛は一つ」

愛する子どもたち。おはようございます。

みんなの中で日曜学校の後の礼拝式に出たことのある人ならば、知ってるでしょうが、礼拝式の中で、使徒信条、十戒、主の祈りという三つの文章を唱えています。この三つの文章は、「三要文」（さんようもん）と言って、教会が昔から大事にして来た文章です。「三つの重要な文章」ということで、「三要文」と呼ばれています。

ところで、けさは、どんな朝ごはんだったかな？もし、パン食だったら、100%ジュースを飲んだ人？100%オレンジジュース、100%リンゴジュース、100%ブドウジュースなどなど、いろんなジュースがあるけれど、果物をギュッと絞ってできるのが、100%ジュースだね。実は、聖書にはいろんな教えが書いてありますが、「聖書」をギュッと絞ってできるのが、「三要文」というミックスジュースなのです。これは、そのまま飲むと、本当に幸せに生きることができます。

そこで、けさは、その中の「十戒」に心を留めたいのですが、「十戒」は、文字通り、十の戒めから成り立っていて、第一の戒めから第四の戒めが、神様との関係で守るべきこと、第五の戒めから第十の戒めが、人との関係で守るべきことです。この「十戒」というジュースの成分は、今言ったように十の成分から出来ているのですが、これは、さらに二つの成分とすることができるのです。そのことをイエス様が教えてくださいました。今日

の聖書箇所です。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』。第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい』。この二つにまさる掟はほかにない」（12:12:29-31）。つまり、神様への愛と、人への愛で、成分をまとめることができると、イエス様は教えてくださいました。このイエス様の御言葉に基づいて、今日の『子どもカテキズム』の問40があります。

神様への愛と人への愛という二つの成分は、分けることができにくいぐらいに固く結び付いています。神様への愛と人への愛は、二つで一つです。別々に考えるということは、聖書の教えではありません。『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です」（ヨハネ4:20,21）。目の前にいる人を愛せないならば、神様を愛することもできない、これが聖書の教えです。

それで、みんなに忘れなくてもほしいこと、その一つ目は、私たち、ぼくたちは、本当に「自己中」だということです。それは、人間ならば、誰でも、心がそうなっているのです。自分にばか

り向いていて、決して、神様や人には向いていないのです。生まれた時から、いや、お母さんのおなかのなかにいる時からそうなのです。ところが、そんな私たち、ぼくたちが、イエス様と出会って、イエス様を信じることへと導かれる。特に神様が、イエス様をお与えくださって、私たち、ぼくたちの「自己中」から来る全ての罪をイエス様を十字架につけることで赦して下さったと知る。そのように神様が「自己中」の私たち、ぼくたちをこよなく愛して下さったことを知って、イエス様を信じることへと導かれるならば、神様から与えられる愛によって、「自己中」の冷たく硬い心が溶かされて、自分にばかり向いていた心が、神様へと、そして、人へと少しずつ向くようになるのです。神様の愛は、本当に暖かですから、私たち、ぼくたちの冷たく、硬い心を溶かして、軟らかくしてくれるのです。

それで、みんなに忘れてもらいたくないこと、その二つ目は、私たち、ぼくたちは、神様の愛を与えられてこそ、神様をそして人を愛することができるということです。次のような教えも聖書にあります。「愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです」(ヨハネ4:7-11)。

さて、愛する子どもたち、今日は、母の日です。いつもみんなのために働いてくださって、いろいろお世話をしてくださるお母さんに感謝する日です。カーネーションに感謝の言葉を添えることがよく行われます。ある本(『すぐに役立つクリスチャン生活百科』、いのちのことば社)に書いてあったことですが、アメリカのジャーヴィスという女の人が、「あなたの父母を敬え」という第五の戒めを教えていた時のことです。「お母さんの愛に心から感謝する方法を考え出してくれる人はいませんか」と生徒にたずねました。彼女の死後、娘のアンナさんが、お母さんの好きだったカーネーションを毎年亡くなった日に行う記念会で飾ることをしました。この話に感動した百貨店王ワナメーカーさんが、毎年5月の第二日曜日に自分の店でカーネーションを飾って、記念会を行ったことがきっかけで、世界中に広まったとか。今日は、母の日、ちょうどカテキズムの学びも、「神と人への愛、二つで一つの愛に生きること」の学びとなりました。普段、なかなか、お母さんに「ありがとう!」と恥ずかしくて言えないのが、私たち、ぼくたちです。今日の日を機会に、お母さんに、「ありがとう!」と感謝できれば、すばらしいですね。また、お母さんだけでなく、普段、お世話になっている日曜学校の女性の先生やいろんな女性に「ありがとう!」と感謝できれば、なおすばらしいと思います。心からの感謝の言葉を自分の口から人に差し上げることも、人を立派に愛することの一つだからです。そして、神様を愛することになるのです。

愛する子どもたち、今日の母の日だけでなく、毎日が、みんなにとって、誰かへと心から感謝する日となりますように。(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] マルコによる福音書 12章30,31節より

心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。

隣人を自分のように愛しなさい。

〈ねらい〉

十戒は、神様を愛しなさい、人を愛しなさいと教えていることを知らせます。

〈子ども観〉

子どもは生活の中で、「～しなさい」「～しちゃだめ」と言われることが多いです。朝から、「早くおきなさい!」「早く着替えなさい!」「ご飯食べて!」など。幼稚園に着いたら、「先生におはようは?」「お友だちとなかよくするのよ!」……。こうして考えてみると、子どもって大変です。よくやっているなぁと感心するほどです。

子どもは、大人の「～しなさい」「しちゃだめ」という言葉に教えられて、生活の仕方、人とのかわり方、考え方を身につけ、そして何よりも神様のご存在と御心について知ります。大人の言葉と行いから学んでいきます。十戒は大人にとっても、子どもにとっても大切な戒め、生きる指針となります。「～してはならない」という文言が並ぶ十戒には、神様がわたしたちを、愛するがゆえによく養おうとされる神様の愛に満ちています。この愛について力強く語りましょう。

〈展開例〉

みんなは、おうちの人や保育園、幼稚園の先生に、「おともだちとなかよくしましょうね」とか「ご飯の前にはちゃんとお祈りしましょう」とか言われますか? ときには、「もう、うるさいなぁ」「わ

かってるよ!」と思うことはないかな。どうして、そんなふうにいる言うんだらう?

それでは、何にも注意しないお父さんお母さん、先生だったら、どうなると思う? 「夜は10時でも11時でも、好きな時間までテレビをみてもいいのよ」「おかずは好きなものだけ食べればいいですよ。ご飯の前にチョコレートをたくさん食べてもいいわ」「あなたが好きなおもちゃをお友だちが持っていたら、取ってしまってもいいのよ。」あれあれ? こんなふうだったら、みんなはどうなってしまかな? とっても悪い子になってしまうね。みんなのまわりにはそんなことを言う大人はいないはずです。みんなのことが大好きで、元気なよい子になってほしいと思っているから。

神様はみんなのことを、すごく大切に思っていて、よい子になってほしいから、「十戒」を与えてくださいました。そこには、大きく二つのことが書いてあります。「神様、だいすきです、ありがとう」「お父さん、お母さん、お友だち、みんな大好きです」と言えるみんなでいなさいということです。神様はみんなを愛しておられるのです。この戒めが守れるようにお祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、わたしたちが、十戒をよく守って、神様に従い、おともだちと仲良く過ごせますように。アーメン。

〈やってみよう〉

母の日 (カードを作る)

用意するもの
画用紙
折り紙
色えんぴつ等

カーネーション

- ① 折り紙を丸く切っておく
折る
- ② 折る
- ③ 中心がずれないように、少しだけ折り返す。
- ④ カードの表紙にカーネーションをはる。
(がくや葉っぱは書いても切ってもOK)
- ⑤ 中には、お母さんの絵や感謝の言葉を書きます。

ツール等
デコも Good

〈ねらい〉

神様を愛することと同じように他のたくさんの人を愛することの大切さを学ぶ。

〈展開例〉

今日は何の日か知っていますか？ そう、今日は母の日ですね。お母さんにいつもありがとうと感謝する日です。この機会にお母さんに「ありがとう」と心からの感謝の言葉を伝えましょう。これはお母さんを愛しているから出てくる言葉です。

みなさんは好きな人がいますか？ お父さん、お母さんであったり、お友だちであったり、先生であったり……。では、嫌いな人はいますか？ それは、どうして嫌いなのでしょう。そして、どうしたら良いと思いますか。

嫌いな人を好きになることは、なかなか難しいことですね。でもイエス様はこう言っています。「隣人を自分のように愛しなさい」。嫌いな人でも愛することで、新しい友だちが増えるかもしれませんね。

また、「あなたの神である主を愛しなさい」と言われています。目には見えていませんが、神様

はずっとわたしたちを見守っててくださいます。わたしたちが神様のことを愛しているのは、神様がわたしたちを愛しているからです。

みんなが嫌いと思っているお友だちも、みんなから好きになれば、そのお友だちも好きになると思います。

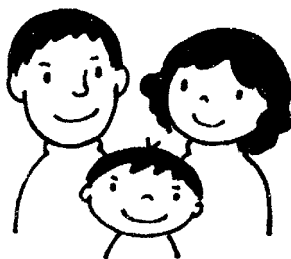
この機会に、神様のように色々な人を愛し、たくさんの人に心からありがとうと感謝の言葉を自分から言えると、素敵なことですね。

〈お祈り〉

神様、あなたがすべての人を愛するように、わたしたちも誰に対しても愛することができますようにしてください。

〈母の日の由来〉

1905年、アンナ・ジャービスという人の母親が亡くなりました。やがて彼女は、「亡き母を追悼したい」という想いから、1908年5月10日、フィラデルフィアの教会でカーネーションを配りました。これがアメリカで最初に行われた母の日です。1914年、その時のアメリカの大統領だったウィルソンが、5月の第二日曜日を母の日と制定しました。



〈ねらい〉

十戒は神への愛と人への愛を教える。なぜ、神を愛する命令が先なのか、神への愛と人への愛は一つであることを考える。

〈展開例〉**1. 今日のキーワード**

今日のお話を思い出して、ふさわしい言葉を書きましょう。(マルコ12章30、31)

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くしてあなたの_____を愛し、また_____を_____のように愛しなさい。」

ここには神、隣人、自分ができます。これら三つに対する愛について考えてみましょう。

2. どんなふうに神様を愛すればいいの？

心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神様を愛するとは？

→言葉や形だけでなく心から。いつも神様を第一とする。どうしたら神に喜んでもらえるか、与えられた知恵、賜物を用いて考える。心を集中させて御言葉に耳を傾ける。毎日、神様に心を開いて祈る。神様を愛するためにどんなことができるか、話し合みましょう。

3. どうしたら自分を正しく愛せるの？

私たちの中には、神様よりも誰よりも自分が一番大事だという思いがあります。自分が食べたいもの、自分が欲しい物、自分の体の調子などにもいつも関心があります。自分の好きな人、自分を愛してくれる人は愛せても、嫌いな人や自分を傷つける人を愛することができません。

でも、神様の愛を知らなければ、本当の意味で自分自身を愛することはできません。自分勝手に

ふるまうことが自分を大切にしていることにはなりません。自分だけを楽しませて得られる喜びはむなしいものです。

イエス様の十字架にあらわされた神様の愛が自分に注がれていることを知ったとき、初めて本当の意味で自分を受け入れ、愛することができるのです。

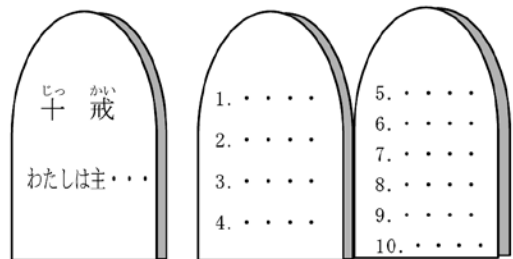
4. 神様の愛を知った人は

神様の愛を知った人は、神様を愛するようになります。神様が愛をくださるからです。また、神様を愛する人は隣人をも愛するようになります。神様は私だけでなく、周りの人をも愛して下さっているからです。「生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。」(ヨハネー5:1)

神を愛していると言いながら人を愛することをしないなら、それは本当の神への愛ではありません。また神様を愛していなければ、本当に人を愛することはできません。神への愛と人への愛は切り離すことができないものです。

5. 十戒の板を作ってみよう！

厚紙を下のように切って真ん中で折り、表紙に十戒と書き、序文も書く。飾りの枠を書いてもよい。開いた内側に第一戒～第十戒を書く。



〈ねらい〉

- 二つの戒めが神の律法全体を総括するものであることを学ぶ。
- 神への愛と人への愛は、切り離すことができず、人への愛は、神への愛に根ざして初めて真実なものになるということを学ぶ。

〈展開例〉

質問1

律法学者は、イエスに何とたずねたか。

質問2

イエスが挙げられた一つ目の戒めの内容は何か。

質問3

イエスが挙げられた二つ目の戒めの内容は何か。

質問4

律法学者はイエスの答えに対し、どういう返答をしたか。

質問5

イエスは、なぜこの二つの戒めを律法全体を総括するものとして挙げられたと思うか。

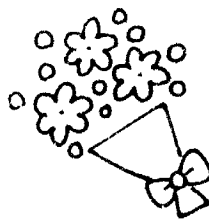
まとめ

律法学者は、イエスに対して第一の掟は何かとたずねる。すると、イエスは、第一が神を愛すること、第二が隣人を愛することであり、この二つに律法全体は総括されるとお答えになる。律法には様々な種類があるが、この二つの愛の掟が一番大切なものであるとイエス自らが語られた意義は大きい。他のすべての神の戒めは、その二つの光に照らされて解釈されるべきものであるとされたからである。

私たちも、この戒めに従い、神の私たちへの愛に覚え、神を心から愛し、次には神からいただく愛で周りの人々を愛していくものでありたい。

〈祈り〉

神様、私たちに愛の戒めを与えてくださってありがとうございます。愛のない私たちですが、あなたが私たちを愛してくださいましたから、その愛に応えてあなたを愛し、その愛にならって周りの人々を愛していけるものとしてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



テキスト 出エジプト記 12章21～27節

〈カテキズムの要素〉

当該箇所(26・27節)を見ると、子どもが自分の親に「この儀式には、どういう意味があるのですか」と尋ね、それに答えて親が、過越の意味を説明している、というくだりがある。そういうことを考えると、ここはそのままカテキズムの文章に用いても良いとさえ思うほどである。もとより、聖書はそのために書かれ、口伝えに伝えられた。主がなされた御業をいつまでも忘れず、子々孫々に伝えていくためである。

〈血による救い〉

さて、直感的なイメージとしては、出エジプトというと、紅海の水が真っ二つに分けられたことや、シナイ山で授けられた十戒の二枚の板のことが思い浮かぶが、それに劣らず重要なのが、この「過越」の出来事である。言ってみれば、「過越」がなければ、その後の紅海のこと十戒もないわけ、その意味で言えば、出エジプトに関する主の御業の中で、最も重要だとも言える。神学的なモチーフとして語るならば、神の民は、裁きの中で「血によって」「水を通して」救われた後、十戒を授けられたのである。

さて、「過越」ということは、裁きと「滅ぼす者」の中でこそ意味を持っている。もし、鴨居と入り口の二本の柱に小羊の血を塗らなければ、神の民といえども死と滅びを免れなかった。「過越」とは、自分(と家族)に対する主の裁きが「過ぎ越された」ということである。その血を塗らなかつたエジプト人たちの初子がみな撃たれたということも深い意味を持つ。家の入り口に小羊の血を塗らなければ、初子、つまり長子を失うことになってしまうのである。初子とか長子というのは、単に一

番初めの子ということに留まらず、その家族や家系にとって、神からの祝福一切を保証するものである。出エジプトの記述においては、それほど深くは「血」について教えられておらず、後のレビ記などの聖書の書物を通して、深化されていくが、出エジプト記はその事の初めを教える意味で、意義が大きい。かつての神の御業とその物語を繰り返して聞くことによって、現在と未来の歩みが形成されるからである。

言わずもがな、「血」は命の象徴であって、ユダヤ人家庭の入り口に小羊の血を塗ることが命じられたのも、小羊が彼らの命の代わりに意味を持っているからである。ここに我らの贖い主イエス・キリストの「血による救い」の予型を見ることが出来る。私たちはそのことを、新約聖書を通して語られる主の御言葉によって、教えていただいた。そして、今や私たちは、かつて神の民ユダヤ人に永遠に守るべき定めとして教えられた「過越」の祝いが、実は真の小羊イエス・キリストを指していたことを知って、聖餐式を祝っている。イエス様が言われた、「これはわたしの体である」「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」というのは、昔からずっと祝われてきた(正確に言えば、断続的にであったが)過越祭の小羊とは、わたしイエスのことを指していた、それが本質であった、それを目指していた、ということなのである。

教会に集う子どもたちも、礼拝で聖餐式を見るときに、似たような疑問を抱くことがあると思う。その時こそ、イエス様が私たち人間の代わりに命を献げ、血を流してくださったこと、主が過ぎ越してくださったことを語る、絶好の機会であろう。(梶浦和城)

5月17日 「贖いのみわざ ―過越―」カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問41、42

子どもカテキズム

問41 十戒の前書きは何ですか。

答 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」です。

問42 この意味は何ですか。

答 かつては神の民をエジプトから救い出すことによって、今は主イエス・キリストの

十字架と復活の御業によって、神様は私たちの神様となってくださいました。

ここにすでに、神様の愛の御心があらわれ出ています。

この神様の愛の支配のもとではじめて、私たちは幸せに、

また自由に生きることができるのです。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問43、44

〈十戒＝神の思いのつまった十の言葉〉

十戒には前書きが欠かせません。十戒は、私たちの生活をがんじがらめにしようとする禁令ではありません。むしろ、序言に示されるような「救いの神」による愛のメッセージです。神と共に生きる幸いから離れてしまった闇の世にあって、「神の宝、祭司の王国、聖なる国民（出エジプト19:5-6）」として選ばれたことに喜びと誇りを見出して生きるすべての者たちへの、慰めと励ましがつまった十の言葉です。神は、「私はあなたたちを本当の人間の生き方へと取り戻した。新しい命を与えた。この世の様々な過ちや貧しさ、愚かさ、悲しさから解放された最も自由な歩みのために、私はこれらの言葉を与える。あなたはもう滅びに向かってはならないよ、まっすぐに私に向かって歩んできなさい」とおっしゃっておられます。

〈救ってくださった神様〉

聖書の神は、神の民の歴史に具体的に介入されることを通して、ご自身を「救いの神」として啓示してこられました。救いの歴史の中心は、イエス・キリストの十字架と復活という出来事です。イスラエルをエジプトのくびきから解放し、バビロンの捕囚の破滅から救い出してくださいました神が、時至って約束のメシアにより、異邦人を含めたすべての選びの民を罪の縄目から解放してくださいました。「主が心引かれてあなたたちを選

ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。（申命記7:7-8）」神の憐れみと思恵のみによって、あわれで無力な、取るに足りない者たちが選ばれました。十戒はその「救いの神」の言葉でありますから、私たちは感謝をもって応答します。

〈罪人の神となってくださった神様〉

「神様は私たちの神様となってくださいました。」それはありえない喜びです。私たちは、神をわが神とするよりも、自分自身をわが神とする傲慢さと自己中心に生きる罪人です。しかし神は、そんな放蕩息子を見放さず、かえってその手をのばして迷子を引き戻し、どこまでも罪人の神であろうとしてくださいます。神が私たちの神となる、それは美しい看板にあえて泥を塗るようなことです。今も世界中で、私たちの愚かさや腐敗ゆえに、神の名が汚されています。でも神は、そんな私たちの神であり続けることを決意してくださいました。この愛に応えずにいられません。この愛の神が、必ず私たちを、正しく十戒に生きる者に変えてもくださいます。 (坂井孝宏)

テキスト 出エジプト記 12章21～27節
カテキズム 子どもカテキズム 問41、42

〔単元のねらい〕

主の日の礼拝式において、十戒を唱えることは、諸教派共通の伝統であると言っても言いすぎではないと思います。十戒・主の祈り・基本信条を唱えることが、礼拝式のプログラムを形作ってきました。また、契約の子や未信者に信仰を教え、継承する際に編み出されたカテキズムも、この三つを解説することによって形作られて参りました。しかし、ローマ教会やルター派教会において、この前文を丁寧に学ぶことは少ないのではないかと思います。そもそも、「あなたをエジプトの国から導き出した」神であられる箇所を読まなかったり、解説しなかったりします。私ども改革派教会は、「前文」を重んじて参りました。弊誌は、いつも、二回にわけ、丁寧に学んでまいりました。そこに私どもの信仰の特徴、性格が明らかにされてまいります。私どもにとって十戒とは何か。それは、神の愛の言葉、私どもを自由へと生かす命の言葉です。つまり、福音としての律法、掟なのです。そのことが伝わったら、十戒本文は、いよいよ感謝と喜びの響きを立てて唱えられて行でしょう。(第5号参照)

「わたしはあなたの神さまです ―神さまの自己紹介―」

皆さんは、これまで自己紹介をしたことがあるでしょう。自分で、自分のことを紹介するのが自己紹介です。まず、自分の名前を教えると思います。そして、どんな遊びが好きとか、好きな音楽とか、いろいろ、教えます。そうやって、僕たち私たちは、お互いの名前を覚え、だんだんと仲良くなれるのです。ですから、自己紹介が上手にできるようになると、どんどんお友達が増えてゆくように思います。それなら、どんな自己紹介をすれば、お友だちをつくれるような自己紹介になるのでしょうか。

皆さんは、「名刺」って知っていますか。見たことがありますか。名刺には、もちろん、その人の名前が書かれています。けれども一番大切な事として書かれているのは、どんな会社のどんな役をしているのかということです。大人の人たちは、仕事をするために、その名刺をとっても大切にします。ところが、仕事が終わってしまったら、もう使いません。その人とお友だちになりたいから名刺を交換するのではないからかもしれません。

先生も名刺を持っています。皆さんには必要ないし、おもしろくないでしょう。先生も、名刺をあげても、皆さんと友達にはなれないと分かっていますから、あげません。

夏のキャンプの帰り道、車の中で、あるお友達が、質問してくれました。「先生は、どうして牧師さんになったのですか？」とても嬉しい質問でした。なぜなら、そのとき、イエスさまのことがお話できるからです。そして、同時に、先生のこと一番分かってもらえるからです。こんなにすばらしい質問はないですから、分級の先生に、どんどん、質問して欲しいと思います。

もし、あなたが、先生の身長や体重を知ってくれたとしても、それで、あなたと先生の間に、親しい関係は始まりません。でも、先生と一緒に祈りして、いっしょに遊んで、いっしょにごはん食べて、何よりもいっしょに聖書を学んでゆくと、そこに、親しい関係が始まります。何度も何度も、何時間もいっしょに時を過ごしてゆくと、お互いの間に深い関係ができます。それを、絆と言います。絆を結ぶと言います。そして、その絆は、特別の絆です。教会の外にはない不思議な絆です。

つまり、イエスさまが先生とあなたとの間を結び合わせてくださっているからです。先生は、あなたのためにお祈りする。あなたも、先生のためにお祈りする。そのとき、わたしたちは、友達です。きっと、先生の言うことを、これまで以上に真剣に聴いてくれるようになると思います。

さて、それなら、神さまは、僕たち私たちに自己紹介して下さったのでしょうか。もちろんです。神さまこそが、私たちよりもっと先に、先ず最初に、してくださったのです。それは、聖書の中にびっしりと、記されている言葉です。その中でも、代表的な言葉が、十戒の前書きです。神さまは、このように、自己紹介して宣言してください。「わたしは主、あなたの神。」天と地を創造して下さった聖書の真の神さまが、僕たち私たちに、「わたしだけが、あなたの神さまなのですよ。」と教えて下さったのです。

でも、もしもただそれだけなら、まだまだ遠い感じ、離れた感じがしてしまうかもしれません。おかしな表現かもしれませんが、神さまの名刺を、神さまからではなく、他の人から、もらった感じですか。もしかしたら、その名刺は、偽物かもしれないし、何よりも、この私のためにくれたのではないかもしれないかと思って、不安になるかもしれません。もっと直接につながってほしいと思います。

この十戒を最初に神さまからもらったのは、モーゼさんでした。このモーゼさんを通して、神の民イスラエルは、石の板に直接書かれた十戒が与えられました。神さまは、彼らにそのように宣言された神さまは、どんな神さまなのかということ、出来事を通してはっきりと示して下さったのです。それが、この言葉です。「あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。」

今朝、読んだ聖書の箇所、エジプトの国で奴隷であったイスラエルの人たちを神さまが解放し

た、約束の地へと連れ出した救いの御業が記されているのです。

あのとき、エジプトの王ファラオは、モーセを通して、イスラエルの民を解放するようにと神さまのご命令に対して、徹底的に反抗しました。神さまは、何度もファラオたちを懲らしめて、神さまの御心をお示しになられました。ところが、ファラオは、自分の考えを曲げません。ついに最後の最大の神の裁きがエジプトに下ります。それは、エジプトにいる人間も動物も、最初に生まれた者はすべて死ぬという裁きです。しかし、神さまは、イスラエルには、自分の家の玄関に小羊を殺した血を塗ってあれば、助けると約束されました。それが、現実起こったのです。それによって、ついに、ファラオは、モーセたちが出て行くことを認めました。これが、「過ぎ越し」という、神さまの驚くべき救いの出来事なのです。その後、海をも真っ二つに分けて下さって、ファラオから救い出してくださいました。イスラエルの人たちは、神さまの奇跡を目の当たりにしたのです。

こうして、神さまは、神の民を具体的に救ってくださいました。そのようにして、絆を結んで下さったのです。本当に、すごいことを軽々となさるこの神さまが、「わたしは主、あなたの神」とおっしゃいます。

ですから、この神さまが与えて下さった十の掟は、わたしたちにとって、ただの冷たい掟や、いやいや守るような戒めではありませんね。こんなすばらしい神さまが私たちを救って下さって、いつまでも救われ続けるために、「こうしたら、いつまでもわたしとあなたとの関係は、かたい絆で結ばれるよ」と、その愛の限りを込めて、あなたのためになることを考え抜いて、お与えくださったのです。ですから、この十戒を喜んで唱えましょう。何よりも、神さまを愛する思いを込めて、この十戒を感謝しながら、守って生きて行きましょう。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 20章2節

わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。

〈ねらい〉

- ・礼拝で唱えている十戒が、どのようにして、どんな目的で与えられたかを知る。
- ・十戒の前書きを通して、十戒が神様の愛を示すものであることを知る。

〈子ども観〉

「過ぎ越し」「エジプト」「イスラエル」「奴隷」など、子どもたちにとって難しい言葉がたくさん登場します。イスラエルの民を救ってくださった神様の愛を伝え、十戒の前書きにその神様の愛が示されていることを伝えて、分級でもていねいに話しましょう。「○○ってなあに？」という質問に答えながら進められるとよいでしょう。

3才児以下のクラスでしたら、「イスラエルの人がエジプトという国でいっぱい働かされて苦しんでいるのを、助け出してくださった神様」と簡単に話してみましょう。十戒には前文があって、「わたしはこういう神ですよ」と神様自身がお示しくださっていることを伝えます。

〈展開例〉

礼拝でイスラエルの人々のお話を聞きましたね。昔々、イスラエルの人々はエジプトという国で奴隷として働かされていました。奴隷って何だっけ？

朝から晩まで働かされて、好きなことが何もできない生活でしたね。神様はそんなつらい目にあってイスラエルの人々を救うため、エジプトで一番えらい王様ファラオに「もうイスラエルの人々を苦しめるのはやめなさい」と言われました。けれども、ファラオは言うことをまったく聞こうとしなかったので、ついに神様はエジプトに生まれた最初の子を殺すことにしたのです。でも、イスラエルの人々とは、家のかもいに小羊の血を塗っておけば殺さないという約束をしてくださいました。そうやって神様はファラオをこらしめたので、ファラオは、イスラエルの人々に「奴隷をやめて、出て行ってくれ」と言ったのです。

十戒の最初で、神様は、このことを言っておられるのです。「わたしはイスラエルの人々を苦しめたエジプトから助けた神様ですよ」「わたしはあなたたちを心から愛していますよ、だから安心して行きなさい。」と。

〈お祈り〉

天の父なる神様、イスラエルの人々をエジプトから救い出してくださった神様。わたしたちも神様に守られ、十戒を大切にして、守ることができますように。アーメン。

〈やってみよう〉

クルクルロケット 1号 2号 3号

用意するもの

画用紙
紙コップ
ビニールテープ
のり
ペン

1号 リボン

・細長く切った画用紙を輪にして、中心に画用紙を巻く。のりでとめる。

2号

色画用紙を
図のように折って
先をセロハンテープで
とめる

3号 タコ型

紙コップを切る
ななめに折って
羽をつくる。
下部にビニール
テープをはいて
重くする。

①

②

ペンでもおき書いても！
(①の時に)

① 折る

② 折る

角を折る
テープでとめる

〈暗唱聖句〉

出エジプト記20章2節

〈ねらい〉

神様は、過越のみわざをおこなって、イスラエルの民をエジプトから救い出してくださいました。その神様の恵みに感謝し、十戒に従う歩み始める。

〈展開例〉

みんなはどこで生まれましたか。どこの国の人ですか。

昔、日本から遠く離れたところに、イスラエルという国がありました。イスラエルの人は食べる物がなくなって、エジプトという国に神様によって導かれて引っ越しました。(地図を見せながら)ところが、エジプトの国では、ムチをうたれて働かされ、とても苦しい生活でした。

神様は、そのイスラエルの人たちの苦しみを見て、神様の不思議な力によってイスラエルの人をエジプトの国から助けってくださいました。

イスラエルの人は、神様が言われたとおりに、羊の血を家の玄関の柱にぬりました。しかし、神様を信じないエジプトの人は、羊の血をぬらなかったため、神様は家の中に入って、その家の中

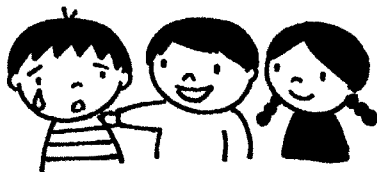
で一番最初に生まれた子どもと動物は殺されました。イスラエルの人は、羊の血をぬっていたので誰も殺されませんでした。イスラエルの人の代わりに、羊が殺されて、その血がぬられていたからです。これを主の過ぎ越しと言います。

イスラエルの人も、神様を忘れていた罪人でした。けれども、羊の身代わりによって、神様の憐れみの中に招き入れられました。こうして、エジプトの国で苦しむイスラエル人を、神様は特別に助けてくださいました。

神様はわたしたちを助けてくださいます。そして、私たち人間を幸せにする為に、神様の愛の言葉である十戒をプレゼントしてくださいました。わたしたちのことをいつも助けてくださる神さまの言葉(十戒)を読んで、神様に喜んで従いましょうね。

〈お祈り〉

イスラエルの人たちを助けてくださった神様、わたしたちのこといつも助けてくださってありがとうございます。神様の愛の言葉(十戒)に喜んで従っていくことができますように助けてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

「過ぎ越し」の出来事で、イスラエルの民はどんな災いから守られたのか、災いから逃れることができたのはどうしてなのかを学ぶ。過ぎ越しの小羊が十字架で血を流されたイエス様をあらわしていることへと導く。

〈展開例〉

1. ワークシート

①十の災い（出エジプト7章14節～12章36節）

神様がイスラエルの民をエジプトから救い出すためにエジプトにくだされた十の災いに順番どおりに番号をつけましょう。

- エジプト中、あぶだらけになった。
- 人や家畜にうみの出るはれ物ができた。
- ナイル川の水が血に変わった。
- エジプト中、いなごだらけになった。
- エジプト中、カエルだらけになった。
- 三日間、暗闇くらやみが続いた。
- 雹ひょうが降り、いなずまが走った。
- エジプト中、ぶよだらけになった。
- エジプト人のかちく家畜かちく えきびょうが疫病で死んだ。
- 初子ういご（最初に生まれた子）が死んだ。

②最後の災いからの過ぎ越し

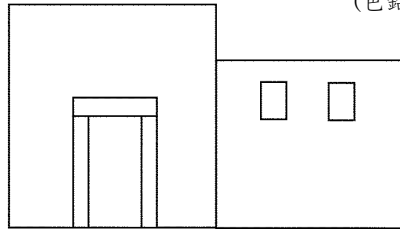
その夜、エジプト中の家から悲しい叫び声が聞こえてきました。どこの家でも一番上の子どもがばたばたと死んでいったのです。王様の息子も家来の子どもも、牛やろばの子どももです。しかし、しるしのついているイスラエルの家の子どもは、誰一人死にませんでした。

○災いから逃れることができたのは、どんなしる

しのついている家でしたか。

○イスラエルの人たちを災いから守ったしるしを下の家の絵に描いてみてください。

（色鉛筆で）



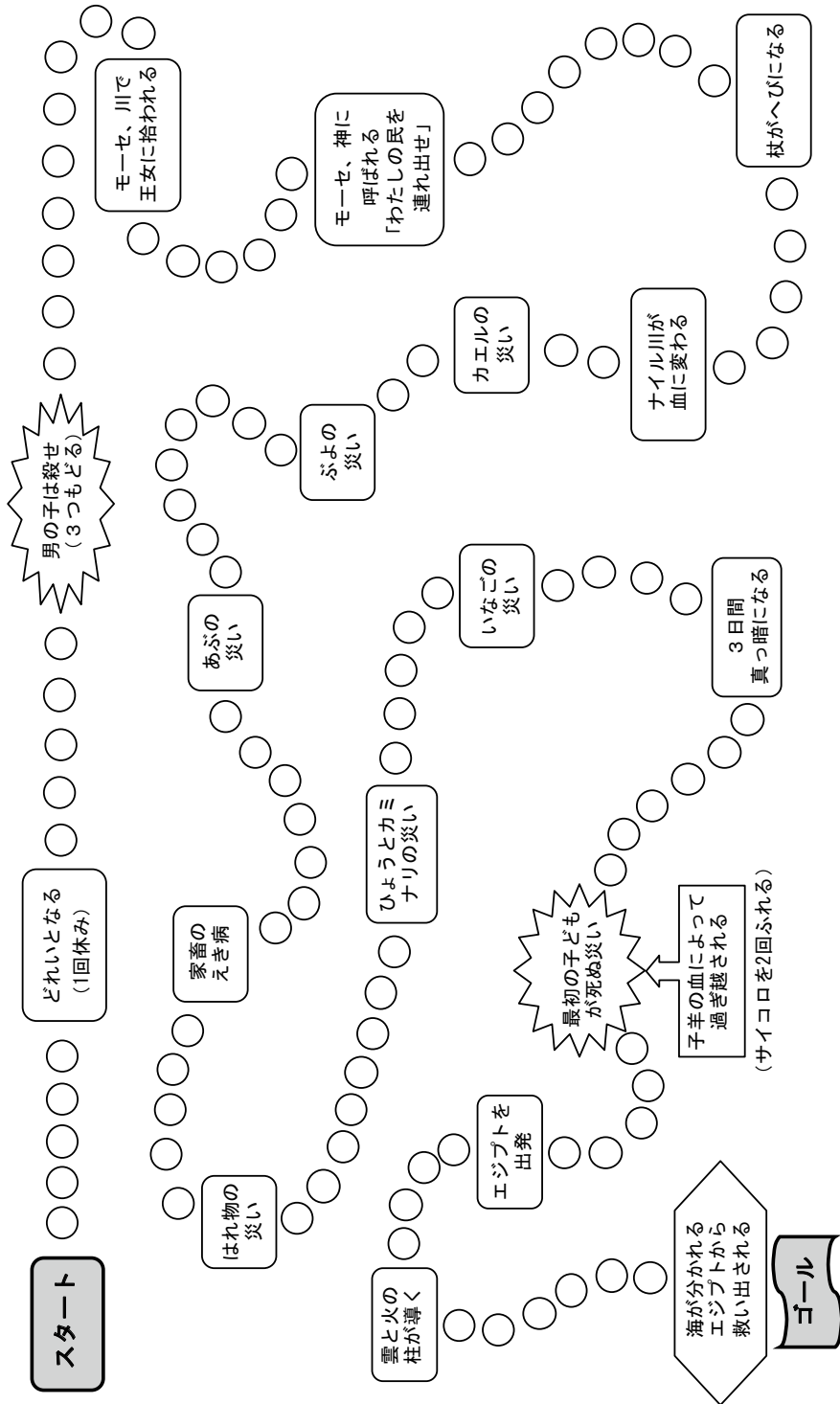
○そのしるしをつけるためには、どんな犠牲が必要でしたか。

○そのしるしはずっとあとになされる神様のみわざを表すものでした。それは何ですか。

○どうして神様はこのようなしるしをつけなさいと言われたのだと思いますか。

2. すころく「エジプトからの脱出」で遊ぼう
（次ページを参照）

すこるく「エジプトからの脱出」



〈ねらい〉

- エジプトから奴隷であったイスラエルを導きだされた神がなされた過ぎ越しの御業とはどのようなことであったかを理解する。
- 旧約の過ぎ越しの羊は、後に来られる真の救い主イエスのひな型であったことを理解する。

〈展開例〉

質問1

過ぎ越しの時にはふられる動物は何だったか。

質問2

ほふられた羊の血はどのように塗らなければならなかったか。

質問3

鴨居と二本の柱に血を塗っていなかったり、家の入り口から外に出たりするとどうなると予想されるか。

質問4

この過ぎ越しの儀式をどう守れと命じられているか。

質問5

ほふられた羊は、後に来る誰を示していると思うか。

まとめ

奴隷であったイスラエルがエジプトから脱出するために、神はエジプトの上に十の災いをくだされるが、その十番目の災いがまさに下ろうとしていた時、指導者モーセは、民にこのように命じる。過ぎ越しの小羊をとってほふり、その血にヒソブを浸して鴨居と二本の柱に塗りつけよ。滅ぼす者

がエジプト中を行きめぐるとき、その血を見てその家を通り過ぐす。血を塗っていない家や入り口から外に出た場合には、その家の初子は、命を奪われる。この災いの後もイスラエルは、この過ぎ越しの儀式を神の救いの御業を思い起こすものとして子孫と共に永遠に守らなければならないと。

イスラエルに対してなされたこの過ぎ越しの御業は、実は、後に来られるキリストの救いのひな型であった。真の過ぎ越しの羊なるキリストがご自身の命を人々のためにささげられ、その贖いを自分のためであったと信じる人々は、鴨居と柱に塗られた羊の血がその家の人々を滅びから救ったように、キリストの血によって永遠の滅びから免れる。このキリストの血による以外に救いはなく、この血によってきよめられていない者は、滅びに定められる。

イスラエルの人々が子孫ともども過ぎ越しの儀式を守り、神の救いの御業に感謝をささげたように、新約の神の民である私たちも真の過ぎ越しの羊であられるキリストの犠牲と御愛を覚えていつも感謝をささげる者でありたい。

〈祈り〉

神様、真の過ぎ越しの羊であられるあなたの御独り子イエス様の尊い犠牲に感謝いたします。その血によって、私たちは、滅ぼす者が鴨居と柱の血を見て通り過ぎ、イスラエルが滅びから免れたように、永遠の滅びから免れることができます。いつもあなたの深い御愛に感謝をささげる者であることができますようお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



テキスト ローマの信徒への手紙 6章1～11節

〈背景と文脈〉

パウロは、3～5章で、だれも行いによっては救われず、キリストへの信仰によってのみ救われる、と信仰義認の教理を説いている。また5章20節では、「しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」とも言っている。ある人々は、パウロのそのような教えを曲解し、「人間は信仰によってのみ救われるので、行いは重要ではない」、と考えた。そして放縦な生活をし、キリストの恵みを無駄にした。6章でパウロは、彼らのそのような考え方を否定している。

〈主の死と復活にあずかるバプテスマ〉(6:1-4a)

「恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか。けっしてそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができるでしょうか」(6:1-2)、と強い調子で、彼らの考え方を否定する。

キリスト者は、キリストと共に葬られ、キリストと共によみがえらされた。それはキリストに結ばれるためであった(3)。キリストの死と復活との一体性により、キリスト者はすでにキリストに結合され、新しくされている。ここでパウロはこの出来事を、バプテスマ(洗礼)という語で説明している。水のバプテスマは、キリスト者がキリストと共に死に、キリストと共によみがえったことの目に見えるしるしである。バプテスマを体験し、キリストに結ばれていて、なおも罪の中に生きることができない。

〈バプテスマの目的〉(6:4b-11)

バプテスマの目的について、ふたつの面から語られている。キリスト者は、以前は罪の奴隷として、罪という主人に支配され、仕えていた。キリストの死にあずかることによって、そのような無力で絶望的な状態から解放された。「古い自分」(6)とは、アダムにあって罪に支配されていた古い自

己である。パウロは、3章21～26節で、贖いのみわがもたらした罪の刑罰からの解放について語っているが、今日の箇所では、罪の支配からの解放について述べている。「わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています」(6)。バプテスマの目的は、キリスト者が信仰によりキリストと一体とされ、罪の支配から解放され、もはや罪の奴隷にならないためであった。

もうひとつの目的は、キリスト者が「新しい命に生きるため」(4)であった。パウロはキリストに結ばれている者を、新しく創造された者と呼んでいる。「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(コリント二5:17)。

キリストの死と復活にあずかったキリスト者はすでに罪から解放され、新しい命に生きる者と変えられている。だからパウロは、「このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」(11)という現実に気づき、それが何を意味するかを熟慮するよう促している。「考えなさい」とは、頭で考えるだけを意味しない。考えた結果が行動になって表れることを前提としている。すなわち、キリスト者はすでに罪に死に、キリストに結ばれて、神に対して生きている者である、という事実を思いめぐらすことによって、その事実が日々の生活のなかで具現化されてくることが求められている。すなわち、五体を不義のための道具として罪に任せるのではなく、かえって自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げることが求められるのである(13)。6章1～11節では、そのような生き方の根拠となるバプテスマについて教えられている、と言える。(後藤公子)

子どもカテキズム

問42 この意味は何ですか。

答 かつては神の民をエジプトから救い出すことによって、今は主イエス・キリストの十字架と復活の御業によって、神様は私たちの神様となってくださいました。ここにすでに、神様の愛の御心があらわれ出ています。この神様の愛の支配のもとではじめて、私たちは幸せに、また自由に生きることができるのです。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問43, 44
ハイデルベルク信仰問答 問1
ウェストミンスター信仰告白 20章1, 2節

今週は、説教テキストとの関係から考えて、問42の最後の二行に集中して研究します。

〈罪の支配からの解放〉

罪人というのは、さながら奴隷商人によって売り飛ばされそうになっている存在です。ある牧師が夢を見ました。真っ暗な工場で働かされて、いつまでここにいななければならないのかと聞くと、200年たったら下の階に行くという。どこまで下があるのかと聞くと、下から帰ってきた者がいないから分からない……。そこで目が覚めた。イエス様に救われて本当によかったと思ったそうです。イエス様は、そんな「罪の支配」の下にあった私たちに代わって、罪と死と闇に勝利してくださって、「神の愛の支配」のもとに取り戻してくださいました。イエス様を信じる私たちは、古い自分を殺していただいて（ローマ6:6）、新しい命に生きる自分のはじまりを与えていただきました。神は、そういう新しい私を造り上げるために、私がイエス様に少しでも近づくことができるように、十戒という道しるべを与えてくださいました。

〈神の愛の支配のもとでの幸い〉

私たちは「神の愛の支配」のもとでなければ、絶対に幸せにはなれません。人間は神と共に生きる時にはじめて本当の人間になります。残念ながら、世の常識は、その反対を教えます。罪人とい

うのは、かけられている鎖の重ささえ忘れるほどに、罪の支配に慣れきっています。ですから、窮屈な神の支配のもとに入るくらいなら、腐敗したままで減んだほうがマシだとうそぶきます。しかし聖霊が働くと、その誤解は砕かれます。神の支配は「御心でなければ私たちの髪の毛一本さえ無駄に落ちることがない」ほどの、細やかな愛に満ちています。世のいかなる力であれ、神の愛から私たちを引き離すことはできません（ローマ8:39）。選びの民は、生きるにも死ぬにも、永遠にこの愛の支配のもとに生きる「慰め」を得ています。

〈神の支配のもとでの自由〉

また私たちは「神の愛の支配」のもとで、はじめて「自由」を得ることが出来ます。罪という奴隷商人は、神の禁令や呪縛から解放されて、人間らしい自由を謳歌しなさいとそそのかしてきます。私とそのフロンティアに連れて行ってあげようと騙します。そうして偽りの自由を得た結果はどうでしょう。自分の自由で、人を殺し自分を殺すこともできると考える、底なしの悲惨に沈む現代人が生まれました。神が与えてくださる真の自由は、罪からの自由です。それは御言葉に反することに従わない自由であり、キリストに従う自由です。 (坂井孝宏)

5月24日 「過越の成就 —キリスト—」 説教展開例

テキスト ローマの信徒への手紙 6章1～11節
カテキズム 子どもカテキズム 問41、42

〔単元のねらい〕

十戒を学び続けます。その「まえがき」の二回目です。十戒の説教が続く中で、改めて、わきまえておきたいことは、わたしたちの説教の基本とは、神（主イエス）の自己紹介にもとづいて、主イエス・キリストを紹介することにあるということです。そのようにして信仰へ、救いへと導くことにあります。そして、主にある子としての生活を励まし、彼らの信仰を養い、育てることです。言葉を換えれば、福音を語ること。説き明かすことです。福音の主なるイエス・キリストを指差す行為が私どもの光栄ある務めです。そのとき、救い主なるイエスさまを指差す指がもっとも力を込めるべきは、十字架のイエスさまです。主イエスを直接語らない説教は、子どもたちのためには、好ましくないとの思いで、カリキュラムを編みますが、本日は、まさに十字架を語ります。救われた人間の感謝の表明としての十戒に生きることが、説得力をもつかどうかは、イエスさまの十字架をよく描き出せるかどうかにかかります。祈りましょう。

「神さまに対して生きるって、どんなこと？」

皆さんは、電車に乗るのは好きですか。先生は、子どもの頃、二つのことがとても怖かったことを覚えています。一つは、急行電車がホームをゴーツと猛スピードで、ものすごい音を立て駆け抜け、ビューーと風を巻き起こしながら、走り去るときです。もう一つは、ホームから電車に乗るときです。小さな足を踏み外したら、線路に落ちてしまうかもしれないと思ったからです。

電車がホームに近づくとき、駅員さんが、こうアナウンスします。「間もなく、電車が入ります。危険ですから、白線の内側までお下がりをください。」本当にそうです。もしも、小さな子どもが、白線の中に入って、そこに急行電車が入ってきたら、風で飛ばされてしまうかもしれません。

もう、数年前になりますが、東京の山手線の電車のホームに立っていた一人の男の人が、線路に落ちてしまいました。二人の男の人が、線路に飛び降りて、落ちた人をホームに担ぎ上げて、助けることができました。ところが、そこに電車が入って来て、二人をはねてしまいました。そのお二人は、亡くなられました。

神さまが与えてくださった十戒は、僕たち私た

ちに、「あなたのことを、こんなに愛しているのですよ。」という愛の言葉、プロポーズにたとえられます。それはまたたとえば、ホームにひかれた白線のようなのです。神さまと一緒に生きて行く人は、安全に確実に、天国へと進んで行けます。十戒は、神さまと共に生きる「柵」を示すその白線、目じるしです。また、アナウンスの声にもたとえられます。「危険です！ この言葉の外では生きてはダメ！」ということです。

先生は、もしも、助けられた人が、最初から、白線の内側に立っていたならなあ、と考えてしまいます。何よりも、新幹線のホームのように、手すりのついたホームが増えたらよいのになあと思います。手すりがあったら、落ちなかったはずですよ。十戒は、神さまの愛から落ちないための手すりのようです。

神さまが、十戒を与えてくださったのは、僕たち私たちを神さまの愛する子ども、宝物とさせていただくことです。ご自分の宝物とした神さまの子どもたちが、二度と、神さまから離れ、御言葉に背いて、罪の奴隷、悪魔の奴隷に戻ってなるものかと

いう御心です。むしろ、どんどん成長して、神さまに喜ばれる人間となって欲しいという御心です。

つまり、神さまは、わたしたちと一緒に生きようとしてくださり、いっしょに歩むことを求め、喜んでくださるのです。ですから、神さまの子どもとされた私たちは、いつも神さまを前にして、生きるべきです。生活するのです。それは、当たり前のことです。もし、神さまの前でないところで生きるなら、それは、まるで線路の上で、電車にひかれるのを待っているようなものです。いや、もっとひどいです。罪の報酬は、神さまとの間の交わり、絆を切ってしまうことです。つまり、神さまの命が繋がっていないのです。霊的に死んでいるのです。それは、体が死ぬこととは比べられないほど、恐ろしいこと、悲しいことです。永遠の死、滅びなのです。

それなら、僕たち私たちは、どうしたら神さまと一緒に生きられるのでしょうか。それは、御言葉を守って生きることです。けれども、大問題があります。御言葉を守って生きて行けないから、僕たち私たちは、罪人であって、本当に惨めなのです。

先週のお話は、神さまは、イスラエルの人たちをエジプトから救い出して、神さまの宝物の民にするために、最後の恐ろしい裁きを免れさせてくださったことを学びました。神さまの言いつけどおり、信じて、小羊の血を自分の家の玄関のかもいに塗った人たちには、神さまの裁きは、過ぎ越しました。それをしなかった家の中では、最初に生まれた男の子が死んでしまったのです。ユダヤ人は、今でも、過ぎ越しのお祭りを祝って、神さまに感謝しています。

それなら、今、過ぎ越しのお祝いをしていない僕たち私たちは、神さまは救いの御業をしてくださらなかったのでしょうか。答えは、ノウです。神さまは、もっとすごいことをしてくださいました。それが、神さまの小羊でいらっしゃるイエス

さまの十字架です。

旧約聖書の時代には、神さまは、イスラエルをエジプトからおどろくべき数々の奇跡を起こして解放されました。しかしそれは、新約聖書のイエスさまの予告なのです。映画の予告篇などを、テレビで宣伝しますが、それだけではストーリーは、分かりません。

新約聖書は、神さまがその独り子のイエスさまを十字架にはりつけさせて、血を流させることで、僕たち私たちに罪と死、悪魔の奴隷から解放して、神さまの子どもに取り戻して下さったことが告げられました。ですから、今、教会は、過ぎ越しはお祝いしませんが、イエスさまの十字架と復活の出来事を礼拝式のたびに覚え、感謝するのです。(大人の礼拝式では、聖餐をお祝します。)

このようにして、僕たち私たちは、イエスさまによって、十字架の死によって、神さまといっしょに生きるものとなりました。イエスさまの十字架を信じるだけで、ただちに、罪が赦されて、イエスさまと一つに結び合わされて、そのようにして神さまとの絆が固く、この上なく固く結ばれたのです。それをあらわすのが洗礼です。洗礼を受けた人は、もう、罪の奴隷となって死んでいる人間ではなく、救い出されたのです。

線路に入って助けた人は、代わりに死んでしまいました。けれども、イエスさまは、身代わりに死んで、三日目に復活されました。体の命を救われた人も、いつかは死にます。けれども、イエスさまが十字架で流された血によって救われた人は、永遠の命を受けたのです。イエスさまを信じた私たちは、今も、そして死んだ後も神さまと共に生きることができるようになっていたのです。だから、神さまの前で生きる私たちは、この地上で、天国への道からそれないように、神さまの愛から落ちないように、十戒を唱えながら、十戒の内側で生きて行くのです。それが、神さまに対して生きる道なのです。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 6章11節後半

キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

〈ねらい〉

- ・ 過ぎ越しでは、小羊という動物の血が流されたことを知る。
- ・ わたしたちは、イエス様の血による贖いによって生かされていることを知る。

〈子ども観〉

「血による贖い」を知らせることは、動物の血であっても、イエス様の血であっても生々しいことです。子どもたちの中には、犬、猫、インコなどの動物を飼ってかわいがっている子どもがいるでしょう。神様が動物の命をささげること、血をぬることを求められたことに嫌悪感をいだいてしまうかもしれません。「今日のお話、みんなはどう思ったかな?」と子どもたちの感想を分級の中で聞いてみるのもよいかもしれません。「気持ち悪い」とか「何かいやだな」という率直な気持ちも受け止めてあげましょう。

わたしたちの罪は重く、命をもって償われなければならないものであること、神様はわたしたちを罪のもとにおかれず、イエス様の十字架という救いの道を与えてくださったことを力強く語りましょう。ここにこそ神様の愛が結集していて、わたしたちが感謝して十戒に従う根拠があります。子どもたちが、神様の深い愛に気づきますように。

〈展開例〉

おはよう。礼拝で「過ぎ越し」についてお話をお聞きしましたね。では、今のわたしたちが動物をささげなくてもよいのはなぜでしょうか?

みんなは悪いことをしたとき、「ごめんなさい」って言えるかな? お友だちの大切なおもちゃを壊しちゃったら、ちゃんと買って返さないといけません。わたしたちの神様は正しい方ですから、神様のいいつけを守らなかったイスラエルの人々をそのまま「いいですよ」とはお赦しにならなかった。イスラエルの人々に「小羊をささげなさい」とおっしゃいました。飼っている動物をささげることはずらいことだけれど、神様は悪いことを見て見ぬふりをする方ではないのです。

今のわたしたちが動物をささげなくてもよいのは、イエス様が十字架にかかってくださったからです。こんなに申し訳なくて、感謝なことはありません。神様はわたしたちを深く愛しておられるので独り子のイエス様の血によってわたしたちの罪を赦してくださったのです。

〈祈り〉

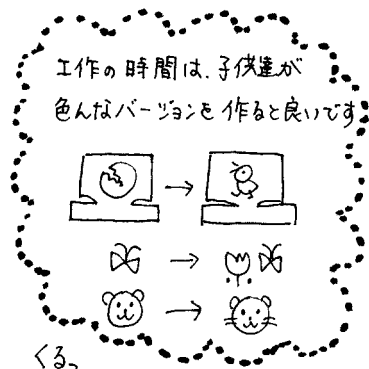
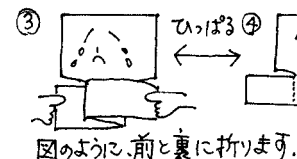
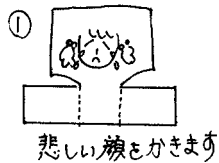
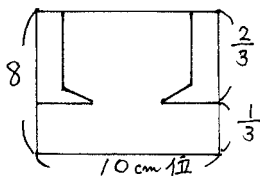
天の父なる神さま、わたしたちの罪、悪い心のためにイエス様を与えてくださってありがとうございます。アーメン。

〈やってみよう〉

〈ぐるぐる変身カード〉

用意するもの
画用紙
ペン。(はさみ)

画用紙をたて8cm
よこ10cm位に切る。



ぐるぐる
イエスさまによつて
ニコニコに
なりました。

〈暗唱聖句〉

ローマの信徒への手紙6章11節後半

〈ねらい〉

イエス様がわたしたちの罪の代わりに十字架にかかってくださったことを知る。

〈展開例〉

みんな、遠足に行ったことがあるかな？

遠足には何をもっていきますか？（お弁当、水筒、お菓子など）リュックサックにいれてもっていくよね。お菓子やお弁当が入っているとワクワクするね。

みんなは、遠足のリュックサックを友だちの代わりにもってあげたことがあるかな？ 楽しいリュックサックなら、少しぐらい重くても重くは感じないよね。

でもね、実はわたしたちも、ひとりひとりが目には見えないけれど、リュックサックを背負っているようなものなんだ。それはね、罪というリュックサックなんだ。神さまの言うことを聞けない、言われたことができないことを罪って言うのだよ。わたしたちは、なかなか神さまの言われたことを聞けないし、言われたこともできないんだ。

そして、神様は、わたしたちが言われたことを聞けないことや言われたことができないことを嫌われるんだ。

神様が嫌われる罪がいっぱい入っているリュックサックを代わりに背負ってくださったのがイエス様なんだ。このリュックサックを代わりに背負ってくださるのは、イエス様だけなんだ。だって、イエス様は罪がないから。罪というリュックサックをひとり分じゃなくて、イエス様の十字架を信じるみんなのリュックサックを代わりに背負ってくださったのですよ。

イエス様は、神様のいうことを聞けない、言われたことができないわたしたちの罪を引き受けて、代わりに十字架にかかって死んでくださいました。わたしたちもイエス様を信じれば、イエス様が復活されたように、復活させてもらえます。イエス様を信じて、神様と一緒にあゆもうね。

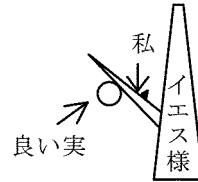
〈お祈り〉

神様、イエス様がわたしたちの罪の代わりに十字架にかかってくださってありがとうございます。これからもイエス様と一緒に、神様と歩めるように助けてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

十戒のまえがきは、私たちに何を教えるのでしょうか。罪からの自由を与え、御霊によって新しい人としてくださる神の恵みを覚えよう。



〈展開例〉

1. ワークシート

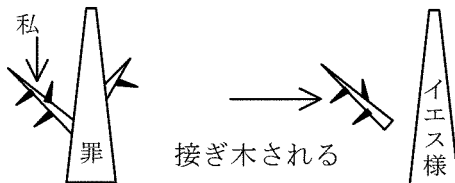
ふさわしい言葉を選んで○をつけましょう。エジプトでの最後の災いは、一番上の子どもが殺されるという災いでした。しかし、家の入口に(子豚・小羊・子犬)の血がぬってあった家の子どもは助かりました。神様の言葉を信じたからです。

私たちも同じです。イエス様が私たちの身代わりになって死んでくださったことを信じる人は(時間わり・テスト・罪)から自由にされ、(地震・滅び・洪水)から救われて(永遠の命・表彰状・金メダル)をいただけるのです。

私たちがこの神様の愛に対して(感謝・恐れ・不満)をもって十戒を守ります。

2. 考えよう

十戒を守ることはむずかしい？



私たちが罪の木につながれた枝で、罪のとげをつきだしている者でした。とげは家族や友だちを傷つけ、自分をも傷つけていました。

しかし、イエス様を信じることによってイエス様という木に接ぎ木されました。罪の力から自由にされて新しく生きる者とされたのです。

イエス様につながると、イエス様から命の水(聖霊)をいただいて、神様の喜ばれるわざをすることができるようになります。

しかし、接ぎ木された枝にはまだ古い性質であるトゲが残っています。十戒のとおりには生きられない自分を発見します。しかし、罪はもう私を支配してはいません。自分の力ではこのように生きられないことがわかると、ますます私たちはイエス様に依り頼むようになります。良い実を实らせてくださるのは私ではなく、私とつながってくださっているイエス様です。

十戒のまえがきは、この命令を与えるお方は、私たちに罪からの自由とキリストにある新しい生き方を与えてくださった主であると宣言しています。

3. 「十戒のまえがき」バラバラゲーム

1. 十戒のまえがきを紙に書く。(2セット)
2. 図のようにバラバラに切って、裏にする。
3. ヨーイドンで、紙を表に返しながらか、まえがきの言葉を正しく組み合わせる。(2チームに分かれて競い合う)

わたしは	あなたの	神	主で
あって	あなたを	エジプトの	
地	どれいの	家から	
みちびき	出した	ものである	

〈ねらい〉

- キリストに結ばれるために洗礼を受けた者は、キリストと共にその死と復活にあずかるということを理解する。
- キリストを信じる私たちは、罪に対して死に、神に対して生きている存在であることを理解する。

〈展開例〉**質問1**

パウロは、私たちが罪の中にとどまるべきだと言っているか。

質問2

キリストに結ばれるために洗礼を受けた者はキリストの何にあずかる者になったと書いてあるか。

質問3

私たちがキリストの死にあずかるのは何のためか。

質問4

私たちが罪に対してすでに死んでいるとすれば、罪は私たちを支配できるか。

質問5

私たちは、地上で生きている間、罪の支配から自由になっていながらも時に罪を犯してしまうことがある。罪を避けるためにはどのように気を付けるべきか。

まとめ

私たちがキリストを信じて洗礼を受けた時、私たちは、十字架上で死なれ、葬られ、よみがえられたキリストと結び合わされ、私たちがキリストと共に古い自分を十字架上ではりつけにし、葬られ、復活の命にあずかることになる。

古い自分を十字架の上で殺した私たちは、もはや以前のように罪の支配の下には置かれてはいない。私たちには、罪からの自由が与えられており、その自由をもって神に仕え、神の御心を行うのである。

地上の生活においては、霊的な戦いがあり、サタンは救われた者をも誘惑しようとするが、私たちは、またと奴隷のくびきにつながれることのないよう抗う力を神に祈り求めつつ、罪を避けて注意深く生きるべきである。

〈祈り〉

神様、イエス様を信じるときに、イエス様と一つに結び合わされ、私たちの古い自分が十字架につけられ、イエス様の復活の命にあずかる特権が与えられたことを心から感謝いたします。私たちが罪を犯し続けてまたと罪の奴隷の状態に戻ることがないように、どうか罪に抵抗する力を私たちに与えてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



1. ペンテコステの出来事

「五旬節」(ペンテコステ)は、過越祭から数えて50日目に行なわれる収穫の祝いです。主イエス・キリストが、十字架で贖いの死を遂げてくださり、復活・昇天され、ついに約束の聖霊が注がれる待望のときです。

聖霊降臨は、激しい風のような音、炎のような分かれた舌、そして「ほかの国々の言葉」を語る奇跡など、誰もが見聞きできる不思議な現象を伴っていました。けれども、聖霊が歴史の中に突入するという神の奇跡は、言葉によって描くにはあまりにも不可思議な出来事なので、かろうじて比喩的に表現されるのみです(「吹いてくるような」「炎のような」)。

「炎のような分かれた舌」は、聖霊が一人ひとりに分け与えられ、しかもすべてが同一の御霊であることを示しているのでしょう。霊に満たされた一同は、霊が語らせるままに「ほかの国々の言葉」で話し始めます。「多言語奇跡」であり、「異言」とは区別されます。

2. 聖霊降臨の衝撃

エルサレムには、「天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいた」と言われます(5)。他国に散らされていたユダヤ人で、本国に帰還・定住して人々です。

9～11節の地名リストは、ユダヤを中心に弧を描いており、ほぼ離散ユダヤ人の所在地に重なります。はるか遠方の「ローマ」が含まれているのは、世界の「首都」としてのローマを、世界宣教の広がり象徴として選んでいるのでしょう。

彼らは、それぞれ自分の離散した地域の言葉で、「神の偉大な業」が語られるのを聞きます。神の偉大な業。それはイエス・キリストを通して神が始めまた完成してくださった、力ある救いの業です。これにまさる偉大なものは世にありません。

この驚くべき出来事に直面した人々が、すぐさ

ま神の救いの御業への賛美と感謝に向かうわけではありません。人々の間に「驚き」が走ります。やがて、その驚きを合理的に解釈する人々が現われます。「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」。理解を超える出来事にぶつかるとき、自分の姿勢を立て直すために、合理的な「つじつま合わせ」に腐心するのです。

3. 聖霊降臨の意義

聖霊の降臨は、世にあるもろもろの霊の働きとはまったく種類を異にします。世のもろもろの霊は、人間に「名」「力」「誉れ」を与えますが、神の霊は、ただ神の栄光のためにだけ働かれます。世の霊は、諸民族の間に分裂・憎しみ・争い・騒乱をもたらしますが、神の霊は、一致・愛・和解・秩序をもたらします。

神の御霊は、恐れている者に勇気と大胆さを与えます。わずか50日前には、大祭司の家の「女中」に主イエスを告白することができなかったペトロが、聖霊を受けると直ちに、大声で公然とキリストを宣べ伝える人になります。神の霊は、聖書のさまざまな箇所「風」に譬えられています。霊は神の自由な「命の息」そのものです。人間には不可能と思われる方法で、人を新しく造り変えるのです。弱い私たちも、聖霊を受けて自由かつ大胆にキリストを宣べ伝える人にされます。

自由の御霊は、福音を世界に伸展させる原動力です。聖霊は教会に「神の偉大な業を語る」よう励まされます。ペンテコステの霊は、人間が最も聞くべき価値のある言葉を聞かせてくださいます。聖霊は、「語らせる霊」であるとともに「聴きとる霊」です。ペンテコステは、何よりも「聴く」ことの奇跡を世界にもたらしました。

(小野静雄)

※第25号(2007年4・5・6月号)102ページより、再掲載です(編集部)。

〔単元のねらい〕

罪ある人間を救い、人間の罪によって影響された世界を回復するという、神様による救済の歴史に、聖霊降臨の出来事を位置付けるならば、この出来事は、バベルの塔事件によって、人間の言葉が混乱させられたことの回復の出来事と言えるだろう。たとえ、今の段階で、言葉が違うゆえに互いに話が通じなくても、主イエス・キリストを信じ、同じ一人の神様へと向かうならば、神様の家族としての一体感を味わうことが許される。聖霊降臨によって、世界中のキリスト者が一つとされる神の国の完成へと確かに向かっていることを子どもたちに伝えたい。

「神様の一つの家族・教会の誕生日」

愛する子どもたち。おはようございます。

みんなは、旧約聖書に書いてある、大昔の事件、「バベルの塔」のお話を聞いたことがあると思います。その頃は、まだ、この世界には一つの言葉しかありませんでした。ある日、人々は、みんなで相談して、神様がいらっしゃる高い高い天に届くような高い高い塔を作ろう！ということになりました。どうしてそんな高い塔を作ろうとしたかと言うと、神様のように有名になりたかったからです。このように、人間は、ノアさんの時代の人々のように、またもや、神様に背中を向けて、悪いことを考えるようになってしまったのです。本当に人間は、神様に裁かれても懲りることをしない、罪深いものですね。

人々の様子を天から御覧になった神様は、大変悲しまれました。そして、そういう人間に罰をお与えになったのです。どんな罰かと言うと、言葉をバラバラにして、お互いに何をしゃべっているのか分からないようにする罰でした。それで、人々は、一緒に力を合わせて塔を作ることができなくなってしまったのです。また、言葉が通じませんから、一緒に仲良く住むこともできなくなってしまいました。そして、世界中に散って行って、バラバラになってしまったのです。

ところで、このバベルの塔の事件から何千年と経ってから、神様のお約束通りに、罪からの救い主イエス様がお生まれになりました。そして、私

たちを罪の罰から救うために十字架で死なれて復活なさって、お弟子さんたちにお会いくださり、復活なさってから四十日後に天に昇られたのです。そして、天の王様の座席に着かれました。それから十日後に、やはり、神様のお約束通りに、聖霊なる神様がこの世に降ってお出でになったのです。その時のことが、今日の聖書の箇所にあります。

さて、みんな、今日は、何の日か知っているかな？今日は、イエス様が復活なさったことをお祝いするイースターの日曜日から数えて五十日目なのです。今日は、実は、聖霊なる神様がこの世に降ってお出でになったことをお祝いする日曜日なのです。「ペンテコステ」というのですが、「ペンテコステ」というのは、「五十日目」という意味です。その日、ユダヤでは、「五旬祭」というお祭りが行われていました。「五旬祭」というのは、ユダヤでは、大きな三つのお祭りの一つで、小麦の収穫を神様に感謝して、礼拝するお祭りでした。

復活なさったイエス様は、お弟子さんたちに次のようにお約束なさいました。「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」(ルカ24:49)。五旬祭の日、イエス様のお約束を信じて、エルサレムでお祈りして待っていたお弟子さんたちの上に聖霊なる神様が降ってお出でになって、世界で最初の教会が誕生したのです。そ

の日の様子は、次のようでした。

いつものようにお弟子さんたちは、エルサレムで、一つの場所に集まって、神様にお祈りしていたのですが、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえてきて、家中に響きました。そして、今度は、炎のような舌が分かれ分かれにお弟子さんたちの上に留まったのです。こうして聖霊なる神様が降ってお出でになったわけです。聖霊なる神様は本当は人間の目には見えない御方です。聖なる霊でいらっしゃいます。けれども、イエス様のお約束通りに、天から降ってお出でになったことがみんなに分かるようにと、激しい風のような音を立てられ、炎のような舌の形で、降ってお出でになったのです。すると、お弟子さんたちに不思議なことが起こりました。何が起こったかと言うと、お弟子さんたちは、全然、外国の言葉を知りませんでした。みんなも、英語とか習わないとしゃべれないと思いますが、この時、お弟子さんたちは、聖霊なる神様から御力をいただいて、全然習ったことのない、いろんな国の言葉で、神様が、イエス様を遣わされて、救いの御業を行ってくださったことを話し始めたのです。この時、お弟子さんたちの周りには、何事が起こったんだというので、たくさんの人たちが集まっていたのですが、ある人たちは、ガリラヤ生まれのお弟子さんたちが、いろんな国の言葉で、イエス様のことを話しているので、びっくりしました。その一方で、ある人たちは、お弟子さんたちが、朝っぱらからぶどう酒を飲んで、酔っ払っているんだと思って馬鹿にしたのです。

このようにお弟子さんたちは、聖霊なる神様の御力をいただいて、世界のいろんな国の言葉で、神様の救いの御業をお話したのです。神様のどんな救いの御業をお話したのかと言うと、それ

は、もちろん、イエス様が私たちが罪の罰から救ってくださるために十字架で死なれて復活なされたことです。実を言うと、この時、お弟子さんたちがいろんな国の言葉で、イエス様のことをお話したのは、「これから、世界中のいろんな国に、イエス様のお約束通りに、イエス様のことが伝えられるようになりますよ」という予告、お知らせでした。復活なされたイエス様は、やはり、お弟子さんたちに次のように約束なさっておられたのです。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(1:8)。

そして、今は、世界中のいろんな国にイエス様のことが伝えられて、いろんな国にイエス様を信じる教会があります。みんなが通っている教会も、その一つです。バベルの塔の事件があってから、世界中の人々は、お互いに相手の言葉を勉強しなければ、何をしゃべっているのか分からなくなりました。でも、言葉が通じなくても、イエス様を信じていれば、神様の家族として一つになれて、一緒に神様を礼拝することができます。日本人も、アメリカ人も、ドイツ人も、アフリカ人も、たとえ言葉は通じなくても、イエス様を信じることで、一緒に神様へと向かって礼拝することができるのです。また、たとえ、戦争や争いをしているような敵同士でも、イエス様を信じるならば、一緒に神様へと向かって賛美できるのです。バベルの塔の事件でバラバラになってしまった世界中の人たちが、イエス様を信じるならば、たとえ言葉は通じなくても、たとえ敵同士でも、一つになって神様を礼拝できる、そんな教会が聖霊なる神様によって誕生したことを今日はぜひ覚えてください。(長谷川潤)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 2章4節

すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

〈ねらい〉

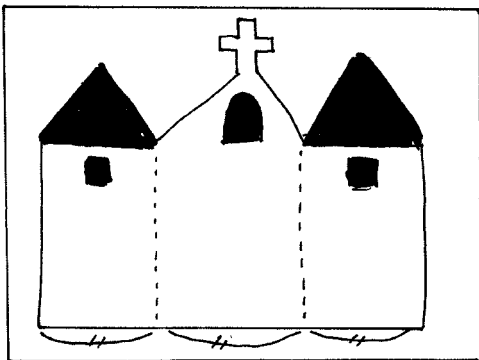
神様が送ってくださった聖霊によって、弟子たちはイエス様の救いを大胆に語る者とされ、世界中のキリスト者は一つにされて教会となりました。この聖霊が、わたしたちの教会の中でも生きてはたらいいてくださることを知ります。

〈子ども観〉

聖霊は不思議です。今回の聖書箇所には、「激しい風のように吹いてくる音」「炎のような舌がわかれわかれになって」などと、表現されています。聖霊なる神様は見えないお方であるがゆえに、こんなふう人間にとって不思議な方法で現れてくださいました。いつも感じることですが、こういったお話を聞くと、大人は「ホントかね〜っ」と思ってしまいます。ところが、子どもは「へ〜っ、そうなんだ」という顔をして、すーっと受け入れてしまうことが多いのです。大人のほうが常識にがんじがらめにされて疑い深い……。

さて、聖霊が降ると、弱々しかった弟子たちが一変して力を得て、あらゆる国の言葉で神様の御業について語り始めました。聖霊の御力によってばらばらだった弟子たちが一つにされ、教会が形作られたこと、聖霊降臨→教会の誕生であることをわかりやすく語りましょう。そして、その同じ聖霊が今、わたしたちの教会にいらっしやることを伝えます。

〈やってみよう〉



〈展開例〉

みなさん、おはよう。今日は礼拝で「ペンテコステ」のお話を聞きました。不思議なことが起きたんだね。突然激しい風がゴォーと吹く音がして、炎のような舌が分かれ分かれになって弟子たち一人ひとりの上に降って来られたのです。すると、イエス様がいなくなって、心細くてしょんぼりしていたお弟子さんたちは、急に力がわいてきて、今までしゃべったこともないような外国語で神様の御業について話し始めたのです。

もう一つ大切なことは、ばらばらだった弟子たちを聖霊が一つにしてくださいましたこと、それが「教会」です。教会は人間がつくったのではなく、聖霊という神様が集めてくださったものなのです。この教会がずっとずっと続いて、たくさん増えてわたしたちの教会になっているのです。だから、「ペンテコステは教会の誕生日」って言うのです。天から降ってきたこの不思議な聖霊は、わたしたちの教会にもいてくださって、みんなの心の中にもいてくださるのです。すごいことですね〜。感謝してお祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、神様は聖霊を送ってくださって弟子たちに勇気を与えて、教会をつくってくださいました。わたしたちも、聖霊によって力づけてください。アーメン。

- 画用紙に教会を書いておきます。
教会に色をぬったり、
書けるお友達は みんなの顔色
書きましょ！
- 切って 折り線で折ると
カードにも なります。

〈ねらい〉

神様を信じることは聖霊の働きによる、ということについて学ぶ。

〈展開例〉

みんなには、それぞれ誕生日というのがありますね。同じように、教会にも誕生日があります。教会の誕生日というのはいつかわかりますか？この〇〇教会ができたのは〇〇年の〇〇日です。今日はもっと昔の、最初の教会の誕生、ということについてお話したいと思います。

イエス様が十字架にかかって死んで、そして復活した日から50日あとの日のことです。神様から、人に「聖霊」が与えられました。神様の聖霊、聖霊なる神様です。この「聖霊」によって世界中の人が神さまのことを信じることができるよ

うになりました。

教会っていうのはなにををするところでしょうか？ そう、神さまにお祈りをしたり、讃美歌を歌ったりするところだよ。神さまを信じているから教会にいくんだよ。じゃあなんでみんなが神さまを信じているかということ、それはさっきお話した、「聖霊」によってだよ。

だから、「聖霊」があたえられた日が教会の誕生日なのです。

〈祈り〉

神様、ぼくたちは「聖霊」によって神様のことを信じています。「聖霊」の力をありがとうございます。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

ペンテコステに何が起こったのか。教会を誕生させ、成長させてくださる聖霊の働きを学ぶ。

〈展開例〉**1. ペンテコステってどういう意味？**

ペンテコステとはギリシャ語で「五十日目」という意味です。逾越祭の二日目から数えて五十日目です。この日はもともと五旬祭という収穫を感謝するお祭りの日でした。教会は、五旬祭の日に使徒たちが集まっているときに起こった出来事を記念して、ペンテコステをお祝いします。

2. 何が起こったの？

() に言葉を入れましょう。
() の日に、イエス様を信じる人たちが集まってお祈りしていると、突然、激しい() が吹いてくるような音が天から聞こえ、家中に響きました。

() のような() が分かれ分かれに現れて、一人ひとりの上にとどまりました。

皆は() に満たされ、今まで話したこともない外国の言葉でイエス様のことを話し始めました。

3. 聖霊ってどういうお方？

聖霊は単なる力やエネルギーのことではありません。人格を持った神様ご自身です。目には見えませんが、風がふくと木の枝が揺れるように、聖

霊なる神様が働かれるとき、神のみわざが表わされます。聖霊のお働きは……

①神様の御言葉に耳を傾けさせ、悔い改めと信仰へと導く。

聖霊は御言葉を聞く者たちの心に働きかけ、罪を示し、イエス様を信じることへと導いてくださいます。

②教会を形づくってくださる

聖霊はイエス様を信じる人を集めて教会を形づくってくださいます。(教会とは単に建物のことではなく、イエス様を信じる人の集まりのことです) また、イエス様のことを人に伝えることができるように助けてくださいます。

③信じる者をきよめてくださる

聖霊は信じる者の心に住んでくださって御霊の実(ガラテヤ5章22、23)を結ばせ、成長させてくださいます。

4. ペンテコステは教会のお誕生日？

この日、聖霊の働きによって三千人もの人々がイエス様を信じました。これが教会の始まりです。教会はここから世界中に広がっていきました。聖霊は今も信じる人々を生み出し、教会を成長させてくださっています。

5. 鳩と炎のモビールを作ろう

聖霊は炎(使徒2:3)や鳩(ヨハネ1:32)のように降ったとあります。鳩と炎のモビールを作って飾ってみましょう。(次ページを参照)



モビールをつくろう

〈準備するもの〉

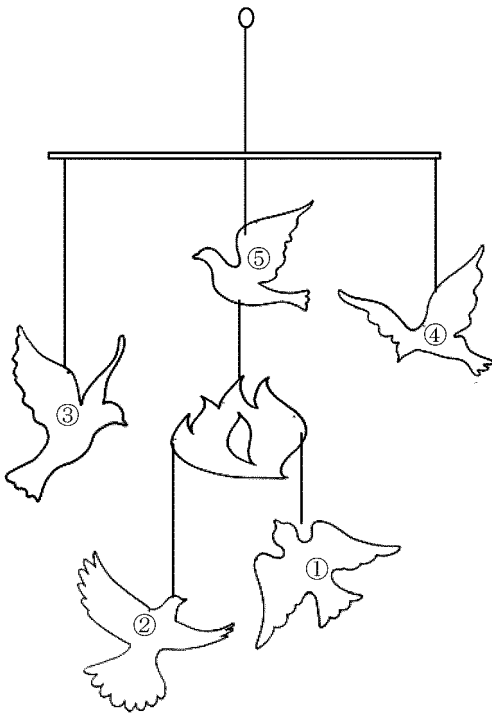
竹ひご（細長く切った厚紙でもよい）、糸（ナイロン糸、ミシン糸、細い毛糸、タコ糸など）、はさみ、ポンド、画用紙（鳩は白色、炎は赤色の画用紙）、押しピン

〈作り方〉

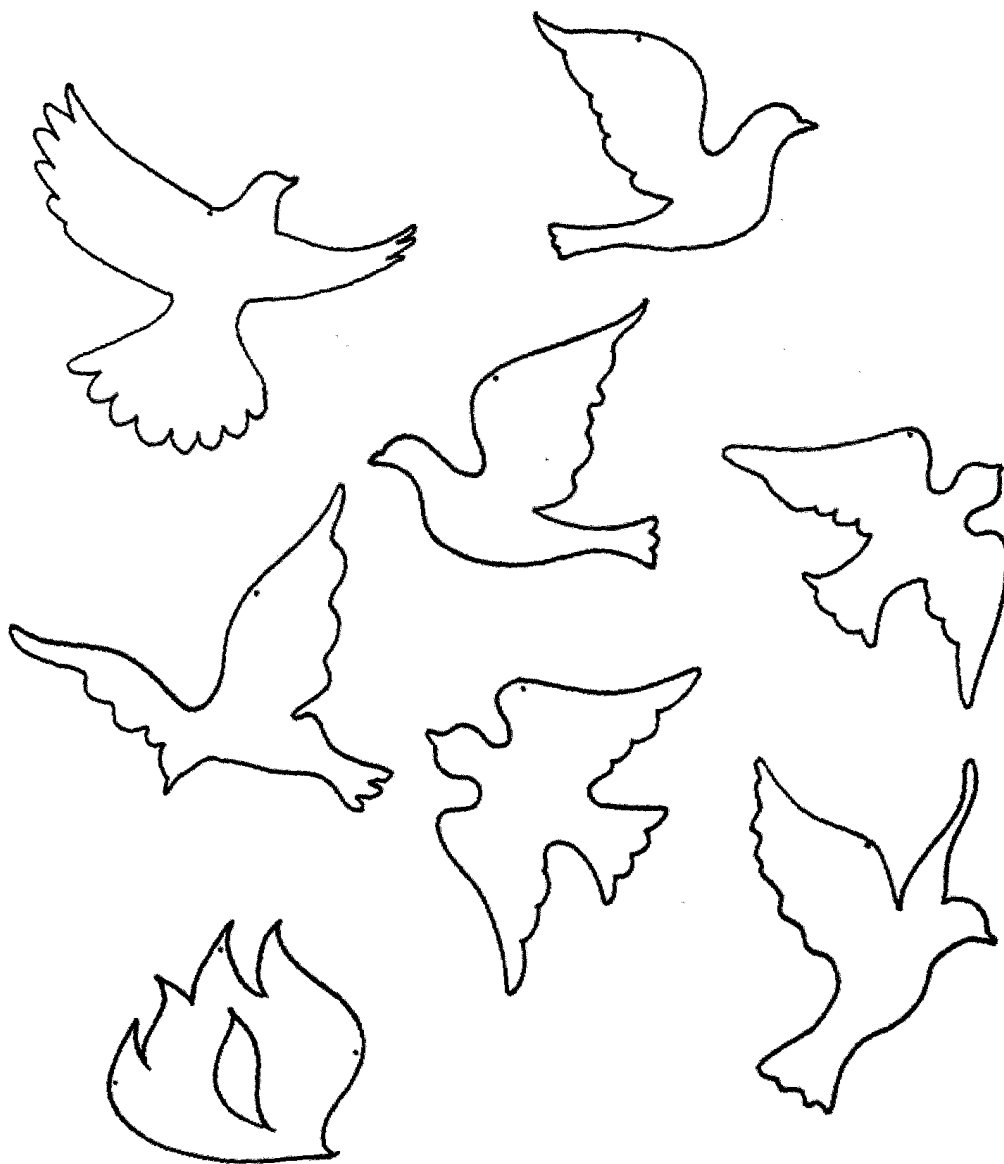
1. 竹ひごを切る（20cm～30cm）
2. 下の図から好きな鳩の図案五つと炎を画用紙に拡大コピーしてはさみで切り抜き、鳩と炎を作る。
（炎は白の画用紙の両面に赤色をぬってもよい）
3. 鳩と炎に穴をあける。（⑤の鳩と炎は上下に穴）

—————ここまでを教師がやっておくとよい—————

4. 下の図のようになるように、糸を穴に通して結ぶ。（下の方の鳩から作る）
（パーツが重なったりぶつからないようにする）
5. 竹ひごのバランスがとれているかを見て大丈夫なら糸を固く結び、ポンドで固定する。（1mm単位で竹ひご上の糸を左右に動かしてバランスをとる）
6. 天井に押しピンなどでつり下げる。（一人に一つでなく、みんなで協力して一つのモビールを作ってもよい）



モビールの型紙



〈ねらい〉

- 聖霊が降られてから、弟子たちの上にどのような変化が起こったか理解する。
- この聖霊降臨が、教会の始まりであることを理解する。

〈展開例〉**質問1**

弟子たちが集まっているところでいったい何が起こったのか。

質問2

弟子たちにほかの国々の言葉を話させたのは誰か。

質問3

周りの人々は、弟子たちがほかの国々の言葉で語っているのを聞いてどんな反応をしたか。

質問4

弟子たちが語っていた話の内容はどんなことであつたか。

質問5

驚いた人々のうちある者たちは、この出来事をどう説明しようとしたか。

まとめ

五旬祭の日に、弟子たちの上に激しい風が吹いてくるような音が聞こえ、炎のような舌が一人ひとりの上に留まった。その結果、聖霊によって彼らは神の偉大な御業を様々な国の言葉で語りだした。これが教会の誕生である。

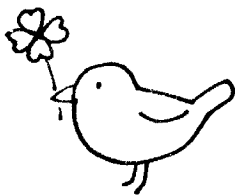
エルサレムには、様々な離散の地からユダヤ人が集まっていたが、この時、彼らは自分の地の言葉で弟子たちが語るのを聞く。しかし、ある者たちはそれを酒に酔っているのだと説明しようとした。この奇跡のような出来事に驚き、受け入れることができなかったからである。

キリストの十字架の死から復活の姿に接してもなお、臆病でキリストを自分から証することなどできなかった弟子たちを、聖霊は大胆に主の御業を語る者、証する者と変えてくださり、この後、キリストのために各地を歩きめぐり、最後には、その伝道の業のために殉教するほどの勇氣ある証人と変えてくださった。

私たちも自分自身は弱く、反対にも屈せずキリストを大胆に証するほど強くはない。しかし、今や信じる者の中に共に住んでくださる聖霊に助けを求めつつ歩むならば、この弟子たちと同じように大胆にキリストを福音を証する力を私たちもいただけるのである。

〈祈り〉

神様、約束の聖霊を教会に私たちの内に与えてくださり、ありがとうございます。私たちが自分自身の力によらず、初代教会の時代の弟子たちのように、聖霊の力によって福音を大胆に宣べ伝える者となることができるようお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



マタイ3章には主イエスがバプテスマのヨハネから洗礼を受けられた際、聖霊が降り、み父のメシアとしての任職のみ声があったことが記されています。続く4章では、そのメシアとしての公的な承認と任職を受けられた主イエスを聖霊がただちに荒れ野に導き、そこで主が悪魔の誘惑をお受けになる経緯を記します。「悪魔」とは「訴える者」(ゼカリヤ3:1)を意味し、人を誘惑して造り主なる神から引き離す者です。

この悪魔の誘惑によって主イエスのメシア性が実質的に試されることとなり、これらを斥けられることで、主イエスはまさにご自分がメシアであることを証明なさいました。その上で宣教の働きをお始めになることとなります。主イエスがあえて悪魔の試みをお受けになったのは、私たち人間が受ける試みをご自身も受けてくださることによって、真に私たちを助ける救い主となられるためでした(ヘブライ2:17-18、4:14-16)。

〈第一の誘惑〉

悪魔は主イエスがみ父と等しい全能の力を持つ神の子であることを知った上で、その力を自力で用いるようにと誘惑しますが、主イエスはたとえ石をパンに変えるような大きな力を持っていたとしても、人の命の養い手であるみ父のみ言葉への信頼を欠いていたなら無意味であるとお答えになって、この誘惑を斥けられます。

この背景には、おそらくモーセに率いられたイスラエルの民が、荒れ野でマナを与えられたこと(出エジプト16章)があります。イスラエルは空腹のきわみにあって、み言葉への信頼を貫くことができませでしたが、主イエスは私たちに先立って誘惑にうちかかってくださったのです。

なお、悪魔の三つの誘惑に対して、主イエスはいずれも申命記のみ言葉を引いて悪魔を斥けておられます(第一の誘惑には8:3、第二の誘惑には6:16、第三の誘惑には6:13)。これは注目すべきことです。いずれの場合であれ、私たちへの試みを斥けてくださるのは、神のみ言葉なのです。

〈第二の誘惑〉

悪魔は「しるし」によって信じることへと誘惑しますが、主は、神を試みてはならないとお答えになって、この誘惑を斥けられます。しるしを求めることは、人が神の上に立って、神を試験することです(やはりイスラエルの民が神を試みる過ちをおかしています。出エジプト17:7)。

この自己神化への誘惑は被造物としての人間にとって、まさに根本的な誘惑と言えます。悪魔はエデンで、人をこの誘惑によって陥れました(創世記3:1-5)。またマタイ27章では、人々は十字架から降りてくるなら信じてやろうと主イエスを嘲っています(40-43)。

神を試みる時、神への信頼と服従は失われています。十字架の死に至るまでみ父のみ心への従順を貫き通された主は、私たちの信仰をも、この根深い誘惑から守ってください。

〈第三の誘惑〉

悪魔はここでは、富と権力という「見えるもの」と引きかえに自分を礼拝せよとの露骨な誘惑に出ます。前の二つの誘惑にもまして、十戒の第一戒への信仰を根本的に問うものです。この世の主権はただ神にのみあります。悪魔ですら、神の許しなしには何も行うことはできなかつたはずです(ヨブ1章)。従って神をのみ礼拝し、仕えねばなりません。これが人の本分です。

三つの誘惑を斥けられた悪魔は、主イエスのもとを離れ去りますが、それは「時が来るまで」(ルカ4:13)のことでした。ゲッセマネから十字架に至る道筋において悪魔の誘惑は頂点に達します。「退け、サタン」(10)とのみ言葉は、16章23節で再び繰り返されます。それはご自身の十字架への道を否むペトロに向けてのものでした。十字架はみ父のみ心でした。これを妨げる者とのたたかいは主は担い続けられたのです。

(木下裕也)

※第1号(2001年4・5・6月号)14ページより、再掲載です(編集部)。

十戒の序言は、「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。」です。第一戒を学ぶにあたっては、たいへん重要な意味を持っています。

この戒めが三千年以上も昔に、イスラエル人がエジプトから救い出された時、彼らはモーセから受けたものであれば、対象はイスラエル民族であって、私たちには関係がないのではないかと言う人がいます。それに対しての答えは、彼らを「奴隷の家から導きだした」神は、イエス・キリストによって、私たち罪人を罪と死の奴隷から助け出してくださったこと。つまり彼らの救出は、後になって実現するキリストによる贖いのひな形だったと言えるからです。イエス・キリストを信仰をもって信ずる人は、イスラエル人であろうと日本人であっても、救いの恵みにあずかることが出来るのです。そして恵みによって救われた者は、喜びの生活を送るようになります。そのためにこの戒めは生活の道しるべとなります。また、神は「わたしは主、あなたの神である」と宣言されます。この言葉は、十戒の授与者が神であって、神的神威とともに、契約を思い起こさせるものです。私たちはこの世にあって、神様に導かれ共に歩みます。十戒はそのための地図なのです。

第一戒は、「あなたは、わたしのほかに、なにものをも神としてはならない。」この戒めで求められていることは、神様を唯一のまことの神また私たちの神として知り、認めること、また、それにふさわしく神を礼拝し、神の栄光をあらわすことです。人間が墮落しても、人間は神を忘れることはありません。しかし、神を神として正しく認めることは出来ずに、神に逆らうものとなり、さらには神でないものを神とするようにさえなりました。しかしそれだけではなく、今日では、神を考へることも、求めることもしなくなり、自分を神とするようになったのです。

「宗教は多くあっても、結局は同じ一つの神を信じていることになるのではないか」ということ

が言われます。富士山の登山口は幾つもあるが頂上は一つであると言うのです。日本の神もギリシャの神も、どれも人間の救いを求めるという共通性があります。しかし、求めても頂上の天の国には届かないのです。人間が考え出した神々は偶像でしかなく、まことの生ける神様にのぼりつめることは決してないのです。

唯一のまことの神を、私たちの神として知り、認めるためには、人間の考えた方法ではなく、神の啓示によらなければなりません。そこで神は聖書を特別啓示として与えてくださったのです。つまり神の語りかけを聞くことが重要なのです。この神のみ言葉である聖書というメガネによって、心の目は、唯一の神も自然も人間も正しく見ることができるようになります。同時に神は聖霊によって、信仰をも与えてくださるのです。

この第一戒は、第二戒から第十戒までの土台のようなものです。なぜなら第二戒から第十戒までは、神を礼拝し、神の栄光をあらわすことを求めている戒めだからです。そうするためには、神を唯一のまことの神また私たちの神として知り、認めることが必要なのです。しかし現実の生活で、第一戒を守るためには、正しい信仰が必要となります。神がこの信仰の戦いにのために何をしてくださったのかを知ることで、つまり福音において提供されているイエス・キリストの恵みを信じ受け入れることが大切なのです。

偶像の国、日本で私たちは、先に召されました。生ける唯一の神様をイエス・キリストの福音によって証ししましょう。

「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」(ローマの信徒への手紙3章23～24節)

(羽野浩雪)

※十戒の御言葉のテキスト研究をいただきましたので、あわせて掲載させていただきます(編集部)。

6月7日 「第一戒 神を神とする」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問43、44

子どもカテキズム

問43 第一戒は何ですか。

答 「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」、です。

問44 第一戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちの真の神さまだけを心から礼拝しなければならない、ということです。

これがもっとも大切な戒めです。

ですから、私たちは喜んで礼拝をささげます。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問45, 46, 47

十戒の先頭にある、最も基本的、かつ最も重要な戒めである。第一戒は、聖書の神のみが唯一の神であること、他に神はいないこと、私たちが神として崇め、礼拝する対象は、この唯一の神様以外に存在しないことを明言している。

この排他性、聖書の神の絶対化は、非寛容として捉えられるべきではなく、私たちに与えられた祝福である。日本における土着の神は多神教的神々である。そして神が唯一でないとうなるのかというと、交通安全の神や、学問の神など、色々な神が乱立することとなり、実質的にその神々は、それぞれが受け持つ狭い領域の中でしか神としての力を発揮できないこととなる。よってそこにいるのは、私たちの人生のほんの一側面にしか影響を与えられない小さな神、弱い神ということになる。そのような神の乱立の中では、私たちがどの神を本当に信じ、どの神様にこそ感謝と礼拝をささげなければならないのか全く不明確になってしまい、神が下す災いへの恐怖心から、絶えず無数の神々に対する挨拶回りを続けていかなければならない、というようにさえなってしまうかねない。さらにその際に礼拝を捧げる神々が、聖書が

語るように、神とは名ばかりの単なる偶像でしかないのであるならば、そこに生じる不利益と倒錯は、本当に恐ろしいものとなる。

しかし、唯一なるひとりの神がいらっしゃることによって、私たちの人生や、この世界は一貫性と統一を獲得する。世界と私たちの人生は、ひとりの神によって、一貫し統一された目的に向かって導かれているのである。その様な全てを支配する力を有する神こそが、信頼と礼拝に値する。この神こそ、私たちの真心からの礼拝を受ける価値のある神様であり、この唯一の神を崇め、この神を礼拝するときに初めて、私たちは自分を、まことの神に向き合い、その神に守られている自分として認め、心からの安心を得ることができるのである。

また私たちは日頃、色々な事物に大きく影響されやすいが、しかし唯一絶対的な存在である神を心に銘記することで、自分や、他の人間や、自分の思いなし計画や、あるいは私たちの関心を強く引き付けるお金や名誉など、神でないものを神格化してしまうことから、自由になれる。

(吉岡契典)

6月7日

「第一戒 神を神とする」

説教展開例

テキスト マタイによる福音書 4章1～11節
カテキズム 子どもカテキズム 問43、44

〔単元のねらい〕

今回から四週にわたって、十戒の第一戒から第四戒までが、主題として扱われる。主イエスはこれらを「神である主を愛すること」と要約なさった。今回と次回の単元は「神をあがめる」という目標において共通するが、これは律法の第三効用（聖化の規範）が目指すところと同じである。第一戒が聖化の規範として機能するには、十戒序文に表明された神の恵みの業が前提として信徒に受け留められなければならない。それを、荒野の主イエスにならいたい。

「わたしの神はだれひとりの主」

今月、お誕生日のひと、いますか。……そう、おめでとう。あなたは、いくつになりましたか。……そうですか、満7才ですか。では、せっかくだからです、7年前のあなたの思い出を、聞かせてくださいよ。……えっ、憶えてないって。そうですよね。生まれたばかりの自分のことをはっきり憶えているひとなんて、ひとりもないんです。……そうわかっているのに、なんで聞いたのかって。そのことが、とっても大切だからです。生まれたばかりの自分は、いったいどんな様子だったのか。それを知ることは、大人になっても大切なことなんです。

生まれたばかりの赤ちゃんは、息をし始めます。それがあの、大きな、力強い泣き声です。その声を聞いたお母さんは、痛かったおなかのこともすっかり忘れて、「ああ、生まれてくれてよかった」と喜んだでしょう。「神さま、この子に命を与えてくださってありがとうございます」と祈ったに違いありません。近くでやきもきしながら待っていたお父さんも、「おお、君はわたしの子どもだよ」と呼びかけたでしょう。「神さま、この子があなたの子どもに育ちますように」と祈ったに違いありません。生まれたばかりの赤ちゃんは目をつむっていますから、自分でお乳をさがすことも、近づくこともできません。お母さんが口もとまで近づけてくれますから、赤ちゃんはお乳があることをはじめて知るので。神さまが吸う力を授け

てくださいますから、赤ちゃんはようやくお乳を吸って、命を保つことができるのです。ご飯を食べられるようになって、からだは大人になっても、人間は神の言葉という霊の乳をいただかなければ、生きることができないのです。

どうですか、自分もそうだったと知ったら、あなたはどんな気持ちですか。……そんなの当たり前じゃん、なんて言えますか。私にはとても言えません。私に命を与え、お母さんとお父さんのところに生まれさせ、生きる力を授けて、成長させてくださったのは神さまだからです。神さまが愛してくださらなければ、私は一日も命を保つことができなかったのです。神さまと一緒にいてくださらなければ、私は今ここにはいないのです。この神さまこそ、私の主です。私の命の持ち主、私の人生のあるじです。

この方は、天と地とすべての物をお造りになる前から、神としておられました。この方は、アダムのはじめから、人間に語りかけ、ともに生きてくださる神でした。アダムが命の約束を破ったあとも、人間を追いかけて、命を守ろうとなさる神でした。アブラハムのころに、恵みを約束なされて、神を信じる人間すべてに約束を守ろうとなさる神でした。モーセのころも、その約束を果たして、モーセを通して語りかける神でした。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。」（出エジプト

20:2) あなたに命を与えて生まれさせ、生きる力を授けて成長させてくださった神が、モーセの昔だけではなく、今も生きておられて、今ここにいるあなたに語られるのです。「あなたには、わたしをおいてほかに、神があってはならない。」(出エジプト20:3)

どうですか、このみことば聞いて、あなたはどんな気持ちですか。……そんな関係ねえ！なんて言えますか。とても言えないですよ！この神さまだけが、あなたの主、命の持ち主、人生のあるじなのです。

この大切なことを、あなたもわたしも、子どものときから大人になっても、いつもいつも憶えていたいものです。でもつつい、この大切なことを忘れてしまうのです。いつのまにか、すっかりぜんぶ、忘れてしまうこともあります。なぜでしょう。人間の頭は、この大切なことを忘れるようにできているのでしょうか。そうではありません。決して頭が悪いからではないのです。忘れさせようとする者がいるのです。この大切なことを忘れさせ、人間の命を奪おうとする者のしわざです。それが、サタンです。

人間となってくださった神の御子イエスさまにも、そのサタンの試みは容赦なく襲いかかりました。イエスさまが聖霊を注がれて、洗礼を受けられたすぐあと、荒野で四十日のあいだ何も飲まず何も食わず祈られた時のことです。サタンが来て、イエスさまにささやきました。「イエスよ、神はお前を見捨てたのだ。その証拠に、お前は飢え渴いている。だから、自分で自分を養え。神の子の力で、石をパンにせよ。」「イエスさま、あなたこそ神のひとり子です。あなたを愛しておられる神は、あなたのためなら何でもなさるでしょう。神殿の屋根から飛び降りて御覧なさい。神は天使に命じてあなたをお支えになるでしょう。」「イエスよ、お前はまだ知らないだろうが、この世界はすべてわたしサタンのものなのだ。もし、わたしを礼拝するなら、全世界とその繁栄をお前に与えよう。」

神の養いを疑わせて、自分の力で生きるよう人間をいざなう。必要もないのに、神の愛を試すよう人間をそそのかす。神より偉大であると信じさせ、サタンを礼拝するよう人間を騙す。これが、試みる者のやり方でした。

サタンの三つの試みに対して、イエスさまは聖書にある神の言葉三つを、盾に取られます。「人はパンだけで生きる者ではなく、神の口から出る一つひとつの言葉で生きる」(申命記8:3)。「あなたの神である主を、試してはならない」(申命記6:16)。「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」(申命記6:13)」。人に命を与えてくださる神は、その命を体も魂もまるごと養うと約束してくださった。その約束を決して疑ってはならない。神が人を造られたのであって、人が神を造ったのではない。神がまず先に人を愛されたからこそ、人は命を保つことができる。人は神の命令に従うものであり、神に向かって命令できるものではない。人に命を与えることのできる神、どこまでも人を養うと約束してくださる神こそ、ただひとりのまことの神である。この方他に、神はない。

このようにイエスさまは、神の言葉によってサタンに勝利していただきました。それは、わたしもあなたも、みんなが「神さまをあがめる」ようになるためでした。人間が命を与えられて生まれてくるのは、「神さまをあがめる」ためなのです。赤ちゃんがお乳を授けられて養われるのは、「神さまの約束を信じて生きる」ようになるためです。子どもたちがご飯をおなかいっぱい食べて育つのは、「神さまの恵みを喜んで生きる」ようになるためです。若者たちが勉学に励んで成長するのは、「神さまを深く知って深く愛する」ようになるためです。大人たちが神の言葉・霊の乳を慕い求め続けるのは、「神さまを人生のあるじとして生き抜く」ためなのです。

さあ！ 一緒に、神さまをあがめる人になりましょう。(二宮 創)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 20章3節

あなたには、わたしをおいてほかに、神があってはならない。

〈ねらい〉

神様が「わたし一人が唯一、絶対的な真の神、わたしを礼拝しなさい」と教えておられることを知ります。

〈子ども観〉

さて、いよいよ十戒の一つひとつの戒めについて学び始めます。これからの十回の学びは、子どもたちに「神様とはこういうお方なんだよ」「神様はみんながこうすることをとっても喜ばれるんだ」、また「神様はこういうことは絶対に許されない方なんだ」という、神様のご存在と御心をていねいに教えていくプロセスと言えます。聖書の神様がわたしたちに与えてくださった「十戒」を通して、神様をより身近に感じ、神様の大きな愛に気づき、神様に喜ばれる生き方はこうなんだ！という手ごたえをつかむことができますように。

〈展開例〉

みなさん、おはよう。今日から「十戒」について学びます。礼拝でお話を聞きましたね。みんな両手を出してみて。指は何本ありますか？ そう、みんなの手の指は全部で10本ですね。神様の戒

めも10個です。おぼえやすいね。その10個のうちの1個目が第一戒です。

さあ、十戒の一番最初で、神様は何を教えてくださいませんか？「わたしをおいてほかに神があってはならない」です。みんなに聞きますよ、神様は何人いますか？ そう！ 一人、ただお一人です。この世の中に真の神様、本当の神様は聖書の神様たったお一人です。

その神様が一番喜ばれることは、何だと思えますか。それは、みんなが毎週教会に来て、心をこめて神様を礼拝することなんです。今日、こうして教会に来て礼拝をしましたよね。神様はにこにこしてみんなを見守っていてくださっています。イエス・キリストの父なる神様をこれからもみんなと一緒に礼拝しましょうね。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、聖書の神様だけがただお一人の本当の神様であること、その神様を真の神様として礼拝しなさいと教えてください。これからも喜んで神様を礼拝できますように。アーメン。

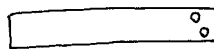
〈やってみよう〉

インスタントめいろ

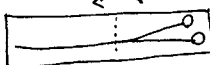
用意するもの
画用紙
パンチ
書くもの
ハサミ

① 画用紙を細長く切る

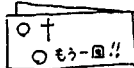
② はしこにパンチで穴を開ける



③ 道を書く



④ 半分に折り返す



うらにめいろのゴールを書く

◁ 遊び方 ▷

・絵本のように
めいろの本をたのしもう!!

・幅を広くしてパンチの穴を
3つあけても良い

魚つりとか、あやつりとか何でも
あもしろいです

〈ねらい〉

聖書の神様以外に神様はいないことを自覚する。

〈展開例〉

今日も、こうしてみんなで教会学校をして、神様のことをお勉強していますね。じゃあ、その神様ってというのは何人いるのでしょうか？

テレビやマンガにはいろいろな神様がでできますよね。ぼくが好きなマンガの神様も、死んだり、新しい神様が出てきたりします。でも、聖書には神様はほかにはいない、と書かれています。

テレビやマンガってというのは人間が作ったものだよ？ ということは、その神様は人間が作っ

た神様だよ？ それはほんとうの神様じゃないよね？ だって人間を作ったのが神様だもん。

あっちの神様とかこっちの神様とか、日本の神様とかアメリカの神様とかというのは間違いで、本当の神様はみんながいつもお祈りをして、讃美歌を歌っている神様、そのほかにはいないのですね。

〈祈り〉

神様、本当の神様以外に神様はいません。あなただけを神様として、ついていくことができますように。このお祈りをイエス様の御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

人間が作り出した偶像は決して人間を幸せにはしてくれない。偶像と真の神の違いを見抜くこと、また偶像は自分自身の思いの中にもあることに気づかせる。(2006年10月8日の小学科上級分級展開例で荒れ野での誘惑を扱ったので、ここでは第1戒に焦点をあてる)

〈展開例〉

1. 近くの神社で祭られているものは？

近くの町にはいろいろな神社があると思います。それらの神社ついて、次の点について調べてみましょう。(インターネット検索や、本などから調べた資料などを準備しておく)

- ①神社の名前
- ②何が祭られているか
- ③どんな御利益があるか
- ④祭られている理由(神社の由来)
- ⑤像などが何の材料で作られているか
- ⑥どんな祭をしているか

※人や物、動物がどういうわけで神になったのか、そこには人々のどんな願いがあったのかに注目したい。人間は自分の願いをかなえてくれる偽ものの神を作り出す。

2. 真の神様とにせものの神の違いは？

1で調べた神と、真の神様がどう違うのかを考えましょう。

- ①誰がつくったのか
- ②壊したり、焼いたりできるか
- ③自分で歩けるか
- ④私たちの願いをかなえられるか

- ⑤私たちが罪から救うことができるか

3. 話し合ってみよう

〔自由に発言できるように導いてください〕

- 壊れたら修理をしたり、火事になったら運び出さなければならないものが、私たちを助けることができるでしょうか。このような頼りにならないものを、なぜ人は拝んだりするのでしょうか。(以下は答えの例)

→・罪があるので、本当の神様のことがわからなくなった。

- ・悪いことをしてもさばくことをせず、願いをかなえてくれる神の方が都合がよい。
- ・人間には何かを拝みたいという性質がある(神に造られたため、宗教性を持っている)

- 真の神様はただお一人なのに、なぜ人間はたくさんの神々を作り出したのでしょうか。

→・たくさんの願いや欲望があるから

- ・人間が作りだす神は、人間に似て能力が限られているのでたくさんの数が必要。

- 隣りの家のお父さんのことを「この人が私のお父さんなの」と言って、お父さんを代えることはできますか。本当のお父さんはそれを聞いてどんな気持ちになると思いますか。にせものの神様を拝むことは、真の神様をどんな思いにさせると思いますか。

- 神様以上に大切なものがありますか。あなたにとって、にせものの神になってしまう可能性があるものは何ですか。

(古い、カード、ゲーム、おしゃべり、テレビ、友だち、成績、スポーツ、パソコン、人の評判など。)



〈ねらい〉

- イエスがなぜ試みられる必要があったかを理解する。
- 神を神としてあがめることを妨げようとする悪魔の誘惑をどのように退けるべきかイエスの模範から学ぶ。

〈展開例〉

質問1

イエスは何のために荒野に行かれたのか。

質問2

第一の試みで、悪魔は何と言って誘惑したか。イエスはそれに対して何と言って退けられたか。

質問3

第二の試みで、悪魔は何と言って誘惑したか。イエスはそれに対して何と言って退けられたか。

質問4

第三の試みで、悪魔は何と言って誘惑したか。イエスはそれに対して何と言って退けられたか。

質問5

イエスは何のためにこうした誘惑を受けられたと思うか。

まとめ

イエスは、福音の宣教を始められる前に聖霊によって導かれて荒野に行き、そこで40日間の断食の後、悪魔に試みを受けた。

第一の試みにおいて、悪魔は全能の力を父の神同様に持つイエスにその力を自分の空腹を満たすために使うように唆すが、イエスは、申命記の言葉を引いて、その力は、自分勝手に使うものではなく、あくまでも父なる神の御心に沿った使い方

をすべきであると答える。

第二の試みにおいては、悪魔は、高所から飛び降りることによって神を試みるように唆す。しかし、イエスはこれに対しては、また申命記の言葉を引いて、神を試すことは、神を神としてあがめることをせず、自分自身を神とする所業であるとして退けられた。

第三の試みにおいて悪魔は、自分自身があたかも神であるかのように語り、イエスに自分を礼拝するよう迫る。イエスは、ここで申命記の言葉を以って、神のみを礼拝すべきであると悪魔を一喝して退ける。

イエスは、神に従うことを求められながら従うことのできなかったイスラエルや私たちの不従順を40日間という象徴的な期間担われ、どんな場合でも神を神として愛し仕えるかどうかを悪魔に試されたが、私たちとは違って、そのすべての誘惑に勝利され、救い主としての生涯を歩み出された。

私たちも主イエスにならってどんな時にも悪魔の誘惑を退けて、神を神として礼拝し従う者でありたい。

〈祈り〉

神様、私たちが幸せな生涯を歩めるように大切な第一の戒めを与えてくださってありがとうございます。私たちは、真の神であるあなた以外の人や物を神としてあがめるような愚かな行いをしがちなものですが、いつも私たちの心を探り、あなたのみを常に神としてあがめ従うことができるよう助けをお与えください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



テキスト イザヤ書 46章1～13節

「子どもカテキズム」問46は、第二戒を解説して、私たちが真の神様を忘れる時に、必ず自分のために神々を造り出すことを述べている。

〈偶像の神々と真の神様 1～4節〉

私たち日本人のほとんどは、真の神様を忘れていて、生まれた時から、真の神様を知らないで、自分のために勝手に造り出した神々に頼ることをしている。それは、神様のかたちが罪への墮落によって大変歪められた形で残存している人間ならば、当然のことである。

バビロン帝国の人々もそうであった。バビロンの人々は、「ベル」を守護神、「ネボ」をその息子の神として頼った。しかし、そのような神々に守られているとされたバビロン帝国は、やがて、真の神様によって用いられたキュロスによって滅ぼされてしまうことが予告された。その際、守護神とされた神々が全く無力であることが、人間や家畜によって担われ、運び出される様を通じてはつきり示される。

それに対して、「わたし」、つまり、真の神様は、バビロンへと連れて来られた御自身の民を生まれた時から、老いて白髪になって死ぬ時まで（残りの者がエルサレムへと帰還する時のことも含まれるであろう）、担い、背負い、救い出すと力強く宣言なさった。

このバビロンと神の民に関する預言が実現した時、バビロンの人々は、イスラエルの家、ヤコブの家の神こそが生ける真の神様であることを知ったに違いない。

〈金を注ぎだして造る偶像 5～7節〉

私たちキリスト者は、イエス様を通じて真の神様を知らされているが、真の神様を忘れてしまうことがある。バビロンに囚われの身であった神の民もそうであった。「お前たち」、つまり、神の民

は、真の神様を忘れ、神様を目に見える像で表現し、それにひれ伏すことをした。そのような神を造るのに金や銀を惜しむことはしなかった。袋の金を注ぎだして、鋳物師に造らせた。しかし、その神も、バビロンの神々同様、人間によって肩に担がれ、背負われなければならなかった。そして、人間によって据え付けられなければ、立たなかった。まして、そこから動くことはできないし、悩みの中から助けを求めても、実際に助けてくれることはなかった。

その一方で、真の神様は、昔から、御自身の民を力強い御手で導かれ、民へと恵みを注ぐことを惜しまれなかった。

〈真の神様へと立ち帰れ！ 8～13節〉

真の神様を忘れて、偶像礼拝に走っていた御自身の民に対して、御自身に今こそ立ち帰るべきことが命じられた。そして、やがて、御自身の民をバビロンの奴隷状態から力強い御手で解放へと導かれることが予告された。

真の神様を忘れないためには、神様が御自身の御計画、預言、約束の通りに実行なさったことをいつも思い起こすことである。神の民、イスラエルの人々にとって、何よりも思い起こすべきは、真の神様が、先祖たちをエジプトの奴隷状態から力強い御手で解放され、40年間、荒野で、恵みを惜しみなく注がれて、約束の土地カナンへと導かれたことである。

今日の私たちキリスト者にとって、真の神様を忘れないために必要なのは、その同じ真の神様が、私たちを罪の奴隷状態から力強い御手で解放し、神の国へと導くために、御自身の御計画、預言、約束の通りに、神様の御子にして、罪からの救い主イエス様をお送りくださって、十字架と復活の御業をなしてくださったことをいつも思い起こすことである。

（長谷川潤）

テキスト 出エジプト記 20章4～6節

第二戒は、「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否むものには、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。」です。

第二戒が求めていることは、神様がみ言葉のうちに指定されたとおりの宗教的礼拝と規定のすべてを純正完全に、受け入れ実行し保つことが求められています。また禁じられていることは、像による神礼拝、または神のみことばに指定されていないあらゆる他の方法による神礼拝です。さらに第二戒に加えられていることは、神が私たちに君臨する主権者であられること、神が私たちの所有者であられること、神がご自身への礼拝に熱心をもっておられること。(ウェストミンスター小教理問答、問50～52)

礼拝の対象である神が正しく理解されているなら、礼拝の方法などは、それほど重要ではないのではないかという人がいます。カルヴァンは「われわれの出まかせな態度を抑制して、われわれの理解を越えている神を、己れの感覚の下に従わせ、あるいは何らかの姿のもとに表現することを、あえてしようとするのを許さないためである。」と言っています。つまり、人間の罪の性質は、神礼拝においてよく現れ、自分勝手な方法を取り入れるからです。

偶像を禁ずるという点での、第一戒も第二戒も共通性がありますが、第一戒は私たちのする礼拝の対象にその中心があり、第二戒では神礼拝の手段や方法が問題とされています。偶像礼拝と言うとき、少なくとも二つの場合が考えられます。その一つは、架空の神々、偽りの神々を像や絵などで表して、まことの神のようにして礼拝すること

です。もう一つは、まことの神を、像や絵などをもって表して、それを礼拝するというものです。この点、申命記4章15～19節に具体的に禁止内容が述べられています。

このような偶像禁止の戒めは、神様が霊なるお方であることと強く結びついています。「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」(ヨハネ4:24)

「ねたむ神」は被造物(特に契約を結んだ民)に対する主権を他の偽りの神々に与えることを憎まれるということ。(イザヤ42:8)

「父の咎を子に報い、三代、四代にまでおよぼし」。この場合、罪に対する直接的なさばきと、連帯責任としてのさばきを区別して考えなければなりません。(エゼキエル18:14-20)しかしまた、人間は有機的につながっており多くの場合、父の罪は子に伝えられる。(レビ26:39、エレミヤ16:11)現代社会問題となっているどの事柄をとっても、人間の持っている責任がどんなに大きいものであるかを知らされます。

「恵み」は、旧約聖書の契約の概念と密接不可分の関係にあります。神の恵みは岩のようにゆるがないものであり、変わることはないものです。(イザヤ55:3)

「千代」は、千の複数形で、非常に長い期間を表しています。

第二戒に加えられている理由は、神が私たちの主権者であるので、礼拝の方法を定めるのは神であること。しかし、そのみ言葉に従う者には遙かに大きな祝福が約束されています。神がご自身への礼拝に熱心であるのは、ご自身が唯一の神であり、神と人との霊的な交わりを喜ばれるからです。人間の真の幸いと祝福がこの礼拝の中にあることを覚えましょう。(羽野浩雪)

※十戒の御言葉のテキスト研究をいただきましたので、あわせて掲載させていただきます(編集部)。

6月14日 「第二戒 刻んだ像の禁止」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問45、46

子どもカテキズム

問45 第二戒は何ですか。

答 「あなたはいかなる像も造ってはならない」、です。

問46 第二戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちは、真の神さまを忘れるときに、必ず、自分のために神々を造り出します。
私たちは、お守りや占いに頼ったり、自分を喜ばせるために礼拝してはいけない、
ということです。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問49, 50, 51

第二戒は、神礼拝に関する具体的な戒めである。第一戒では、私たちが神とするべき対象は誰かということについて述べられて、他の神々を対象とする礼拝が斥けられているが、第二戒では、第一戒を前提としつつ、唯一なる神様にささげる礼拝の方法についての戒めが述べられている。ここでの問題は、像を用いての神礼拝ということである。

人間はこの点についての大きな弱さを持っている。それは手で触れることができ、目に見えるものをしか信じ難いとする弱さである。確かに多くの宗教は、神を表現するために多大な力を傾けて立派な像を作り上げる。それは礼拝をする際に、何らかの形のあるものに対して礼拝をささげる方が、礼拝行為に集中しやすく、礼拝を行っているという実感と確信についても、それをより強く得ることができるからなのかもしれない。イスラエルの民が、モーセの神との接見中に不安に駆られ、金の子牛を作ってそれを神として見立てて礼拝をささげたのも、その弱さの端的な現れである。

しかしそのように、神礼拝のために、神の本質に全くそぐわない、単なるモノに過ぎない像をこしらえるということは、子どもカテキズムも語っているように、人間による自己本位的な礼拝行為

となる。なぜなら、像を作るということは、本質的に、被造物を超越しておられ、それゆえに不可視で自由な方である神を、見えるモノの中に押し込み、人間が神をその手によって気ままに持ち運び、取り扱おうという試みなのであり、それは人間の側からの神に対する傲慢にはかならない行為だからである。私たちがたとえどんなに立派な像を作ったとしても、そこに神はおられない。神はすべての目に見える形を越えて偉大なる方だからである。

礼拝は、人間が自己の満足のためにささげる行為なのではなく、神によって定められた、神のために行われるものである。そこでは像によらずに、神様の真の霊的臨在が指し示され、神がお命じになった仕方で礼拝が行われなければならないのである。

また人間が像を作ってそれを拝む時、そこで人間は自らの価値をその像以下に貶めているのであり、それは被造物の最後に創造の冠として創造された人間それ自体の尊厳を深く傷つける倒錯でもある。その点でも像による礼拝は、神様のためにも、また人間自身にとっても忌むべきものである。

(吉岡契典)

6月14日 「第二戒 刻んだ像の禁止」 説教展開例

テキスト イザヤ書 46章1～13節
カテキズム 子どもカテキズム 問45、46

〔単元のねらい〕

前回と今回の単元に共通する「神をあがめる」という目標は、律法の第三効用（聖化の規範）の目指すところであった。第一戒は、十戒序文に表明された神の恵みを前提として、主なる神への服従を要求するものであった。第二戒は、人間に命を与えて養ってくださる神への忘恩が、ただちに偶像の捏造と崇拝に傾くという、人間の本性（神の似像）における罪を予め指摘し、「神をあがめる」仕方を正す機能を発揮する。聖霊と真理による礼拝へと導きたい。

「わたしの主はまことの神」

今月、お誕生日をお祝いしてもらったひと、いますか。……そう！うれしいね。どんなふうにお祝いしてもらったの。……そう！よかったね。いつもとはちがう、ちょっとめずらしいもの、食べさせてもらったんだね。生まれたばかりの赤ちゃんの頃のこと、お母さんが話してくれたんだね。名前をつけるのに一生懸命だったこと、お父さんも教えてくれたんだね。そしてお待ちかねの、素敵なプレゼント、もらったんだね。そのとき、あなたはどうしたの。……そう！それはすばらしい。ちゃんと「ありがとう」という気持ちを、お母さんとお父さんに、伝えることができたんだね。それは、とっても大切なことですよ。子どものときだけでなく、大人になっても大切なことです。子どもの頃なら言えたのに、大人になると恥ずかしくて言えなくなってしまうからです。

「お母さん、僕を生んでくれて本当にありがとうございます。僕の誕生日は、お母さんの出産を記念する日です。いつまでも忘れません。」「お父さん、私を育ててくれてありがとうございます。私の誕生日は、お父さんの養育に感謝する日です。これからも元気でいてください。」「神さま、本当に心からありがとうございます。あなたが命を与えてくださったこと、いつまでも決して忘れません。そして今日まで養ってくださったように、明日からもどうかお願いします。」そんなふうに、毎年のお誕生日に言うことができたなら素敵ですね。プレゼントにこめ

られた父母の愛をいただく喜びとともに、感謝の言葉にこめた子どもの愛と祈りをささげる喜びも、わたしたちの人生には、無くてはならない大切な喜びなのです。

ところが、その喜びが次第に喜びではなくなってしまうことがあります。大切だったはずの喜びが、そんなに大切ではなくなってしまうことがあるのです。無くてはならないはずの喜びが、無くてよいものになってしまうことさえあるのです。

たとえば、人生にはこんなことがあります。地震にあって家がつぶれてしまったり、病気になって仕事ができなくなってしまったり、今日食べるものもなくなって希望が見えなくなってしまったり。そんな時、人はつぶやくのです。「神さまは僕を見捨てたんだ。こんな惨めな命なんか、もういらぬ。お母さんはなぜ僕を生んだんだ。」「神さまは私を嫌いになったのよ。こんな辛い生活なんて、もういやよ。お父さんなんか私の気持ち分かってこないわ。」

あるいは、人生にはこんなこともあります。進学も就職も思い通りになり、結婚も家庭も願い通りになって、これから先もすべてうまくいくと思える。そんな時、人はささやくのです。「僕のこの命は、僕のものなんだ。僕がどう生きようと、父さんには関係ない。自分の命は自分で守るさ。神さまなんか、もういらぬよ。」「私のこの生活

は、これまで私が努力してきた結果なの。私の生き方に、母さんは口出ししないでちょうだい。私のものは私のために使う。神に捧げるものなんて、何も無いわ。」

この二つの人生は、あたかも負け組と勝ち組のような、ちょうどモーセの頃のイスラエルとエジプトのような、全く違う人生に見えますが、実は似たところがあるのです。それは「忘恩」です。ご恩を忘れているところです。神さまから、父と母からもらった恵みを忘れてしまったところです。

そうなった途端、人は不安になるものです。神さまが命を与えてくださったことを忘れた瞬間に、自分の命が尊いものではなくなってしまうのです。神さまが養ってくださることへの感謝を忘れた瞬間に、自分の人生が虚ろなものに変わってしまうのです。その不安を隠すために、その不安から逃れるために、人は罪を犯すようになります。それは、自分で神を造り出す罪、自分を神と思込む罪です。

子どもに命を与えるのは自分だと思い込んだ母親は、不安になって安産の神さまを拝んだり、有名なお医者様を神さまにしたりするのです。家族をどこまでも養うのが自分の役割だと思い定めた父親は、安心して商売繁盛・家内安全の神さまを拝んだり、自分を不死身の超人と違ってガムシャラに働いたりするのです。

神さまから嫌われて見捨てられたと思い込んだ人が、自分も神を嫌うようになって、自分の命や暮らしを捨ててしまうことがあるのです。人生のあるじは神でなく自分だと思い定めた人が、自分の欲望を神として生きるようになり、他の誰かの命や暮らしを粗末に扱うようになることもあるのです。

私たちが命を授かることも、養いを受けることも、ただひとりのまことの神の恵みなのに、そのひとつの恵みをバラバラにして、あれこれの神々に分けてしまうこと、これこそ偶像崇拜の罪です。

私たちが味わう苦難も栄誉も、人生のあるじでいてくださる神のお計らいによるものなのに、その確かなみこころを疑って、自分の気まぐれな心を信じること、これも偶像崇拜の罪です。神のかたちに似せて造られた人間が陥った罪の本質、それが偶像崇拜なのです。

罪ある人間に向けて、私たちの神である主は預言者モーセを通して、語り始められました。「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神、熱情の神である。」(出エジプト20:4-5)

預言者イザヤを通して語り続けられます。「わたしに聞け。あなたたちは生まれた時から背負われ、胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで背負って行こう。わたしがあなたたちを造ったのだ。わたしが担い、背負い、救い出すのだ。(それなのに!) お前たちは、わたしを誰に似せようとし、誰と等しくしようとするのか。職人を雇って神を造らせ、これにひれ伏して拝む。助けを求めて叫んでも答えず、悩みから救ってくれない(のに!)。背く者よ、反省せよ。思い起こせ、初めからのことを。わたしは主、あなたの神、他にはいない。わたしの計らいは必ず成り、わたしは望むことをすべて成し遂げる。わたしは遅れることなく救いをもたらす。」(イザヤ46章より)

最後に、主イエス・キリストが語られました。「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理(聖霊と御言葉)をもって礼拝しなければならない。」(ヨハネ4:23-24)

偶像崇拜を遠ざけ、神の言と霊によって主をあがめる人生を、共に歩んでゆきましょう。

(二宮 創)

[今週の暗唱聖句]

出エジプト記 20章4節前半、5節前半

あなたはいかなる像も造ってはならない。

それらにひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。

〈ねらい〉

聖書の神様はただお一人の神様です。異なる神様を信じて拝んだり、自分たちで作った物を神様にして拝んだりしてはならないことを知ります。

〈子ども観〉

第二戒は、子どもたちにとって身近で大切な問題をふくんでいます。なぜなら、ここ日本はクリスチャンにとっては異教の地。八百万の神とその神を拝む人々、文化に囲まれた中で生活している……というのが子どもたちをとりまく環境です。幼稚園のお友だちの通園バッグにはお守りがぶらさがっていて、保育園のお散歩先は神社だったりします。保育士さんが読み聞かせてくれる日本の昔話にはお地蔵さんやお寺の和尚さんが登場します。昔話の面白さに引き込まれることもあるでしょう。しかし、ここで厳しく一線を引かなければなりません。いろいろな形で子どもたちの中に、真の神ではない神が入り込むことを、断固として排除しなければなりません。

礼拝では聖書とカテキズムから第二戒についてお話されますから、分級では子どもたちの生活の中から具体的な事例を取り上げてやりとりをしながら進めてみましょう。

そのときに、「神社にパンパンって手を合わせているお友だちは悪い子だ!」「お守りなんかぶ

らさげてだめだよね!」と裁く者にならないように気をつけましょう。

「それは神様が喜ばれることかな?」という視点から第二戒について子どもたちと一緒に考えてみます。「本当の神様を知らないから、自分たちで神様を作ってお願いをするんだね」と。

最後は、わたしたちもお友だちも、みんなが間違った神様を信じて神様を悲しませないように導いてくださいとお祈りしましょう。

〈展開例〉

最初に第二戒を唱えます。その後、子どもたちの生活の中の異教の神様について聞きましょう。

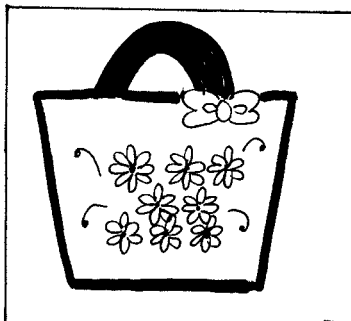
例) みんなのおうちの近くに神社があるよね。そこで、パンパンって手を合わせている人を見たことある? 神様がいると思って何かお願いしているんだね。そこには本当に神様はいるのかなあ? でも、何だか、みんながパンパンってやっていると、「わたしもやってみようかな」と思ったことないですか? など。

〈お祈り〉

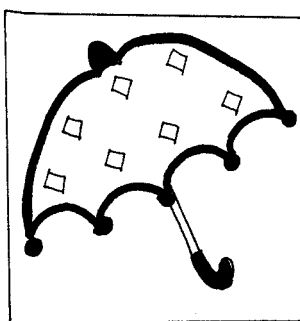
天の父なる神さま、わたしたちが本当の神様ではないものを信じたりしないように守ってください。目には見えない本当の神様のことがもっとよくわかるように教えてください。主の御名によって祈ります。アーメン。

〈やってみよう〉

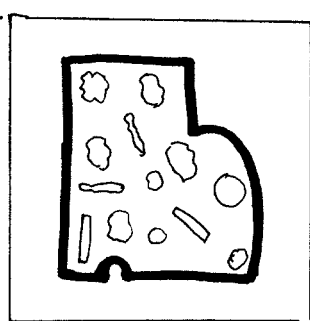
花の日、色紙カード



カゴの台紙にクラフトパンチで抜いた花や葉をはります。



傘の台紙に色紙ハサミで切った折り紙をはります。



長ぐつ台紙に折り紙をちぎってはりました。

〈ねらい〉

目に見える偶像礼拝をするのではなく、唯一まことの神様を信じる。

〈展開例〉

今日は、何月何日ですか？ 6月は梅雨っていう、毎日雨がよく降る季節だね。今日もこうしてみんなが教会に行く途中、雨が降っていたかもしれないね。雨が降ったら、傘をささないといけないし、お外で遊べなくなっちゃうね。

だけど、この雨も神様がみんなにくれたとても大切なものなのだよ。雨が降らなかったら、今日みんなが食べてきたご飯もできないし、ご飯が食べられなかったらお腹もへって、丈夫な体が作れないし、元気に過ごせなくなっちゃうね。

今までに「てるてるぼうず」を作ったことがあるかな？ てるてるぼうずは、雨が降らないようにと願って作りたくなるよね。でも、てるてるぼうずは人間が作ったもので、その作ったものをお願いしているのだよね。人間が自分勝手に作った

ものは、本当に神様かな？

今日は、十戒の第二の戒めに書かれている「あなたは、いかなる像も造ってはならない」ということをみんなで考えたいと思います。わたしたちは弱くて一人では生きていけません。弱いから、何か目に見えるモノを礼拝したほうが礼拝しやすいと思ってしまっているのです。昔イスラエルの人たちも、金でできた子牛の像を作って、それを神様のように拝んだのです。

けれども、どんなに立派なカッコいいモノや像を作ったとしても、それは本当の神様ではありません。神様は人間が勝手に神様を作ることを嫌われます。わたしたちは神様をわたしたちの手で作れません。目に見えない唯一の神様を信じて礼拝してほしいと願っておられるのです。

〈お祈り〉

神様、わたしたちはとても弱いです。目に見えないただお一人の神様に目を向けさせてください。これからも神様を信じる強い心をください。



〈ねらい〉

第一戒との違いは何か。なぜ人は像を拝みたがるのか、それがなぜいけないのかを考える。

〈展開例〉

1. 第1戒と第二戒はどう違うの？

第一戒「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」

第二戒「あなたはいかなる像も造ってはならない」

まず第一戒と第二戒を書いたものを見せ、第一戒と第二戒がどう違うかを考えさせて意見を言ってもらおう。

第一戒は何を礼拝すべきかを教え、第二戒はどのように礼拝すべきかを教えています。第二戒は、礼拝する対象が真の神様であっても、像や絵を用いて礼拝してはいけないことを教えています。

2. なぜ、人は像を拝みたくなるのでしょうか

礼拝する対象が目に見えない神様では不安なので、目に見える、手でさわれる、確かなしるしがほしいのです。

神様から離れてしまった人間は、何を礼拝すべきかがわからなくなっただけでなく、どう礼拝すべきなのかも、わからなくなっていました。自分の手におさまる神様のほうが自分の好きなように礼拝できるので、都合がよくて便利なのです。

3. 像を造ることはなぜいけないの？

この世界を造られた神様を小さな像の中に入れることはできません。それは無限なる神様を限ら

れた場所に閉じ込めてしまうことです。

また、人間が造り出した像には、造った人の思いやイメージが表れます。口語訳聖書では「あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない」とあります。像を造るのは自分の願いをかなえてくれる神を造りたいからであって、神様のためにはありません。

礼拝は神様のために捧げられるものですから、神様がお命じになった方法で礼拝しなければなりません。自分勝手な礼拝の方法を作り出してはいけないのです。

4. 正しくない礼拝の仕方はどれですか？

- () 木で造った十字架を拝む
- () 讚美歌を歌う
- () マリアさんの絵を礼拝する
- () 説教壇に向かい手をたたいて礼をする
- () 主の祈りをささげる
- () 十字架を入れたお守りに祈る
- () イエス様の絵におじぎをする
- () 礼拝で説教を聞く
- () 聖書の御言葉を読んで考える

5. 新聞の見出しを切り抜いて第二戒を作ろう

「あなたはいかなる像も造ってはならない」のことばになるように新聞の見出し（記事でもよい）を切り取って紙に貼りましょう。漢字がなければひらがなでもよい。（二チームに分かれて行う）



〈ねらい〉

- 人間が作る刻んだ像とは、どのようなものを指しているか理解する。
- 真の神と偶像の違いは何かを知り、真の神のみを礼拝することの大切さを理解する。

〈展開例〉

質問1

バビロンの偶像とそれを拝む者らは、どのような状態になったと書いてあるか。

質問2

それに対して真の神は、イスラエルに対しどのようにされてきたと書いてあるか。

質問3

刻んだ像である偶像には、何ができないと書いてあるか。

質問4

それに対して真の神は、どのようなことをなさんと書いてあるか。

質問5

あなたは、真の神のみを信じているだろうか。あなたの心の中に神の代わりに場所を占める偶像はないだろうか。

まとめ

バビロンには、いくつもの偶像があったが、それらは単なる人間が作ったものにすぎないので、倒されたら自分で起き上がることはできない。こ

のように自分を救い出すことさえできないので、それらを信じる者たちを救い出すことなどできようはずもない。

それに対して真の神である主は、人間を創り、その力強い御腕でイスラエルを担い、救い出してくださいました。真の神は、人間が作った物などではなく、人間を創った方なので、御自分の計画を御自分ですべて成し遂げ、救いの御業を成し遂げられる。

私たちは、ともすれば真の神ならぬ、自分自身や他の人間、他の事物を神としてあがめ、自分の心の王座に据えるような事をしてしまうが、それがいかに愚かなことであるかをしっかりと学びたい。人間を創られた方のみが人間を真に知り、助け、導くことができる。それ以外のものは、たとえ自分自身であろうとも助け導く力は持たない。悪魔の誘惑に惑わされずに、偶像を退け、真の神のみを信じ、従う者でありたい。

〈祈り〉

神様、私たちの住む社会、家、私たちの心には真の神ではない、私たちが作り出した偶像がたくさんあります。そうした物は、私たちを助ける力など持ちません。私たちの心を探り、偶像を退け、真の神のみを信じ、従う力をお与えください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



1. 「御名」に担われて生きる

十戒の第三戒は、神の御名を正しく唱え呼ぶことへの招きです。教会もキリスト者も、神の御名によって生かされ、支えられ、包まれて生きる地上の旅人・巡礼です。御名を失えば人生そのものを失い、御名によって生き、御名の中に人生を築けば、生きることそれ自身が、神の国の経験となります。

ここで主イエスは、神の御名、キリストの御名が、幸いな生への招きであると同時に、祝福を失い恵みから転落する試金石でもあると告げておられます。キリストの御名の中に、どのような祈りと信仰をもって生きているか。その問いが、私たちに迫ってきます。御名の内に生きる平安と感謝を知る者であればあるほど、主の御名を担って(いや御名に担われて)歩む信仰と生活の有り様が、深く鋭い問いかけを受けていると言わねばなりません。

「主よ、主よ」と叫ぶ言葉だけではだめだ、行いの伴う信仰でなければ。この部分を、そのように読むことがあります。言葉だけの信仰で終わってはならない。それは事実その通りです。けれど主イエスは、信仰と実践、という言い古された教えを語っているのではないのです。この段落は、すぐ前の「偽預言者を警戒せよ」という戒めを受けています。偽預言者らは、行いのない信仰者ではなく、むしろ多くの行いで自分の信仰を飾る人々でした。預言し、悪霊を追い出し、さまざまな奇跡を行って人を驚かせたのです。しかも、それらの著しい奇跡を「主の名」を用いて行ったというのです。

2. 自分本位の熱望から離れて

神の国に生きる生活は、「天の父の御心」に学ぶ生活です。主の名を用いて、何かの業績を上げることでもなければ、道徳や倫理の実践で、人の尊敬を勝ち得ることでありません。徹頭徹尾それは天の父の御心を学び、御心に生きることであ

り、御心の成るようにと祈り求める生活です。この大切な中心点が、どうして見失われるのでしょうか。やはり、私たちが父の御心という大切な宝への感謝と尊敬の心を失ってしまうからではないでしょうか。父の御心よりも、自分の意に沿うことを重視しているのです。御心に学ぶ前に、自分の意思決定を大切にするのです。こうした自分中心の熱望に突き動かされる生活は、神の国に生きることとは関係がありません。

3. キリストとその愛 —御名に生きる唯一の道

このような過ちに陥る原因は何でしょう。主の御名という、日々神様から与えられる「贈り物」を、何か自分で自由に処理してよい「所有物」のように誤解しているからではないでしょうか。主の名を、自分の所有のように考えること。それこそまさに偶像礼拝に等しい罪であり、神よりも自分を優先する高慢の罪にほかなりません。外見上は神を重んじているかに見えながら、その実、神の名を「わたくし」しているのです。このように見れば、「主よ、主よ」と唱えながら、自分の宗教的な満足を追い求める過ちは、私たちすべてのキリスト者が聞かねばならない警告だと言わねばなりません。

「天の父の御心を行う者」。それがキリスト者です。父の御心がどこにあるかを、信仰の耳を開いて聴き続ける。そのような歩みへとキリストは私たちを招かれます。それは、最も具体的にいえば、主イエスのもとに留まり、キリストというぶどうの木につながることです。それはまた、パウロの言葉に目を転じれば、「たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やまかしいシンバル」という悔い改めの道です(コリント I、13章1節)。キリストとその愛につながる信仰と行為。主の名を空しく唱えない唯一の道が、ここに開けるといふ約束を、私たちは受けているのです。(小野静雄)

子どもカテキズム

問47 第三戒は何ですか。

答 「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」、です。

問48 第三戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 神さまのお名前や教会の教え、そのほか、神さまにかかわるものを、
ふざけて用いたり、自分勝手に変えて用いてはいけない、ということです。
愛の神さまは優しい神さまですが、これらを厳しく裁かれます。
ですから、私たちは主の御名を正しくほめたたえます。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問53, 54, 55

第三戒によって要求されていることは、神の御名、称号、属性、規定、御言葉なども含めて、神のことに關する言葉の一切をきよく用いることであり、第三戒によって禁じられていることは、御言葉や神の名を冗談で使ってしまうこと、御言葉への敬意を払わず、それによって神御自身まで侮ってしまうことである。しばしば神に対する呼称などが、揶揄されて用いられたりすることがあるが、たとえその言葉を用いつつ、私たちが人の目をくらすことはできたとしても、しかし事柄の一切を知り給う神の前には、その様な罪も隠れるところがなく、神の戒めを守らない者に、神は必ず聖なる裁きを加えられるのだということが、第三戒には明記されている。

しかしこの戒めは、主の御名を口にすることを単純に禁じている戒めとして受け取られてしまっ
てはならない。かつてユダヤ人はこの戒めの意味を、主の御名を口にすることへの禁止条項として極端に受け取ってしまい、主の御名を発音することを避けてきた結果、ついには主という言語の発音が何であったのかが不明となり、その語の発音それ自体を失ってしまったという歴史を経た。し

かしそのような主の御名に対する姿勢は、適切なものではなかったと言える。

「御名をみだりに唱えてはならない」というこの戒めは、一見消極的な戒めであるように見受けられるが、しかし第三戒が積極的に求めていることは、むしろ御名を清く用いつつ、御名を真心から賛美すべきであるということである。よって最もよく第三戒を守る方法は、黙って御名を呼ばないことでは決してなく、逆に積極的に御名を讃美し、御名を崇め、神様を喜び、祝うことである。そしてこのことこそが私たちの力であり、私にとって必要なことなのである。

ある人の名前を思い浮かべるや否や、その人の顔や言葉が身近なものとして自分に迫ってくるように、旧約聖書においては、名前と、その名前と呼ばれる者の存在とは、一体的に捉えられていた。よって私たちが、主の御名を呼ぶ際に、そこに既に主なる神御自身の存在が確かに力強く働くのである。この主の御名を崇めることによる神との結びつきがより強くされ、神とわたしたちとの関係が益々近くされることを、第三戒は求めているのである。
(吉岡契典)

テキスト マタイによる福音書 7章21～23節
 カテキズム 子どもカテキズム 問47、48

〔単元のねらい〕

第一戒は、序文に表明された神の恵みを前提として、主なる神への服従を要求するものであった。第二戒は、人に命を与え養う神への忘恩が偶像の捏造と崇拝へと傾く、人間の本性における罪を指摘するものであった。第三戒を扱う今回は、神の御名を「となえる」ことが「あがめる」こと「いのる」ことへと方向付けられるように教え導く単元である。イスラエルの神「主」の御名がイエス様に冠せられる宗教は、第三戒に従って主の日の礼拝に備えてゆく。

「御名をとまえ、あがめよ」

この春、小学校に入学したひと、いるかな？ ……そう！ おめでとう。あなたは1年なに組？ ……そうですか！ 入学式が終わって、初めてその教室に入ったときのこと、憶えてる？ ……そうだったの！ 担任の先生はだれ？ ……へえ！ 先生のお名前「にのみやはじめ」っていうんだ。初めて会ったとき、どんな感じだった？ ……そうなんだ！ 黒板に名前を書いて、自分の名前がなぜ「はじめ」かって、教えてくれたんだね。そのとき、先生どんな感じだった？ ……へえ！ 笑った顔が、あんぱんマンに似てたから、「あんぱんマン」ってニックネームにしようかと思ったの。それはおもしろいね。えっ？ なになに？ ……他のだれかが別のニックネームつけたの。二ノ宮金次郎からとって「きんちゃん」かあ。先生よろこんだんじゃない！？

名前って不思議だよな。黒板にいきなり「にのみやはじめ」って書かれたときは、チョークの音を聞きながら、教室がしーんとなったんだけど、その人の声を聞いたり、顔を見たりしているうちに、だんだんおもしろくなって「あんぱんマン」ってニックネームで呼びたくなったり、どんどん親しくなって「きんちゃん」って呼びたくなったり。しばらくすると、その人がいなくても、「にのみやはじめ」っていう名前を見たり聞いたりするだけで、「あんぱんマン」に似た顔が浮かんでくるし、「きんちゃん」と呼ばれて照れてる姿を思い出し

たり。机の上に名前が書いてあるだけで、そこにその人がいるみたいに感じたり、そこにはいないのに名前を呼んでみると、その人の声が聞こえてくるように感じたり。一人ずつ、ひとつの名前があるって、とっても不思議で、なんだか素敵だよな。

それじゃあね！ 神さまにも、お名前があること、知ってる？ ……なになに？ 「ただひとりのほんとうの神さま」、それから？ 「天と地とすべてのものをお造りになった神さま」、他には？ 「宇宙よりも大きくて、いつまでも変わらない霊の神さま」。すばらしい信仰だねえ。みんなが告白してくれたとおり、神さまはそのような方です。でもねえ、お名前にしてはちょっと長すぎませんか？ ……おうおう！ 「アブラハム・イサク・ヤコブの神さま」「イスラエルの神さま」「イエス・キリストの父なる神さま」。いっぱい出てきたねえ。そのとおり、聖書の中で神さまはいろいろな呼ばれ方をされています。でも、これらはニックネーム（通称）であって、神さまの本当のお名前（本名）ではありません。

神さまにご本名を、たずねた人がいました。そう！ モーセさんです。そのとき、神さまはこうお答えになりました。「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である『主』……これこそ、どこしえにわたしの名。これこそ、世々

にわたしの呼び名。」(出エジプト3:15) ……「主(ヤハウエ=わたしはある)」というお名前こそ、神さまのご本名(神の御名)なのです。この御名をただ思い起こすだけで、神さまの声が聞こえてくるのです。「わたしは主ヤハウエ、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。」(出エジプト20:2) ただひとりの本当の神さまは、あなたをお造りになった主なのです。あなたに命を与えてくださった神さまは、あなたの命をすべての危険や災難から救い出し、いつまでも変わることなく養ってくださる主なのです。

あなたの「主(ヤハウエ)」である神さまは、ご自分のそのお名前について、ひとつの戒めを語られました。「あなたの神、主(ヤハウエ)の名をみだりに唱えてはならない。」(出エジプト20:7) 神の御名を「唱える」とは、神さまを主というご本名で「呼ぶ」ことです。呼ぶだけでなく、神さまをわたしの主と「告白する」ことです。そして告白したとおりに、主に従う僕はしためとして「生きる」ことです。

ところで、「みだりに」唱えるとは、どういうことでしょうか? ……ちょっと、さっきの学校の先生のこと、思い出してみてください。そう「にのみやはじめ」っていうお名前でしたね。その人のことを、誰かがこんなふうに言ったとしましょう。「俺のクラスに、にのみやおわり、って奴がいるんだけど、そいつのこと、ばいきんマン、って呼んでるんだ。ちょっとウザいからね。金太郎って呼ぶこともあるぜ。金太郎のくせに、弱虫なんだ。あれれ? えっとそいつ? 何だったっけ? 担任だったっけ?」 ……どうですか? みだりに唱えること、少し伝わったかな? ……ある人の本名をわざと間違えて呼んだり、その人が居ないところでその人を全然ちがう人のように教えたり、みんなの前でその人に仇名をつけてあからさまに笑いやにしたり、その人の本当の姿を認めなかったり。 ……誰かの名前をみだりに唱えるって、だいたい

そんなようなことです。

あなたの主である神さまは、あなたが主の御名をわざと間違えたり、全然違う方のように教えたり、仇名をつけて笑いやにしたり、神さまと認めなかったりすること、すなわち「御名をみだりに唱えること」を、あなたの罪として、決してお赦しになりません。

神さまの御ひとり子イエスさまも、「御名をみだりに唱える」ことを戒めて、言われました。「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。」(マタイ7:21)

では、どうすれば、御名をみだりに唱える罪を防ぐことができるでしょう。どうすれば、あなたもわたしも、主の名を「みだりに」ではなく「ふさわしく」唱えることができるでしょう。どうすれば、それが御父のみこころを行うことになるのでしょうか。イエスさまは、素晴らしいアドバイスを、最高のお手本を、わたしたちに示してくださいました。それは「主のいのり」です。「天にまします、われらの父よ。願わくは御名をあがめさせたまえ。」

神の御名を「ふさわしく」唱えるとは、神を「あがめるために」、神に「いのるために」こそ御名を唱えるということです。神さまが自らお示しになったご本名「主ヤハウエ」を、神さまの御名としてお呼びすることです。イエスさまの御父を、わたしたちの神さまとお呼びして、あがめることです。わたしもあなたも造ってくださった父なる神さまを「主」とお呼びして、感謝の祈りをささげることです。ひとりひとりの命をあらゆる危険や災難から救い出し、わたしたちの心と体と魂を変わることなく養い続けてくださる神の御ひとり子イエスさま、十字架と復活のキリスト、この方をも「主」とお呼びして、この方を人生のあるじとして従ってゆくこと。これこそ、御名をあがめ、御名によって祈り、御名をふさわしく唱えることなのです。 (二宮 創)

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記20章7節前半

あなたの神、主の名をみだりにとなえてはならない。

〈ねらい〉

神様のお名前をふざけたり、いい加減に呼んだりしてはいけない。畏れと尊敬と感謝の気持ちをこめて呼ぶことを知ります。

〈子ども観〉

幼稚科の子どもたちは一人でお祈りできるでしょうか。献金感謝のお祈りを一人でできる子はあまりいないようです。人前で祈ることは、大人でも緊張します。5才児くらいになると、主の祈りをほとんど暗唱できる子もいます。食前には「神様、おいしいごはんを感謝していただきます。アーメン」と祈れる子もいます。教会に集う子どもたちの小さな口から「神様」と呼びかける声を聞くことは、教師にとって喜びです。

子どもたちが神様のお名前を呼ぶのは、お祈りのときがほとんどでしょう。目には見えないけれど、わたしたちが「神様」と呼びかけるとき、父なる神様が、「はい、なんですか」といつでも向き合って逐一耳を傾けてくださいます。とてもふざけたり、いい加減に呼ぶことはできないということを子どもたちもわかるはずです。

自分の名前をおかしな言い方で呼ばれたら、いじめられているみたいで、悲しくなります。変なあだ名をつけられて嫌な思いをしたことのある子は、「名前って大切。名前はわたし自身のことだから」と感じているでしょう。第三戒では、わた

したちを心から愛してくださる神様のお名前を大切に感謝してお呼びすることを伝えます。

〈展開例〉

みなさん、今日は礼拝で十戒の第三戒についてお話を聞きましたね。神様の名前のお話でした。

先生の一番目の子どもの名前は「はな」って言います。保育園のとき「はなくそ、はなくそ」って言われて泣いちゃったことがありました。先生の二番目の子どもの名前は「かんすけ」って言います。この子は「かんづめ、かんづめ」って言われたことがありました。「もう、やめてよ!」と怒ってしていました。自分の名前を変なふうには呼ばれたら誰だって嫌だし、腹がたちます。本当に仲のいいお友達ならそんなこと言わない。いつまでもそんなふうに言うなんて、ぼくのこど嫌いなのかなと思ってしまいます。

神様も同じです。「変な呼び方でわたしを呼んではいけません」と教えておられます。わたしたちにとって神様は、「神様」って呼べばすぐに応えてくださる方、そしてとっても大切なうれしい方です。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、わたしたちをいつも守ってくださる神様のことが大好きです。だから、神様のお名前も大切にしたいです。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

〈やってみよう〉

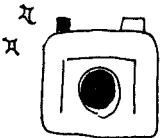
インスタントカメラ

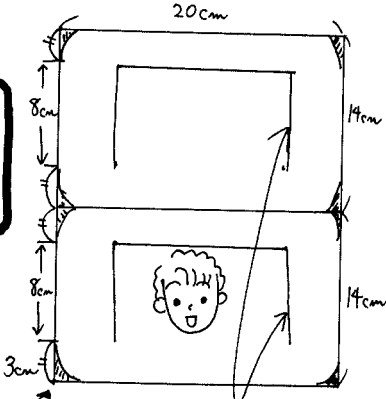
用意するもの

画用紙

ペン

カンター(準備の時)





このサイズで
作れば写真が
はまります。

カンターで切り込む
* コーナーは大きく切る

- ① 半分に折る
- ② うらの切った部分を前に出す
- ③ レンズを書きまわす
- ④ 両手で持って、ひろくと
糸があらわれまわす。

～父の日プレゼントとして。
あ父さんありがとうと絵を書いて!～

〈ねらい〉

わたしたちの唯一の神様のお名前を心を込めてほめたたえることの大切さを知る。

〈展開例〉

みんなは、学校や家の近くに友だちがどれくらいいるかな？

うんうん、そうだね。今隣に座っている〇〇ちゃんに〇〇くんも大切な友だちだね。

では、友だちのことをどうやって呼んでいるかな？ “ちゃん”や“くん”を付けて呼んで見たり、ときには呼び捨てで呼んだりもするね。みんなは、どうやって呼ばれたら嬉しいかな？

わたしは、みんなぐらいの年齢のとき、名前の前に“かわいい”とか付けられたらとても嬉しかったな。思わず「はい」って元気に返事しなくなっちゃうからね。逆にわたしの「永子^{えいこ}」っていう名前は、お父さんお母さんが一生懸命いろいろなことを考えて付けてくれたのに、ニュースで悪いことをした人をよく「容疑者A子さん」と言われるから、同じ「えいこ」って言葉にドキッて変な気持ちになって悲しくなっちゃうことがあったよ。名前は自分にとってとても大切なんだよね。自分の名前を、繰り返し繰り返し呼ばれたりしたら嫌

になることもあるよね。

そう、神様も同じようなことを言っておられるのだよ。

十戒の第三の戒めには、「主の名をみだりに唱えてはならない」と書いてあるんだ。神様の名前を大切にしてくださいって、神様はおっしゃっています。神様の名前を人間の都合のいいように使ってほしいたり、バカにして呼んだりすることを、神様は嫌われ悲しまれます。

神様は、わたしたちが、神様を賛美して、名前をお呼びすることを喜ばれます。わたしたちをいつも愛してくださる神様が望んでおられるように、心から神様の御名を喜び賛美しましょうね。

〈みんなで歌おう〉

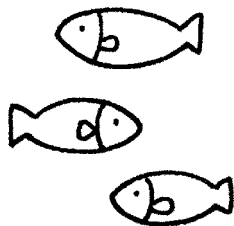
♪「さあ、さんびしよう」♪

いのちのことば社

『プレイズ・ワールド（ジャンプ）』11番

〈お祈り〉

神様、あなたのお名前を賛美します。わたしたちはずるくて、いつもあなたに自分勝手をお願いばかりしてしまいます。神様を心から喜んで賛美できるように助けてください。



〈ねらい〉

御名をみだりに唱えるとはどういうことなのか。御名を正しく唱えることへと導く。

〈展開例〉**1. 「名」について考える**

○名がつく言葉を調べよう。

「名高い」	名誉あること
「名を売る」	有名になる
「名をあげる」	有名になる
「名が立つ」	評判になる
「名が通る」	世間によく知られる
「名に恥じない」	評価を傷つけることがない
「名を汚す」	名誉を傷つけ評判を落とす
「名を残す」	名声を後世に伝える
「名に傷がつく」	よくない評判が立つ
「名が泣く」	その名に値しない

○ここからわかることは何かな？

名とはその人の名前だけでなく、その人の名誉や評判などもあらわします。

2. 御名をみだりにとなえるとは？

○みだりにとは？

むやみにとか、軽々しく、自分勝手にという意味です。

○「御名をみだりに唱えてはならない」

御名をみだりに唱えることは、神様の名前だけでなく、神様ご自身を軽く扱うことです。ふざけたり、じょうだんで、また、いいかげんな気持ちで、勝って気ままに神様のお名前を用いてはいけません。

○具体的には？

たとえば、「どれにしようかな、神様の言う通り」

という言葉には神様を軽んじる心があるでしょう。「神様のばち罰があたる」と言って人をおどすことは、神様の力を利用することです。

また、信じていないのに「どうか神様、お願いします」と言って神様の名を呼び出すのは、自分の願いをかなえるためです。

御名をみだりに唱えるとき、神様を引き下げて自分が偉くなってしまっているのです。

3. 御名を正しく唱えるために

それでは、神様の御名を正しく唱えるにはどうしたらよいのでしょうか。むやみに唱えることがいけないなら、神様という言葉あまり使わないほうがよいのでしょうか。

私たち人間は、神様に向かって神様の御名を呼んで生きる者として造られました。ですから神様の御心に心から従おうという信仰をもって、神の御名を唱えなくてはなりません。

4. 考えよう

礼拝中や祈りながら心で違うことを考えたりすることは「御名をみだりに唱える」ことにならないだろうか。

5. 名前あてゲーム

まず、クラスの子どもたちに次のことを書いてもらっておく。(人数が少ない場合は教師や他のクラスの子にも協力してもらう)

- ①あなたの一番好きな食べ物は？
- ②得意なことは？
- ③好きな色は？
- ④行ってみたいところは？

☆誰のことをいっているのか、名前をあてる。

〈ねらい〉

- 神の御名をみだりに唱えるとはどういうことなのかを学ぶ。
- 神の御名をふさわしく唱えることはどういうことなのかを学ぶ。

〈展開例〉

質問1

イエスに向かって「主よ、主よ」と言う者とは、何をする者という意味か。

質問2

イエスは、天の国に入るのはどういう者だと言っておられるか。

質問3

かの日に、大勢の者が、イエスに向かって、どんな事を御名によってしたと言うか。

質問4

なぜ御名を唱えてそのような大きな業をしたのに天の国に入ることがゆるされないのだろうか。

質問5

彼らは、どのように御名を用いるべきだったのだろうか。

まとめ

イエスは、ここで神の御名を唱えることの是非を論じておられるのではない。どのような態度で唱えるか、使うかということをおられるの

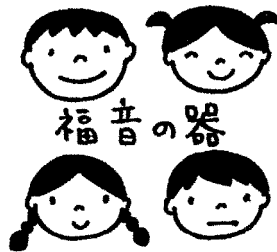
である。

イエスに向かって「主よ、主よ」と言う者のうち、ある者は天の国に入ることがゆるされ、ある者は入ることがゆるされない。その違いは、御名を唱えて何を行ったかということではなく、どういう動機でそれを行ったかということである。預言し、悪霊を追い出し、奇跡を行うこと自体が悪いことであるわけではないが、それが、神の御心を求め、それを行うためになされたのか、それとも自分自身の名誉や利得のために御名を利用してなされたのかということが問題となる。

神の御名は、神御自身を表す。神を真に恐れ、信じ、従う心なしに御名を唱えることは、神を冒瀆するに等しいことになる。神の御名のふさわしい唱え方とは、神を心から信じ、従う思いをもって、祈り、賛美するために御名を唱えることである。

〈祈り〉

神様、私たちは、時として軽率な思いであなたの御名を唱えてしまうことがあることを懺悔いたします。どうか私たちが心からあなたを恐れ、信じ、従う思いをもって、あなたの御名をふさわしい仕方でも唱えることができるようにお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



1. 解放・回復としての安息日

十戒の第四戒は、安息日の聖別です。新約時代のキリスト者にとって、それは主イエスのご復活を記念し祝う喜びの祝日です。けれども歴史の中の教会は、日曜日の恵みを「キリスト教安息日」としても受けとめ、キリスト復活に始まる自由と解放の中にまことの安息を見いだしてきました。

六日の勤勞と、それに続く（あるいは先立つ）安息。安息は、神が人に与えた恵みの内で、最も美しく晴れやかな賜物です。アウグスティヌスの名高い言葉も、この消息を伝えています。「あなたがわたしたちを あなたに向けて創られたからです、そのためわたしたちの心は、あなたのうちに憩うまでは 安らぎをえません」(『告白録』)。

申命記の十戒では、安息の戒めに付けられた理由は、神がイスラエルの民をエジプトの奴隷生活から解放した、という歴史的事実です。奴隷生活の中で、あなたがたはどのような苦難を味わったか。体のみならず、精神的・靈的にも苦しみのどん底にいました。エジプトからの解放は、種々の束縛と辱め、屈辱と絶望からの自由を意味したのです。安息は、その意味で、神の前における喜びと尊厳の回復であり、傷つき病んでいる「神のかたち」の回復への一歩でもあります。

安息日の戒めは、単に選ばれた主の民が恵みと祝福を受けるに留まりません。「牛、ろばなどすべての家畜も、あなたの門の中に寄留する人々も同様」です。ここでは、安息がもたらす自由と解放が、社会的な意味を含み、さらに家畜のような生き物への配慮までが含まれています。安息は、神が配慮しておられる社会生活の隅々まで、そして神の被造物全体の保護にまで及ぶ、遠く広い射程をもっています。キリスト教安息日の恵みも、たんなる魂の平穩という局部的な場所に制限されてはなりません。安息の恵みは、まずもって神との契約に生きる恵みの回復であり、神とその民の絆が再確認される時です。しかし、同時にそれは私たちが隣人との関係を整え、全被造物への神の

配慮を記憶するよう命じる包括的な戒めです。

2. 安息日は生き方の「質」を変える

申命記の安息日理解は、ある意味で出エジプト記の理解より動的です。出エジプト記では、安息日制定の根拠は、天地創造後の神の安息にあります。これに対して、申命記では神の歴史的な解放の「御手と御腕」がいかに力強く伸ばされたかに焦点があります。休息それ自体に目的があるのではなく、神がこの日を聖別された恵みを「思い起こす」ことが重要です。

このような「思い起こし（想起）」は、安息日礼拝の意味を深めるためにも重大な使信を秘めています。主の日の礼拝は、神による自由と解放、十字架による罪のゆるし、復活の命の恵みそのものです。礼拝は、これらの祝福を、被造物全体の安息という終末的な視野で体験し、宣言し、宣教するという意味を担っています。神の御手と御腕の力強い働きが、主の日の礼拝全体を通して教会と世界に向かって働きかける。礼拝は、その事実を目撃しつつ証言する営みとなります。

普段の労働から解かれて礼拝への道が開かれる。そこで明らかになる一つのことは、時間が神の所有であるという真理です。時間は人間の生の伴侶です。しかし、人は時間を自分の所有物のように気ままに用いることによって、かえって自分と他者を見失い、何よりも神への感謝と祈りを失っています。安息日の招きは、神との交わり、隣人との出会いへと私たちを導く福音であり、イエス・キリストのもとに重荷を下ろすよう呼びかける合図のラッパです。

同時に、安息日は、自分の仕事を信頼することからの自由解放です。日々の生活で、私たちはいかに自分を信頼し、自分の仕事に属しつつ生きていることでしょうか。自分の能力や自己信頼に賭けているのです。安息日は、自己信頼という病から解かれて、ありのままの自分が神に受け入れられるときです。 (小野静雄)

6月28日 「第四戒 主の日の安息」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム 問49、50

子どもカテキズム

問49 第四戒は何ですか。

答 「安息日を心に留め、これを聖別せよ」、です。

問50 第四戒で神さまが願っておられることは、何ですか。

答 私たちの安息日は、主イエスさまの復活された日曜日です。

私たちは、この日を主の日として、礼拝のために特別に取り分け、

この日を目指して一週間を歩みます。

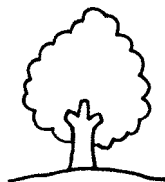
参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問57, 58, 59

安息日とは、「休息の期間」という意味である。何かと色々なものに巻き込まれながら過ごしているこの私たちに、主は安息日という休息の時を与えてくださっている。この安息日には、主が六日間続いた創造の御業を七日目に休まれたように、私たちが日頃の仕事をしばし中断して主の前に憩うのである。

私たちが生きる中で、そして日々の営みを為す中で、そこで重要な意義を持つものとして、優先順位というものがある。そしてこの安息日遵守の戒めは、神様によって私たちに与えられた、正しい優先順位の明示として受け取ることができる。この戒めは日曜日の丸一日を、神様のための時間として、神礼拝のために用いることを求めている。そしてそこでは、それ以外の業の中断が求められているのである。ある業を中断して別の事に体を移すということは、その業の優先順位を、より大切な別の業の故に格下げするという価値判断を伴わざるをえない。つまり第四戒は、私たちが生活の中において、神御自身にこそ最も高い価値を具体的に据えることを求めているのであり、そのこと以上の優先順位を他に置かないという価値判断

を求めている。そしてそれを毎週の生活の中で具体的に実践するということは、人生の最も大切に排他的な基盤を、神様に、さらに毎週欠かさず行う神礼拝に据えて歩むという生き方を意味している。

安息日における「中断」は、私たちの歩みにとっての、それは単なる休止としての無為な時間なのではない。そこにあるのは主との美しい憩いの時であり、その時にこそ私たちは、この世の生き方を休み、主の前に自分をリクリエイトすることができる。また安息日は、主が創造の業を終えて、創造された世界を「極めて良い」と喜んでくださった日でもある。よって私たちも、この日には造られた自分自身の存在の価値を、その尊さを喜ぶことができる。そしてこの日は礼拝の日である故、私たちにとっての主にある交わりの日であり、自分が孤独にはされずに、交わりの中で共に休息し、神を互いに喜び合うという祝福された日である。さらにこの日曜日は、主イエスが墓の中から復活された日であり、主の勝利に自らも連なっていることを確信することのできる、希望の日でもあるのである。 (吉岡契典)



テキスト 申命記 5章12～15節
 カテキズム 子どもカテキズム 問49、50

〔単元のねらい〕

第一戒は、神の恵みを前提として、主なる神への服従を要求し、第二戒は、人に命を与え養う神への忘恩が偶像の捏造と崇拜へと傾く人間本性の罪を指摘し、第三戒は、御名を唱えることが、御名を崇めることへ向かうべきであると指導した。いよいよ第四戒を取り扱う今回は、「神を崇める」という律法の第三効用（聖化の規範）の一貫した目標が「安息日を聖別する」という具体的な指示に至ること、それが聖書の宗教の最も基本的な指針であることを示す。

「聖なるものとなれ」

この中で、小学校1年生のひと、いる？ …… そう！ きみ1年生なの。4月に入学して、5月も過ぎ、もう6月だね。学校での生活には慣れた？ ……そう！ よかったね。それじゃあ、もう時間割なんて、そらで言えるんじゃない？ 月曜日は？ ……「こく・おん・さん・たい・こく」。へえ！ いきなり忙しいね。音楽と体育のあいだに算数があって、国語は朝夕2時間もあるんだね。火曜日は？ ……「こく・さん・ずう・ずう・こく」。なんと！ また国語2時間に算数なんだ。「ずう」って、図工のことだね。その2時間、楽しいんでしょ。水曜日は？ ……「こく・さん・かつ・かつ・おん」。おお！ ちょっと楽になった感じだな。「かつ」って、生活科のことかい。なんか面白そうだね。音楽きいて、帰れるしね。木曜日は？ ……「こく・さん・こく・さん」。そっかあ！ 小学1年生は、とにかく国語と算数をみっちり教えてもらえるんだね。金曜日は？ ……「たい・たい・こく・せい」。体育がまた2時間もあるんだ。頭だけじゃなくって、やっぱり体もどんどん成長する時だもんね。「せい」って、なに？ えっ！ 聖書の授業なんだ。珍しい科目があるんだね。聖書のおはなしを聞いて、一週間のお勉強を終えられるなんて、素晴らしい学校じゃない。ところで、土曜日は？ ……そうなの。今は授業がないけど、これから先は授業が入ってくるんだね。そうになったら、お休みは日曜日だけになるね。日曜日は、

日本の小学校だけじゃなくって、多くの外国の小学校もお休みなんだけど、これ、だれが決めたか、知ってる？ ……どこか大きな国の大統領？ それとも、国際連合の会議？ ……そうじゃないんだ。聖書によって御自分を知らせておられる、神さまなんだ。

聖書のなかに、出エジプト記という書物があって、その20章に、とても有名な「十戒」のみことばがあるんです。その四つ目のみことばに、お休みの日、すなわち「安息日」を神さまがお決めになったことが書かれているんです。「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日のあいだ働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。……六日のあいだに、主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。」(8～11節)

一週七日のなかの一日を聖なる日と定めて、安息のために丸一日を用いること。六日の間は許されている仕事を、七日目に全て休むこと。神さまはこのような生活を人間にお命じになりました。その理由は、神さまが「造り主」で、人間は「造られたもの」だからです。

私たちの命は授けられたもので、神さまこそ命の源です。神さまが天地万物を創造なさった「主」であり、人間はこの方によって造られた「しもべ・

はしため」なのです。私たちの主が天地創造を六日間で完成させ、七日目に休まれたのだから、しもべ・はしためである私たちも神さまの模範に従って生きるべきなのです。

毎週日曜日に、造り主の御業と神さまの御心を思い起こし、そのように生活全体をゆっくり見渡すことが、私たちには必要なのです。

さて、聖書にはもうひとつ、申命記という書物があって、その5章にも、十戒のみことばが記されています。その四つ目は、同じく安息日を定めるみことばですが、それを定める理由がもうひとつあることを教えてくれているのです。「安息日を守って、これを聖別せよ。あなたの神、主が命じられた通りに。……あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばして、あなたを導き出されたことを、思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである。」(12～15節)

一週七日のなかの一日を聖なる日と定めて、安息のために丸一日を用いること。六日の間は許されている仕事を、七日目に全て休むこと。このように命じられる理由が、もうひとつあるのです。それは、神さまが「養い主」であり、人間は「養われるもの」だからです。

神さまは、人に命を授けるだけでなく、その命をどこまでも養おうとしてくださる、父なる神さまです。食べる物と生きる所とを神さまが備えてくださらなければ、私たちは一日たりとも命を保つことができません。人の命を脅かすすべての危険や災難から私たちを救い、私たちの命を守り導くためなら、どんな犠牲を払っても構わない、という御心でいてくださるのです。その御心は、御ひとり子イエスさまの尊い命を十字架の犠牲にすることで、私たちに罪の赦しと永遠の命を与えるという、私たちの思いをはるかに超えた仕方でも果たされました。

毎週日曜日に、私たちは、この養い主なる御父のこころを思い起こし、あの十字架の御子のわざと

を思い巡らし、その命の恵みを鏡として、自分自身のありのままの姿と向き合い、神ではないものを神とした罪や、聖なる方のお名前を汚した罪を思い返して、心から悔い改め、信仰に立ち帰らせていただくことが、私たちには、どうしても必要なのです。

小学校に入って、国語と算数をみっちり勉強させていただくことは、神さまの命の御言葉と造り主の偉大な御業とを理解できるようになるためです。体育と音楽により、こころもからだも柔らかく力強く成長させていただくことは、造り主を賛美して神さまに奉仕するようになるためです。図工は造り主の御手の業を真似すること、それが楽しくて仕方のないのは、私たちが神さまのかたちに似せて造られているからです。

小学校の学年が進み、生活科に加え、社会科や理科を学ばせていただくことは、人間というものを正しく理解できるようになるためです。人は独りでは生きることができません。生まれたときからずっと、人は他の誰かと触れ合い、支えあって生きよう定められているのです。神さまから授けられた命と、託されている恵みとを、みんなで協力して守り、味わい、楽しむよう勧められているのです。そして、すべての国のあらゆる人が、十字架の御子イエスさまを人生の主(あるじ)として従い、創造と摂理の御父を主(ヤハウエ)なる神さまとして崇め、養いと安息に与かるよう導かれているのです。

この大切なことを毎週日曜日に思い起こし、学校生活のすべてをゆっくりと見渡すことが、あなたにも必要です。どうぞ、そのようにしてください。そして、安息日礼拝で知ったこと、感じたこと、味わったこと。そのすべての素晴らしいことを、小学校の「聖書」の授業でも、先生や友達と分かち合えるよう祈りましょう。なぜなら、神さまはこう仰せになるからです。「わたしが聖であるから、あなたがたも聖なるものとなりなさい。」(レビ記11:45) (二宮 創)

[今週の暗唱聖句]

出エジプト記 20章8節

安息日を心に留め、これを聖別せよ。

〈ねらい〉

神様は一週間のうちの一日、日曜日をこの世の営みから離れて、「わたしのもとで休みなさい」と教えておられることを伝えます。

〈子ども観〉

安息日と子どもたちの関係を考えるとき、ある一つのジレンマを覚えます。教会に来てクリスチャンホームの子どもにとって、日曜日とはどんな一日でしょうか。子どもたちは大人より早く教会に集っています。子ども礼拝に出席して御言葉を聴き、賛美し、お祈りをします。そして、お楽しみの分級です。紙芝居が好き！ 工作が大好き！ 聖書かるたに意欲満々の子もいます。

問題はこの後の大人の礼拝です。クリスチャンホームの幼児は大人の礼拝にも出席します。説教が難関、幼稚科の子どもたちはだいたいぐずり始めます。大人が主の前に出ている、子どもも等しく招かれていると言っても我慢の限界です。健康な幼児であれば、運動欲求がありますから、「もう静かに座っているのはいや！」になってしまいます。「まだ？まだ？」と繰り返し母親に尋ねる子どもの姿を見ると、教会に行くの、もういや！と思わないかなと心配になります。

安息日が子どもにとって「日曜日は神様に会えるうれしい日！ 神様、大好き！」と言えるように安息日の祝福について語ります。

〈展開例〉

先週は、元気に保育園に行けたかな。そう、元気に過ごせてよかったです。神様に感謝しましょう。

さて、今日は日曜日です。日曜日はどこにあるかな？（と、ここでカレンダーを提示します）ここです。赤で書いてある一番最初が日曜日です。幼稚園や保育園は月曜日から金曜日までで、土曜日はお休み。そして、日曜日は……教会に来るんだよね。みんなはこうして日曜日に教会に来ています。礼拝を守ります。これは、実は神様が決めたことなのです。神様はすばらしい方、みんなのことを大切に愛してくださる方。その神様が、「日曜日はわたしに会いに来なさい。そして、ゆっくり休みなさい」と招いてくださっているのです。目には見えないけれど、神様は教会の戸口に立って「○○ちゃん、おかえり、まってたよ。よく来たね」と毎週日曜日にみんなを迎えてくださっています。だから、日曜日は「神様、この一週間お守りくださってありがとうございます。また、月曜日から元気に幼稚園（保育園）に行きます」と祈っておうちに帰るのです。

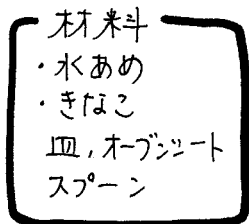
〈お祈り〉

天の父なる神さま、日曜日にわたしたちを礼拝に招いてくださっていて感謝します。神様に待っていてもらえてうれしいです。元気に一週間させるようにみんなをお守りください。アーメン。

〈やってみよう〉

Let's Cooking

▽げんこつあめ▽



- ・ボールに きなこ粉を入れます
- ・水あめを きなこ粉に入れます
- ・水あめに向かって、きなこ粉をまぜ込んで行きます。(A)
- まとまってきたらOK
- …… ことから 子イヌと ……

- ① 小さなあわんに(A)をそれぞれ入れてもらいます。
- ② きなこ粉をサ〜し入れてまぜます。(気分だけ 味かいます)

- ③ オブシットにたねを出してのぼすか。(そい、ちぎる) あわんからサレづツスプーンでとって、手でまぶめる。



- 先に、たねを準備しておくのが、きなこ粉まみれになるのを防ぐポイントです。



〈ねらい〉

週の始まりである日曜日、安息日を心に留める。安息日には、主が六日間の創造の御業をして七日目に休まれたように、わたしたちも主の前に憩うことの大切さを伝える。

〈展開例〉

みんなは、この月曜日から土曜日まで、何をしていたのかな？

うんうん、毎日学校に行ったり、帰ってきて宿題をしたり、友だちと遊んだりして過ごしたね。お家の人にどこかお出かけに連れて行ってもらった人もいるかもしれないね。みんなのお父さんお母さんも同じように仕事へ行ったり料理をしたり、洗濯をしたりして、過ごしていたね。

天地創造のとき、神様は六日の間働いて世界をつくる仕事をされ、七日目に休まれたんだ。その七日目は土曜日だったのだよね。土曜日に神様は休まれたんだ。しかし、今日は何曜日かという日曜日だよ。わたしたちは、日曜日に休んで、神様を今礼拝しています。なぜ土曜日から日曜日に安息日が変わったのかを、みんな考えてみま

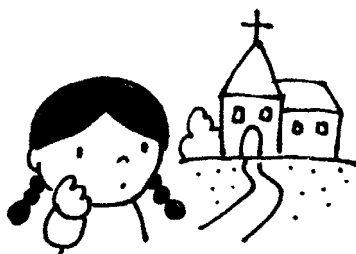
しょう。

それは、救い主であるイエス様がわたしたちの罪のために十字架にかかって死なれ、三日目に復活されたのが日曜日だったので、日曜日に復活を記念して礼拝するようになりました。毎日、学校や習い事に忙しいけれど、神様は日曜日に教会に来て礼拝してほしいと願っておられるのだよ。「聖書の言葉を聞いて祈り、賛美をささげる」。それが礼拝だよ。

じゃあ、日曜日だけ神様のことを考えていたらいいのかな？ それは違うよね。日曜日はお友だちやみんなと一緒に神様を礼拝する日です。毎日、神様を信じて生きるのです。神様は、一週間で礼拝から始めることを心から喜んでくださるのです。

〈お祈り〉

神様、今日もこうしてあなたのことを礼拝できたことを感謝します。毎日、元気に学校に行けてありがとうございます。今日から始まる一週間を守っててください。



〈ねらい〉

安息日はこの私が自分自身のもではなく神様のものであることを覚える日である。

〈展開例〉**1. 手を止めなさいという命令**

私たちは、おとなも子どもも毎日を忙しく過ごしています。しなければいけないこと、やりたいことがいっぱいです。あれもこれもと時間に追われる私たちに対して、神様は「はい、ストップ。今日は安息日ですよ。その手を止めなさい」とおっしゃいます。私たちは仕事や勉強が途中で、それをやめて神様に目を向け、耳を傾けるのです。

2. なぜ、繰り返し安息日を守るの？

手を止めて、ただ疲れをとるために休めばよいのでしょうか。

「安息日を覚えてこれを聖とせよ」の「聖とする」とは、「取り分ける」という意味です。神様を特別に礼拝する日を取り分けなければ、私たちの生活は学校の時間割や忙しい生活に追われ、神様のことを後回しにしてしまいます。神様のことは忘れてはいないけれど、暇になったら礼拝しようでは、いつのまにか自分が第一、神様はその次というあべこべの生き方になってしまうでしょう。

神様がくださった時間を自分の好きなように使い続けられれば、自分が時間や人生を支配できると勘違いしてしまいます。神様なしでもけっこうやれると錯覚してしまいます。

安息日は与えられている時間や自分自身が自分のもではなく、神様のものであることを繰り返し確認する日です。

3. 安息日には何をするの？

安息日ごとに、神様に目を向ける特別な時間が用意されます。そこで、私たちは造り主である神様の方を向いて生きるべき自分を発見します。そして主の救いのみわざを思い起こします。御言葉に養われ、傷ついた心、疲れた心に元気が与えられます。賛美と祈りをもって感謝をささげます。礼拝の喜びと教会の交わりを通して新しい力が与えられ、次の安息日までの日を過ごします。安息日は神様を礼拝し、神様の家族との交わりの中で天国の喜びを味わう素晴らしい日なのです。

4. 一週間カードゲーム**①準備するもの**

画用紙をトランプぐらいの大きさに切ってカードを作る。日曜日から土曜日までを同じ色でカードに書く。(日曜は綺麗に) ゲームをする人が4人なら7枚(一週間分の曜日)×4色。飴や消しゴムなど、つかんでも壊れないものを人数より一つ少なく用意して真ん中におく。

②ルール(ウスノロのルールと同じ)

- ・カードをよくきって、一人7枚ずつ配る。
- ・同じ色の日曜日から土曜日までのカード全部がそろるように、いらぬカードを右隣りの人に送る。(合図で同時に送る)
- ・カードがそろった人は、何も言わないで真ん中においてある飴などを一つ取る。
- ・誰かが飴を取ったら、あとの人も自分のカードがそろってなくても急いで飴を取る。飴を取れなかった人が負け。



〈ねらい〉

- 神が命じておられる安息日の守り方について学ぶ。
- 私たちがなぜ安息の日を守らなければならないのか、その意義について理解する。

〈展開例〉

質問1

安息日とは何か。

質問2

安息日を守るとはどうすることを指しているか。

質問3

安息日を守るように命じられているのは誰／何か。

質問4

なぜ神は安息日を守るように命じられたのか。

質問5

現代の私たちはどのようにこの戒めを守るべきか。

まとめ

イスラエルの人々の安息日は、私たちの現在の暦の土曜日に当たる。神は、この日を休息の日として定められた。家族、使用人、家畜、寄留者のすべてがこの戒めを守る対象とされた。申命記では、この戒めを守る理由が、神の出エジプトの御業を思い起こすこととされている。

すべての仕事を休むということは、何もせずに

漫然と一日過ごすことを意味しているわけではなく、私たちの創造主であり、支え手であり、救い主である主との交わりに専念すること、自分の力に依り頼んで自分自身を支えることからの解放や神の御心を行うことも意味しているが、その中には、社会的に弱い人々に助けの手を差し伸べることや人間以外の動物や環境に対して配慮することも含まれるだろう。神に信頼して休息することとは、ゼロやマイナスではなく、御言葉によって私たちが正しい道にリセットされ、霊肉共にリフレッシュされ、神と共に新しい一週間を歩むために霊肉のエネルギーを充電する非常に大切な営みなのである。

新約の神の民である私たちは、イスラエルの民のように土曜日を安息日とはしないが、主イエスの復活日である日曜日を安息の日として、そのような心構えで守るのである。

〈祈り〉

神様、私たちに安息の特権を与えてくださってありがとうございます。あなたが私たちを支え、導き、救ってくださるので、私たちは自分の力で自分自身を支える必要がありません。週の初めの日をあなたのために聖別し、あなたの御言葉を思い巡らし、あなたの御心にかなうことに努め、霊肉共にあなたの内に安らうことができるようにどうかお助けください。イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン。



2009年7～9月カリキュラム（第34号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
7月5日	第五戒 父母を敬う	問51, 52	ウ小63-66、ハイデ104
		ヨハネ19:25-27	出エジプト20:12 前半
わたしたちの人間関係は、十字架のもとに置かれている。父母を敬おう			
12日	第六戒 殺してはならない	問53, 54	ウ小67-69、ハイデ105-107
		マタイ5:21-26	出エジプト20:13
命は主のもの。人の命の尊さを知ろう。自らの内に殺人の根があることを知ろう			
19日	第七戒 姦淫してはならない	問55, 56	ウ小70-72、ハイデ108, 109
		マタイ19:3-6	出エジプト20:14
人は男と女につくられた。その祝福を学ぼう。結婚の尊さ、神聖さを知ろう			
26日	第八戒 盗んではならない	問57, 58	ウ小73-75、ハイデ110-111
		マタイ25:14-30	出エジプト20:15
すべては主なる神から与えられたもの。神にささげて用いよう			
8月2日	第九戒 偽証してはならない	問59, 60	ウ小76-78、ハイデ112
		ヨシュア7章	出エジプト20:16
神の御前で偽りはしりぞけられる。神はわたしたちに真実を求めておられる			
9日 (平和)	平和を創り出す	—	—
		ローマ12:9-21	ローマ12:18
神は平和の神である。互いに祝福を祈り、身の周りで平和を創り出して歩もう			
16日	第十戒 むさぼりの禁止	問61, 62	ウ小79-81、ハイデ113
		コリントー13章	出エジプト20:17 前半
むさぼって自分のために生きるのではない。愛と感謝をもって、仕えて歩もう			
23日	神のおきてを喜ぶ生活	問63	ウ小87, 89, 90、ハイデ86-91
		テサロニケー1:2-10	詩編119:105
聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、主イエスにならう者として歩もう			
30日	十戒の完成者キリスト	問64	ウ小82-87、ハイデ114, 115
		マタイ5:17-20	マタイ5:17
十戒（律法）を完成するために、主イエスは来られた。十字架の贖いを喜ぼう			
9月6日	教会に生きる（一）	問65	ウ小85、ハイデ54
		ローマ12:1-8	ローマ12:1 後半
聖霊によって結ばれた教会共同体と一つにされて、自らを神にささげて歩もう			
13日	教会に生きる（二）	問66	ウ小85, 86、ハイデ65
		マタイ28:16-20	マタイ28:20 後半
天に上げられた主イエスが豊かな祝福を注いでくださる。主と共に歩もう			
20日 (敬老)	信仰と悔い改め	問67	ウ小86、ハイデ60
		ヨハネ4:1-30	使徒20:21
主イエスと出会い、霊の水をいただいて、神の前に立ち帰ろう			
27日	恵み的手段	問68	ウ小88、ハイデ65
		使徒2:42-47	コリントー3:7
御言葉と礼典と祈りが教会生活の土台である。教会の恵みに生きよう			

2009年度 年間カリキュラム

二年サイクル第1年（子どもカテキズム問1～36）

	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2009年 第33号	4月5日	受難週 進級式	キリストの受難	—
	4月12日	復活祭	復活のキリスト	—
	4月19日		第三部 生活の道 感謝の生活	問37
	4月26日		感謝としての服従	問38
	5月3日		十戒—感謝の道標	問39
	5月10日	母の日	神と人への愛	問40
	5月17日		贖いのみわざ—過越	問41、42
	5月24日		過越の成就—キリスト	問41、42
	5月31日	聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	—
	6月7日		第一戒 神を神とする	問43、44
	6月14日	花の日	第二戒 刻んだ像の禁止	問45、46
	6月22日	父の日	第三戒 神の御名	問47、48
	6月28日		第四戒 主の日の安息	問49、50
	第34号	7月5日		第五戒 父母を敬う
7月12日			第六戒 殺してはならない	問53、54
7月19日			第七戒 姦淫してはならない	問55、56
7月26日			第八戒 盗んではならない	問57、58
8月2日			第九戒 偽証してはならない	問59、60
8月9日		(平和)	平和を創り出す	—
8月16日			第十戒 むさぼりの禁止	問61、62
8月23日			神のおきてを喜ぶ生活	問63
8月30日			十戒の完成者キリスト	問64
9月6日			教会に生きる (一)	問65
9月13日			教会に生きる (二)	問66
9月20日		(敬老の日)	信仰と悔い改め	問67
9月27日			恵みの手段	問68

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
第35号	10月4日		生ける神の御言葉	問69
	10月11日		御言葉への聴従	問70
	10月18日		礼典	問71
	10月25日	宗教改革記念	宗教改革	—
	11月1日		洗礼	問72、73
	11月8日		聖餐	問74、75
	11月15日		祈りとは何か（一）	問76
	11月22日		祈りとは何か（二）	問76
	11月29日	アドベント	待降節	—
	12月6日	アドベント	待降節	—
	12月13日	アドベント	待降節	—
	12月20日	降誕祭	待降祭	—
	12月27日	年末	一年の感謝	—
2010年 第32号	1月3日	新年	新しい一年に向けて	—
	1月10日		祈りのお手本	問77
	1月17日		天の父よ	問78
	1月24日		御名をあげさせたまえ	問79
	1月31日		御国を来たらせたまえ	問80
	2月7日	(信教の自由)	御心の天になるごとく	問81
	2月14日		日用の糧を与えたまえ	問82
	2月21日	レント	我らの罪を赦したまえ	問83
	2月28日	レント	悪より救い出したまえ	問84
	3月7日	レント	頌栄	問85
	3月14日	レント	アーメン	問85
	3月21日	レント	受難節	—
	3月28日	受難週主日	受難週	—

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあがめます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満7年となり、第33号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ60教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

〈執筆よりひとこと〉

- 分級展開例の執筆は、私自身、とても勉強になりました。こんなに集中して熱心に神学したのは初めてで、たくさんの方々の祈りに支えていただかなければ投げ出してしまいそうでした。これからはよき読者に徹します!! (中島雅子)。
- これからの改革派教会を背負う子どもたちが育てばいいなあ……という思いを持って、必死のバッチでがんばりました!!! (大阪教会教会学校教師一同)。
- 子どもたちの信仰の成長が一番の励みです。この働きが実を結ぶことを祈りつつ (漆崎春美)。
- シンプルな教案ですが、参考にしていただけたら幸いです (吉田通志子)。
- 最新号をお手許に届けることができ、ホッとしています。執筆者の皆さまの尊いご奉仕と編集部の方たちの冷や汗をかくような奉仕による、神と皆様と子どもたちへの献げものです。しかし、肝心要になるのは、手にしてくださる皆様の「現場」「実践」です。神が皆さまを通して働かれるその場が、福音の喜びと楽しさで豊かなものとなりますように (相馬伸郎)。
- 昨年9月の編集会議より編集部員として奉仕をさせていただいております。加わってはじめて、編集部そして執筆者の皆様のたいへんなご苦労が身にしみて分かりました。今号までの主の御導きに感謝をいたします (長谷川潤)。

〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』(300円)をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第24号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。
- お求めは下記まで。副読本『主は羊飼いと』『いのちのパン』(相馬伸郎)のお買い求めも下記までご連絡ください。

名古屋岩の上伝道所相馬伸郎まで

〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

〈あとがき〉

- 「諸教派の教会教育事情」は、同盟基督教団の教会教育の取り組みを紹介していただきました。信仰生活の全領域に目配りされた取り組みに教えられます。原稿を執筆してくださった本澤敬子先生に感謝を申し上げます。
- 表紙イラストは、昨年に引き続き、引間裕子姉が担当してくださいます。本文イラストは、岡野美佳姉がご協力くださっています。ほかにも協力者を求めています。ぜひ編集部までお声かけください。
- 弊誌の発送業務を担当して参りました。ご迷惑をおかけしたことも多々あったかと思ひ、この場をお借りしてお詫びを申し上げます。次回から、新しい担当者になる予定です。この奉仕をしていて嬉しいことは、新しく採用して下さる教会から申し込みを受けるときです。悲しいのは、教師が減ったので冊数を減らしてほしいとの連絡を受けるときです。あるとき、「購読を止めます」との電話を受けました。「子どもがいなくても、教会学校を休止したとしても、一冊だけでも継続してくださいませんか」と、信仰的見地から「営業」(?)したこともあります。ご理解を受け、継続してくださいました。教案誌の編集、発行、発送……、そのすべては、専任者や業者に頼らず、奉仕によって担われています。どうぞこれからも個人の祈りのときに、また、祈禱会で、教師会で、弊誌のことを覚えてくださいます。 (相馬伸郎)
- 中部中会の2.11.「信教の自由を守る日」集会で、東京都の小学校の現場で「君が代」の伴奏を拒否して、信仰の戦いをたたかっておられる姉妹の講演を聞きました。学校で起こっていることの実情をわたしたちが知る機会はありません。いつのまにか「君が代」が強制されている現実に驚かされました。信教の自由のみならず、子どもたちの思想・表現の自由が奪われています。東京都で起こっていることは、やがて他の地域でも起こることでしょう。わがこととして取り組むべきであると、また、自分の置かれている地域の実情を知りたいと思われました。子どもたちがどこにあっても神の御前に生きることができるよう、学校現場でたたかっている方々のために祈りましょう。(望月 信)

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	吉岡契典 (仙台カナン教会牧師)
大西良嗣 (滋賀摂理伝道所宣教教師)	説教展開例
巻頭説教	赤石純也 (西神伝道所協力牧師)
鈴木牧雄 (湘南恩寵伝道所協力牧師)	木下裕也 (名古屋教会牧師)
教会学校・日曜学校訪問	長谷川潤 (四日市教会牧師)
鈴蘭台教会日曜学校教師会	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
諸教派の教会教育事情	二宮 創 (中部中会無任所教師)
本澤敬子 (日本同盟基督教団教会教育部員)	分級展開例
講演	幼稚科
相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	中島雅子 (高蔵寺教会教会学校教師)
聖書研究	小学科下級
後藤公子 (前インドネシア派遣女性宣教教師)	大阪教会教会学校教師会
木下裕也 (名古屋教会牧師)	小学科上級
梶浦和城 (豊明教会牧師)	漆崎春美 (金沢伝道所日曜学校教師)
小野静雄 (多治見教会牧師)	中学科
長谷川潤 (四日市教会牧師)	吉田通志子 (仙台教会日曜学校教師)
羽野浩雪 (吉原富士見伝道所宣教教師)	イラスト作画
カテキズム研究	表紙 引間裕子 (秩父教会)
大西良嗣 (滋賀摂理伝道所宣教教師)	本文 岡野美佳 (青葉台教会)
坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)	

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
長谷川潤	四日市教会牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2009年4・5・6月号 (季刊)

第33号

2009年2月22日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)
